国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2022

第14号

学校法人国士舘

Kokushikan

国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2022

第14号

学校法人国士舘

Kokushikan

『楓原（ふうげん）』名称の由来

本誌の由来は、創刊号（平成22年3月）の巻頭言「『楓原』を繹（たず）ねる（室長阿部昭稿）」を抜粋し次に示す。

百年史の編纂を進めるにあたり、調査・研究した成果を発表、蓄積するため、年ごとに「国士舘史研究年報」を公刊することにした。年報には「楓原（ふうげん）」の愛称を付す。「楓」は創立者柴田徳次郎が国士舘教育の象徴として、校章や校旗の意匠に用いてきた。「原」は湧き出たばかりの泉を意味し、ものごとの起源を表す。すなわち「楓原」は国士舘教育の淵源を意味する。

文化財登録5周年記念

国士舘大講堂の改修

国士舘大講堂は、２０１７（平成29）年に国登録有形文化財（建造物）となった。文化財登録５周年を記念して、資料室が所蔵する「国士舘大学大講堂復元保存図　昭和56年12月」から大講堂改修工事の記録写真を紹介する。

大講堂は１９１９（大正８）年に建設された後、幾度か改修工事が行われている。１９８１（昭和56）年の改修記録であるこの資料には、大講堂の図面や堂内照明のデザイン案と共に、大屋根の葺替工事後、施工業者から提出された工事中の写真が綴られている。

1958年葺替時の大屋根と鬼瓦

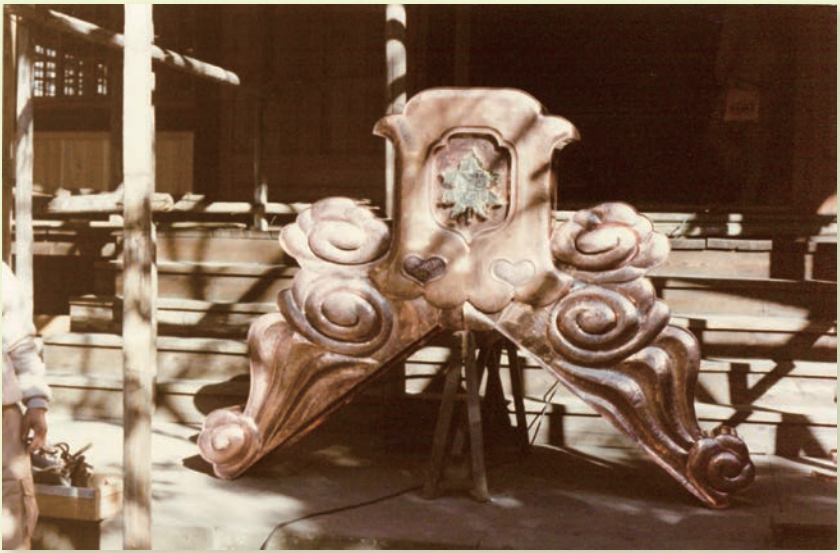
1958年に葺き替えた金属板（アルミ合金か）葺の屋根

新たに銅板葺きとなった大屋根

新しくなった屋根を支える軒先の材木

工事中の堂内

大屋根葺替に先立って新調した正面戸



校章入りの鬼瓦

銅製鬼瓦取り付け

10号館屋上から見た大講堂

国士舘大講堂は、1958年と1981年の2回、大屋根の葺替を行なっている。

この写真が撮られた1981年時には、屋根葺替の他、漆喰外壁の塗り替え、破風などに銅装飾の追加、破風の下にある狐（木連）格子を新調した。堂内の照明も追加・改修している。

この工事に先立ち1980年には、正面戸・通用口戸・窓枠・網戸などの建具を、意匠は建設時のまま新調した。また1982年には、新たに大講堂の東西両脇に掲示板を設置している。この一連の改修工事により、大講堂は現在の姿となった。

巻頭言　国士舘創立一〇五周年を迎えて

国士舘史資料室室長　長谷川　均

創立一〇五周年となった二〇二二（令和四）年は、創建百余年を経た国士舘大講堂が国登録有形文化財（建造物）となって五年の節目の年となりました。来る二〇二七年に向けた創立一一〇周年募金事業においては、大講堂の保全を掲げて広く賛同を募っているところです。本学のシンボル的存在である大講堂を、将来へ受け継ぎ活用していくために、皆様のご理解・ご協力は欠かすことができません。

資料室では、この文化財登録五周年を機として、大講堂を活用した新たな試みを展開しました。文化財の観点から大講堂を紹介する企画展示を大講堂内と三四号館展示コーナーで開催したほか、「大講堂開放週間」と称して学生がその特徴を解説するガイド企画も実施しました。また長期におよぶコロナ禍の影響下にあって、三年ぶりに通例であった諸活動も再開しました。四月には閉室としていた柴田会館四階の展示室を学内者限定で再開放し、一〇月には世田谷区内の中学生職場体験学習の受け入れや、東京都主催の「東京文化財ウィーク」への参加なども再開することができました。さらには、博物館学芸員資格課程における博物館実習生の受け入れも新たに実施しました。

資料室では、これまで受け継いできた大講堂や関連資料を活用しながら、創立一一〇周年、一二〇周年へと着実な活動で歩みを進めて参ります。引き続き国士舘史資料室の取り組みに、一層のご支援をお願い申し上げます。

二〇二三年三月吉日

国士舘史研究年報　二〇二二　楓原　第14号

国士舘史研究年報

目次

巻頭言

国士舘創立一〇五周年を迎えて……長谷川　均　7

研究ノート

戦前の国士舘に存在した「大砲」とその経緯について……後藤　智輝　11

資料紹介

国士舘史関係資料の翻刻ならびに補注　第一三巻……国士舘史資料室　23
国士舘関係歌集
Ⅰ国士舘歌集　28／Ⅱ関連学校歌　59／Ⅲ学生歌集　69／
Ⅳ愛唱歌　93／Ⅴ私製歌　101／Ⅵ参考　102

講演録

第二回学園史講演会
世田谷地域の変遷と国士舘　―地域と歩む「活き方」・国士舘商業学校を中心に―
……佐々　博雄　107

令和４年事業報告

……国士舘史資料室　125

国士舘史資料室の活動

１　調査・収集

(1)　主たる資料調査　(2)　オーラル調査　(3)　主な寄贈資料

２　整理・保存

(1)　資料目録作成状況　(2)　資料電子化・保存措置

３　利用・公開

(1)　収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）　(2)　ホームページ　(3)　教育普及活動

４　室の構成

(1)　職員　(2)　施設の概要

関係規程

国士舘史資料室規程

研究ノート

戦前の国士舘に存在した「大砲」とその経緯について

後藤　智輝

はじめに

国士舘の世田谷キャンパスには、戦前、様々な施設が立ち並んでいた。キャンパスの西端には、近くの松陰神社の旧社殿を移築した国士神社があったが、先の大戦で空襲に遭い、校舎などと共に焼失している。焼失前の国士神社横には大砲が置かれていたことが判っており、当時の学生たちと写った写真がいくつか残されている。この大砲については、国士舘史資料室の収蔵資料データベースでも「大砲」といった説明が付されているものの、詳細は記されていない。

当時、学校などの施設に展示されていた大砲は、軍から下付された戦利品であり、使用を目的としたものではなく、国威発揚などの目的で置かれた展示品である場合がほとんどであった。

学校に下付された大砲を含む、戦利品展示に関する経緯や概要については、籠谷次郎の研究[1]が詳しく、戦利品が下付された概要を明らかにし、各府県の展示事例と、その特徴を捉えている。とはいえ、籠谷の研究は、日清戦争直後に配付された戦利品に限定した考証であり、本稿の扱う大正期に創立した国士舘における大砲の展示時期とは、下付の状況も同一とはいえない。ほかにも戦利品である大砲の展示については、断片的に記載された書籍などはあるものの[2]、まとまったものは少ないといえよう。

本稿では、国士舘に展示された大砲について、当時の姿やその時代を明らかにしておきたい。

1．大砲設置の時代背景と戦利品展示について

日本は、黒船来航の後、近代化を推し進め、明治時代には近代国家としておおよその体制を整えるに至った。初の大規模な対外戦争であった日清戦争、更にはロシアとの日露戦争が勃発するが、辛うじて勝利した日本は、その国土を維持することができた。しかしロシアとの戦闘は国力の限界に達し、多くの戦死者も出すなど日本国全体としてダメージも大きかったことは言うまでもない。とはいえ、一九一四（大正三）年には第一次世界大戦が起こるなど、対外との争いは絶えなかったため、自国での士気向上は日本のみならず各国にとり重要な課題であった。当時の写真などからも容易に確認できる通り、例えば、日露戦争勝利の際には各地で戦勝祝いが行われていたことなどは、その好例であろう。このような状況下において、戦利品展覧会や記念碑建造などが、各地で盛んに行われることになる。[3]

この戦利品の展示に関係する規程は、近代日本初の大きな対外戦争であった日清戦争の「陸軍戦利品整理規程」[4]が最初である。この規程には、戦利品中、軍用に適さないものは、記念として帝室に収めるよう定められたほか、「軍隊其他公衆ノ縦覧ニ供スル陳列場或ハ神社仏閣ニ分与シテ永久之ヲ保存セシメ」と記載されたように、下付に関する規程が設けられた。この規程の制定直後には、一般新聞紙上にも「各高等中学校、各府県尋常中学校及び尋常師範学校等にも分与して国民教育の資料に供すると云ふ」として、「陳列場」の範囲を拡大する旨が発表され、[5]「学校」が加えられることになった。軍用に適さない戦利品には、大砲も含まれており、この規程を根拠として全国に下付され展示に供されたのである。

このように日清戦争の直後から、各地の神社や学校などの人が集まりやすい場所には、軍服、刀、砲弾、大砲などの戦利品が展示されるようになり、多くの人が観覧することになった。しかしながら、陸軍に寄せられる「下付願」は、全国各方面から数多く寄せられたため、実際にはその全ての願い通りに応じることはできなかった。[6]特に、第一次世界大戦の際、日本を含む連合軍とドイツ軍が交戦し、連合軍が勝利した日独戦争においては、そもそも戦利品の数が少ないという事情があり、軍は多くの下付願への対応に苦慮している。当時の『東京朝日新

聞』には次のように記されている。[7]

戦利品中大砲、小銃等記念として下付希望の府県少からざるも今回の戦役は規模小なる為め鹵*獲品僅少にして到底各府県の希望に応ずるを得ざるに依り目下之が処分に就き陸軍当局に於て審議中なりと

*鹵獲（ろかく）…敵から兵器などを獲得すること

陸軍は、後に各施設に対して下付する対応をとったものの、一定の由緒ある神社で熱心な「下付願」に対しても「大正三、四年戦役ノ戦利兵器ハ一般少数ナルノミナラス現品ハ既ニ各府県へ配賦済ニ付餘品無之」との返答を送っている。[8]

その後の各戦役後も、戦利品の「下付願」は軍へと届けられ、一九二七（昭和二）年には計一一件の下付願が出されている。[9]展示場所は、学校、忠魂碑、神社などであり、希望戦利品の内訳は、榴弾砲一件（一門）、野砲一件（一門）、速射砲一件（一門）、カノン砲身六件（各件一個ずつ）、榴霰弾一件（二個）、魚型投下爆弾一件（二個）であった。願い出の理由は、主に精神修養を目的とするものであった。中には忠魂碑の傍らに戦利品の設置を願い出た事案もあり、願文には「碑前ニハ何等献納品モナク実ニ寂寞タル」という文もみられる。[10]この事案からは、戦利品が国威の醸成のための装飾として重要であったことを読み取ることができる。また、戦意高揚を名分としながらも「実ニ寂寞タル」という表記がみられる点は、戦利品の陳列のない碑は、展示されている碑と比べて見劣りしてしまうといった願文の本音を感じとることもできよう。

この一九二七年の下付願一一件のうち、許可となった「野砲一件（一門）」の展示場所というのが国士舘であった。

2. 国士舘への大砲設置の経緯について

一九二七（昭和二）年八月一〇日、陸軍大臣白川義則宛てに国士舘中学校長柴田德次郎が「戦利兵器下付願」を提出している。[11]舘長名ではなく中学校長名で下付願を提出しているのは、おそらく前述した「戦利品整理規程」中にある「各高等中学校、各府県尋常中学校及び尋常師範学校等」[12]という点を意識したものであろう。前述の通り、戦利品の下付願は各地から出されていたが、このよ

うな中で国士舘でも戦利品展示の機運が高まったものと見てよい。提出した「戦利兵器下付願」には、「日清、日露、日独三戦役ニ於ケル戦利品中左記兵器ヲ生徒ノ精神教育資料トシテ」とあるように、教育上の精神修養を目的とした下付願であった。このうち願い出た「左記兵器」は次の通りである。

東京陸軍兵器支廠保管

一、日清戦役戦利　ガットリング機関銃　一門
一、日露戦役戦利　三吋（インチ）野砲　一門
一、日独戦役戦利　馬式機関銃　一門

このように国士舘の下付願には、過去の三戦役の戦利品を各一点ずつ希望しており、それぞれの戦役から「外敵ニ対セシ当時ヲ追想」することで、生徒の精神修養に役立てるという方針であった。

この「下付願」に対して、一九二七年九月一九日には、陸軍省兵器局銃砲課から国士舘への回答が送られている。その回答には、前述三点の戦利品は「参考品」として「保管中」のため「貴意」に応じられないとしつつも、「九十六年式野砲壱門若ハ三十七粍（ミリ）機関砲壱門」ならば「可能」という選択を前提とする内容であった。これに対して国士舘は、「九十六年式野砲」を選択したところ、陸軍省から陸軍本廠長へ以下の「達」が出されている。

陸軍兵器本廠長へ達

左記戦利兵器ヲ東京府荏原郡世田谷町
私立国士舘中学校長柴田徳次郎へ現品
所在地ニ於テ下付方取計フヘシ
但シ荷造及運搬費等ハ総テ被下付者ノ負担トス

左記

一、九十六年式野砲　壱門

以上

この時、国士舘が「野砲」を選択したのは、比較的大きく見栄えがすると判断したからであろう。一般新聞紙上にも戦利の大砲について、「大砲の如きは最も国民の士気を鼓舞し当年の光景を忍ぶ」とあり、[13] 少々勇壮な語を使用している感はあるものの、人々の目を引く存在であったことは確かであろう。このような経緯を辿り、国士舘において九六年式野砲が校内で展示されることとなったのである。

3．校内に展示された大砲について

前述の通り、「戦利品下付願」などの資料から、①国士舘が生徒の精神修養のため各戦役の戦利品下付を希望したこと、②しかし陸軍からは希望通りの下付はできないが、九六年式野砲か三七㎜機関砲であれば下付可能である旨回答があり、③国士舘は九六年式野砲を選択したことを確認した。次に下付されることになった九六式野砲について考察していく。

九六年式野砲は、日独戦争の戦利品として日本が保有していたことが一九一五（大正四）年七月の「戦利兵器保管員数表提出の件」[14]から分かる。同資料によると戦利品「九十六年式七珊（センチ）七野砲」の四門が、陸軍に保有されていた。この野砲は、九六年制式であることや、口径が七．七㎝であるなどの情報から、間違いなくドイツのクルップ社製七．七㎝ Feldlafette96（クルップ七．七㎝九六年式野砲）であることが判断できる。なお「九十六年式」の名称は、ドイツ軍にこの野砲が一八九六年に制式採用されたことによる。

九六年式野砲の製造を行ったドイツのクルップ社は、日本軍にも大砲を多く輸出している。明治期の日本では、世界水準の国産兵器を充分に製作できず、大型の兵器などは特に海外へ発注・輸入していた。野砲に関しても、クルップ社に大砲を注文しており、「克式（クルップしき）」として、関連資料中においても多くの記載がみられる。[15]

特に日露戦争前は、勢力拡大を狙うロシアが、その動きを活発化させていた時期である。日本は、この動向に備えるため、また参考品や研究用として、ドイツのクルップ社から数多くの大砲を購入・輸入していた。またロシアにおいても、自国の大砲のほかクルップ社の大砲を使用しており、日露戦争の戦利品に関連する資料からも「克式」の語が多数見受けられる。[16]このように日露・日独戦争のいずれの時期においても、クルップ社製の野砲が各国において使用されており、戦利品として九六年式野砲も含まれていた可能性が十分にある。

ここまでの考察によって、国士舘が一九二七（昭和二）年八月の「下付願」により校内に展示されることとなった野砲の概要は、ほぼ解明したようにも感じられる。

しかし、国士舘専門学校・中学校の各『卒業アルバム』に写る写真資料から展示野砲を確認すると、ひとつの課

写真１　国士神社と大砲
（第 14 回中学校卒業アルバム 1941 年　国士舘史資料室蔵）

題が残る。筆者が写真を見たところによると、前述した「戦利品下付願」などの資料で確認した「九十六年式野砲」ではなく、ロシア軍の一九〇〇年式「三吋野砲」に酷似しているのである。

写真２　戦利三吋野砲
一部欠損しているが、現存する貴重な戦利砲である
（秩父御嶽神社蔵　筆者撮影）

残念ながら『卒業アルバム』などには、野砲全体を収めた鮮明な写真がないものの、写真１に写る大砲と近似する大砲を秩父御嶽神社の戦利砲[17]（写真２）や『日露戦役写真帖』などでも確認できる[18]。この相違点について、「戦

利品下付願」などの資料には「九十六年式野砲」とあるものの、軍がこれら書類の記載を間違えた可能性も十分に考えられる。実際に、軍は下付作業に追われていたためか、大雑把に「野砲」とのみ記載された書類も散見される。[19] 例えば、秩父御嶽神社には、ロシア軍の三吋野砲が下付され展示されているが、[20]「下付願」に関する資料には「戦利野砲」とのみ記載されている。[21]

ロシア軍の「三吋野砲」は、当時の一般新聞記事にも、優れた野砲として度々登場するが、[22] この三吋野砲には一九〇〇年式と、一九〇二年式が存在する。[23] どちらも日本の野砲に比して優れており、強力な野砲である。この時期における野砲の進化は著しく、日露戦争では新旧が入り混じって使用されていたが、一九〇〇年式野砲は日露戦争後しばらくして第一線から退いている。また第一次世界大戦頃には、九六年式野砲もほかの新式野砲に合わせて改良されている。[24] なお、三吋は約七．六cmであるため、九六年式野砲の口径七．七cmにも近い。変更に関する資料が存在しないため断言できないが、こうした中で、新式の一九〇二年式に比し、共に発射に時間を要し、口径もほぼ同じ一九〇〇年式三吋野砲と九六式野砲[25]を混用してしまったと思われる。旧式のものは雑多な中で混用され、その他大勢としてまとめられてしまったのではないだろうか。そのため陸軍は国士舘に対して、書類上において一九〇〇年式の「三吋野砲」と「九十六年式野砲」を区別せず、実際には異なる型式の大砲を下付してしまったものと思われる。

このため、実際には、国士舘が当初願い出た、日露戦役戦利品の三吋野砲（一九〇〇年式の三吋野砲）を、希望通り下付されていたと推測しても差し支えないと考える。

4．国士舘下付後の大砲について

大砲は、一九二七（昭和二）年に国士舘へ下付された後、当初は大講堂前に展示されていたことが多かったようである。一九二九年三月の国士舘中学校『卒業アルバム』に掲載の大講堂の写真には、野砲の一部が写されている。[26] 一九二九年三月および一九三〇年三月の中学校『卒業アルバム』には、中学校「射撃部」大会での優勝記念写真が大講堂前で撮影され、[27] うち数名の生徒は大砲に

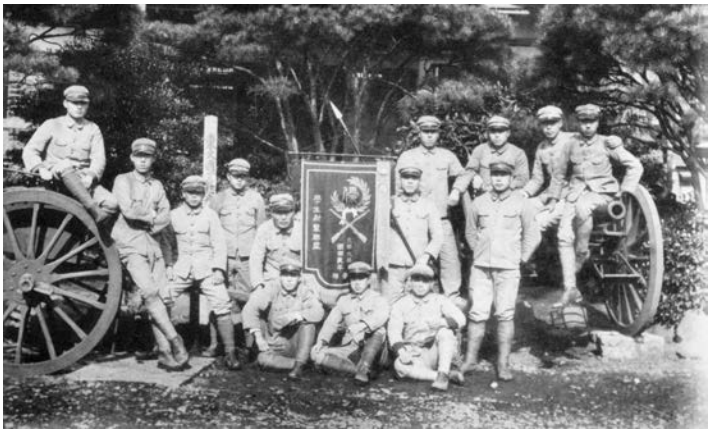


写真３　射撃部集合写真
（第３回中学校卒業アルバム　1930 年　国士舘史資料室蔵）

座っている様子が見られる（写真3）。しかし一九三一年三月の『卒業アルバム』の大講堂前での集合写真[29]には大砲が写っていない。この頃には国士神社の横に移されたらしく、同年の『卒業アルバム』の国士神社の写真には大砲が写っている。その後、一九四二年三月の『卒業アルバム』までは国士神社横に大砲が写っているが、翌一九四三年三月の『卒業アルバム』からは確認できない。大講堂前の写真にも写っておらず、大砲は姿を消している。なお、写真1と写真3には、右側に写る大砲とは別に、左側にも車両を確認することができる。全体像が分かる写真や関連する記録がないため詳細は不明であるが、大砲とともに下付された弾薬などの運搬車や前車などの荷車であると推測され、この運搬車も大砲とともに姿を消している。

この時期は戦争激化に伴い、物資不足となりはじめた時期である。一九四一年には金属類回収令が出され、不足した金属を補うために、鍋や寺院の鐘など多くの金属が強制的に回収されていた。一九四三年になると、更にその回収範囲が拡大している[30]。国士神社から大砲が姿を消した時期とも合致するため、下付された戦利野砲が回収対象となった可能性が高いといえよう。戦利野砲も回収令の対象とされていることは、戦利品を所持していた他の施設も同様であり、この点は一般新聞などからも確認できる[31]。戦利砲の供出は、他の各施設も同様の事例が

多く、もし供出されず残ったとしても戦後ＧＨＱに回収されてしまう場合が多いため、現在残る戦利品としての大砲は、ほんの一握りである。

このように国士舘においても、戦時中に姿を消してしまった大砲ではあるが、校内に展示されていた時期においては、学生と共に写っている写真をいくつか確認できる。一般的な集合写真などのほか、戦争が激化していた時期に該当する年の『卒業アルバム』には、大砲と写る写真には「未来の砲兵隊」といった添え書きもみられる[32]。

本来は、「精神教育資料」のためという理由からの下付であったが、そのほかにも日常的に学生・生徒たちから親しまれていたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、戦利品下付の概要を述べつつ、国士舘において大砲（戦利砲）が展示された経緯・展示された大砲の種類・国士舘に下付された後について考察した。

まず概要として、①戦利品の下付を希望する者は、各戦役直後以外にも多くあったこと、②神社や記念碑・学校や各施設に下付されたが、精神修養を理由としながらも、見栄えや雰囲気の醸成にも必要とされたことが理解できよう。こうした中で、国士舘でも戦利品展示の機運が高まり、下付願いを提出した。当初は三戦役の各戦利品を希望したが、軍の保有する戦利品の関係から、書類上は「九十六年式野砲」が下付される。しかし実際は、希望通り「三吋野砲」が展示されていた可能性が高いが、最後には戦争激化による資源不足で供出されてしまったものと思われる。

国士舘の展示野砲を見ていくと、大砲の下付は当時の情勢と連動していることが分かる。現段階においては、大砲全体が写る鮮明な写真が存在せず、また写真も決して数多く残されているとはいえない。今後、新たな資料が発見されることを期待する。また本来の目的とは別に、学生・生徒たちから親しまれていたようで、当時の学生生活を知る上でも大砲は一役買っていたといえよう。

さらに、写真に写る大砲の有無や位置などから、国士舘校内に関する写真資料の年代特定にも有効ではないだろうか。筆者自身も博物館に寄贈される写真資料の年代

特定を行うことが多々あり、手がかりとなる何の記載もなく、また由来も不明な場合、写ったものの有無などから特定することがある。

若輩者の筆者であるが、本稿から国士舘の世田谷キャンパス史研究の一助に、また戦利品である大砲展示の一事例として類する研究の発展に、少しでも寄与できれば幸いである。

〈注〉

（1）籠谷次郎「日清戦争の「戦利品」と学校・社寺―その配付についての考察―」『社会科学』第五六巻、一九九六年、一頁から四五頁

（2）佐山二郎『大砲入門（新装版）』光人社、二〇〇八年、七五頁から七七頁、四二九頁から四三一頁などにも展示された戦利砲の記載がある。

（3）「八王子の戦利品展覧会」『東京朝日新聞』一九〇五年八月七日朝刊四頁
「浅草の忠魂紀念碑」『東京朝日新聞』一九〇五年一二月一三日朝刊四頁
「紀念会と祝勝会（大阪）」『東京朝日新聞』一九〇四年四月二二日朝刊三頁
この他にも多くの展覧会が開かれ、戦死者の氏名を記載した忠魂碑や記念碑などの建造や、戦勝祝いが行われている。

（4）『官報』第三六三五号、一八九五年八月一〇日

（5）「戦利品と学校」『東京朝日新聞』一八九五年八月一三日朝刊五頁

（6）籠谷も、日清戦争の戦利品下付の際、全てが願通りに下付されていないことを述べている（註1に同じ、三四頁）。各府県に送った後は各地方長官に一任したため、府県毎に対応が異なった（前註1に同じ、一四頁）。

（7）「戦利品の処分調査」『東京朝日新聞』一九一五年一〇月二六日朝刊三頁

（8）「戦利砲弾下付に関する件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03024920300、欧受大日記、大正七年六月（防衛省防衛研究所）

（9）「兵器（其一）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01001893100、永存書類乙集第二類第三冊、昭和二年（防衛省防衛研究所）

(10)「戦利兵器下付の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01001894900、永存書類乙集第二類第三冊、昭和二年（防衛省防衛研究所）

(11)「戦利兵器下付の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01001896500、永存書類乙集第二類第三冊、昭和二年（防衛省防衛研究所）

特に註のない限りこの章で挙げた資料は註11に同じとする。

(12) 前註5に同じ。

(13)「戦利砲の下付地」『東京朝日新聞』一九〇六年一一月一日朝刊三頁

(14)「戦利兵器保管員数表提出の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03024545600、欧受大日記、大正四年七月下（防衛省防衛研究所）

(15)「雑報」『朝日新聞』大阪版一八八二年一〇月八日朝刊一頁

「速射砲買収方の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06082109400、「貳大日記九月」（防衛省防衛研究所）

このほかにも克式の語が確認できる。

(16)「明治三七・八年戦利兵器下附の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03011708700、永存書類乙集第二類第四冊、大正一一年（防衛省防衛研究所）

これには克式の野砲が下付されたことが記載されている。他にもこのよう事例が複数存在する。

(17) この戦利砲は、現在も写真2の通り展示されている。

(18) 小川一真発行兼印刷『日露戦役写真帖』第四巻、一九〇四年、一〇九番「宋家台子東北方ニ於テ鹵獲セル露軍野砲」

(19) 籠谷（前註1に同じ）も、日清戦争時の戦利品下付は事務の複雑を極め、書類のミスがあったことを指摘している。

(20) 前註17に同じ。

(21)「戦利兵器下付の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03012090600、永存書類乙集第二類第三冊、大正一四年（防衛省防衛研究所）

(22)「戦利品を見る」『東京朝日新聞』一九〇四年五月一九日朝刊二頁など。

（23）「仏国歩兵第一四師団長伝令使陸軍参謀大尉ニエッセル著　日露戦術鑑　第三篇　砲兵」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C13110546600、日露戦史史料　日露戦術鑑等（防衛省防衛研究所）
ここには、ロシアの大砲について一九〇〇年式の砲と一九〇二年式の砲が記載されている。ロシアの砲は「真ノ速射砲」とし、特に一九〇二年式は極めて優等と記載している。
前註22などにもロシアの大砲について確認できる。

（24）D.V.E.Nr.414a, *Anhang zum Exerzier-Reglement für die Feldartillerie*, Ernst Siegfried Mittler und Sohn Königliche Hofbuchhandlung, Berlin, 1913, pp.2-5.
『Anhang zum Exerzier-Reglement für die Feldartillerie』とは、帝政ドイツの砲兵が使用した教本である。ここにはFeldlafette96 n/A.（新型の九六年式野砲）も記載されており、第一次世界大戦の際には新型の九六年式野砲が主に使用されていたことが分かる。

（25）既に述べている通り九六年式野砲も後に改良されるが、ここでは従来の九六年式野砲を指す事とする。

（26）第二回中学校卒業アルバム　一九二九年　国士舘史資料室蔵

（27）前註26に同じ。

（28）第三回中学校卒業アルバム　一九三〇年　国士舘史資料室蔵

（29）第四回中学校卒業アルバム　一九三一年　国士舘史資料室蔵

（30）『官報』第一九七五号、一九四三年八月一二日

（31）「靖国の戦利品も応召」『東京朝日新聞』一九四三年二月二六日朝刊三頁

（32）第一五回中学校卒業アルバム広田版　一九四二年　国士舘史資料室蔵

資料紹介

国士舘史関係資料の翻刻ならびに補注　第一三巻

国士舘史資料室

凡例

一　ここには、国士舘史編纂のために調査収集した資料のうちから、翻刻・校訂と補注が終了し、重要度が高いものを順次紹介する。

二　資料には出典を略記し、国士舘史資料室収蔵の資料番号を適宜に付した。また必要に応じて解説を付した。

三　資料名（歌名）に別称があるものは、資料名の下に〈　〉で別称を記した。なお各区分中の資料（歌）の並びは順序不同とした。

四　資料中（歌詞）の表記は、原則として原資料の通りとした。但し、補足した場合には（　）で注記した。

五　資料中（歌詞）の誤記については（　）で訂正、あるいは（ママ）と傍注した。また、後筆は該当文字の部分に「　」を付して傍らに（後筆）と表記した。

六　原則として資料（歌詞）の初出箇所には、原資料表記の有無に関わらず、ふりがな（読み）を傍らに補った。資料中（歌詞）に誤記等がある場合には、傍注した（　）内に正しいと思われるふりがなを追記した。

七　原資料の一部を省略した場合には、該当部分に（前略）・（中略）・（後略）等を明記した。

八　原則として原資料の体裁を保つよう努めたが、改行等については、利用の便に配慮して一部を修正した。

九　漢字は原則として常用漢字に改めた。

一〇　資料の翻刻・校訂は、国士舘史資料室収蔵の原本によった。

一一　資料中に、現代においては差別的表現あるいは個人情報に関わる用語が存在する場合があるが、歴史的語彙としてそのまま表記した。

国士舘関係歌集

Ⅰ　国士舘歌集……28
1、大民団歌……28
2、国士舘舘歌……30
3、国士舘学徒吟〈寮歌・逍遥歌・隊歌〉……34
4、学生歌……39
5、第一応援歌（人混沌に迷う世に…）……40
6、第二応援歌（並木照る白銀に…）……42
7、国士舘応援歌　第一（春秋四十有余年…）……43
8、応援歌（我国士舘の意気富みに…）……44
9、応援歌（富嶽颪吹き荒れて…）……45
10、国士舘中学校歌……46
11、至徳学園校歌……47
12、高校応援部部歌……48
13、剣道部歌（富嶽颪吹き荒れて…）
↓9、応援歌-②（富嶽颪吹き荒れて…）参照……49
14、剣道部部歌（武蔵高原月冴えて…）……49
15、柔道部歌（戦雲暗くたなびきて）……50
16、柔道部歌（人混沌に迷う世に…）
↓5、第一応援歌参照……51
17、言道部部歌……51
18、体操部の歌……53
19、ラグビー部の歌「燃ゆる闘魂」……53
20、ラグビー部の歌「風を呼ぶラガーメン」……54
21、日本拳法部部歌……55
22、空手道部々歌……56
23、合気道部々歌……57
24、国防部々歌……58
25、国士の雄叫び（行進曲）……59
Ⅱ　関連学校歌……59
1、アマゾニア産業研究所・同実業練習所の歌……59
2、門出の歌……61
3、満洲鏡泊学園校歌……63
4、鏡泊学園寮歌……64
5、鏡泊学園数え歌……65
6、鏡泊音頭……67
7、鏡泊湖守備隊歌……68
Ⅲ　学生歌集……69
1、国士舘数え歌
（一つとせ一日二日はびんたで暮す…）……69

2、国士舘五万節（国士舘出てから十余年…）……70
3、寮生哀歌〈国士舘ブルース〉
（身から出ましたさび故に…）……71
4、一回生ブルース（東京名物数あれど…）……76
5、水泳部ブルース
（知らぬこととは云いながら…）……77
6、狼の歌〈風雲児〉（男一匹やるだけやれば…）……78
7、国士舘豪気節
（一つとせ　人に知られた国士舘…）……79
8、花の御江戸の国士舘
（花の御江戸に立つ時は…）……80
9、ツンドカドカドカ
（渋谷の国士か国士の渋谷か…）……81
10、国士大恋歌（酒に対して　まさに唄うべし…）……82
11、突撃音頭（皆さん〳〵選手の後で…）……83
12、国士舘小唄〈国士舘節〉
（春が来たかよ国士のお庭に…）……83
13、国士舘節〈士舘節・国士舘数え歌・応援団節〉
（此処は武蔵か世田谷町か…）……84
14、国士舘節〈士舘節〉
（士舘よいとこ誰いうた…）……86
15、国士舘節〈士舘節〉（男度胸はノーエ…）……87
16、国士舘節
（麻と乱れる天下治め　コリャ〳〵…）……88
17、国士舘デカンショ……90
18、国士舘同志会デカンショ・
オリンピックデカンショ……92
Ⅳ　愛唱歌……93
1、蒙古放浪の歌（心猛くも鬼神ならぬ…）……93
2、人を恋うる歌〈支那浪人の歌〉
（妻をめとらば才たけて…）……94
3、男度胸〈流砂の護り〉（男度胸は鋼の味よ…）……95
4、男なら（男なら男なら…）……96
5、桜花（咲いた桜が男なら…）……96
6、青年日本の歌〈昭和維新の歌〉
（汨羅の淵に波騒ぎ…）……97
7、馬賊の唄（僕も行くから君も行け…）……99
8、その他一覧……100
Ⅴ　私製歌……101
1、母校を懐う歌……101

2、その他一覧……102
Ⅵ　参　考……102
1、関連人物……102
(1)　石川太郎……102
(2)　宗鳳悦……102
2、「歌集」関連の発行物……103

国士舘関係歌集

この翻刻・補注は、国士舘の歴史において成立した「歌」に関する資料を収載し、「国士舘関係歌集」と題した。これらの歌は、時代に応じて学園組織が生んだもの、あるいは学生・生徒の手により生まれたものであり、学生・生徒の間で歌われ、現在に至るという性格を有する。このため文字資料として現在確認できる関係歌は一部であり、さらにその多くは楽譜も無く音声資料が残るものもわずかである。一九六〇～一九八〇年代においては、特に寮生活のなかであるいは部活動（特に武道系クラブ）において、当時の学生生活の一端を示す様々な「歌」が生まれている。歌の用例を示すと、入寮直後あるいは入部直後に上級生から口伝で様々な「歌」を記憶するよう指導され、ある集まりの席上であるいは日々の部活動の終りにといった様々な場面で歌われた。つまり学生生活における集団行動の一環として歌われるものであったといえる。なおこれらの「歌」のなかには吟（いわゆる詩吟）と歌を組み合わせて歌うものも含まれる。

本関係歌集では、国士舘の諸学校における活動（部活動を含む）のなかで成立した歌を「Ⅰ．国士舘歌集」、国士舘の関係者が設置した組織・機関等で歌われたものを「Ⅱ．関連学校歌」、学生・生徒の手により当時の流行歌等を一部改めるなどして歌われたものを「Ⅲ．学生歌集」、広く世間一般に歌われていた歌のなかで当時の学生・生徒が愛唱したものを「Ⅳ．愛唱歌」と位置づけ、各歌を区分して掲載した。

翻刻・補注にあたっては、原則として資料典拠を重視し、メモなどを含む文字資料として現在確認できる歌を対象に掲載した。但し前記の用例に示した通り、口伝のみで歌い継がれた関連歌の存在も十分に推測されることから、ここに掲載した関係歌がすべてを網羅したものではないことを付記する。

この「国士舘関係歌集」は、国士舘史資料室の熊本好宏・畠山典子が編集・執筆を担当した。翻刻・補注にあたっては、一九七〇～一九八〇年頃に本学に在籍した卒業生の協力を得た。特に各歌詞の読み（歌い方）や解説には、鶴見保・宮川英之・古畑譲・鈴木篤・福原一成・菊地眞行その他関係諸氏（敬称略）の知見を頂いた（二〇二二年聞き取り）。

Ⅰ　国士舘歌集

国士舘舘歌をはじめとする学内組織において成立した歌を収載した。なお主に一九六〇年代以降に成立する各部活動の歌に関連して、硬式野球部や少林寺拳法部など部歌のない部も存在するほか、躰道協会の歌「躰道一筋」を歌う躰道部のような部もあり、すべての部活動（クラブ）が独自の部歌を有するものではないことを付記する。

1、大民団歌

成立年代：一九一七年／作詞：柴田徳次郎／作曲：東儀鉄笛

【解題】大民団歌は、国士舘の母体となる青年大民団の歌。歌詞の淵源は、一九一七年五月、柴田徳次郎らが大民同人で夭折した本告辰二（浩々散士）の墓参で佐賀県須古村（現杵島郡）を訪ねた折に柴田が作った詞にある（「偲友行」『大民』二巻五号）。「大民団歌」としては、歌詞のみ『大民』二巻八号（一九一七年八月一日）で初出した後、翌九号（一九一七年九月一日）で楽譜と共に掲載された。後年、新聞『大民』一号（一九三八年四月一五日）に掲載の大民団歌では、歌詞中の「白禍」を「赤禍（社会主義・共産主義を示す）」へと変更している。戦後は、歌詞中の「大民団」を「国士団」「健児団」に置き換えられ、それぞれ「国士団歌」及び「健児団の歌」として変遷した。

①『大民』二巻九号（青年大民団、一九一七年九月一日）

写真1

大民（団・だん）国歌

東儀鉄笛　作曲

一、天の霊示と世の期待
乱麻の四海を平定し
国と人とを救はんと
気負立つたる大民国（団）

二、白禍の勢滔々と
見よ友垣の民草は
色香あせ果て力失せ

血涙尽きて無辜に泣く

三、憂ふる勿れ同胞よ
正義の血汐三吉野の
花と咲き出る日東に
神の力の男児あり
神の力の男児あり

【注】白禍（はくか）…白人・西欧列強の植民地政策を示唆する。／無辜…罪がないこと。／三吉野（みよしの）…「吉野」に美称の接頭語「み」を付したもので、和歌で用いられる吉野の桜の意味。

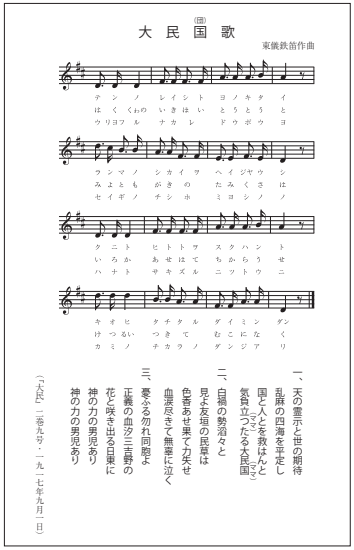


写真１　大民団歌
（『大民』２巻９号、1917 年９月、
『国士舘百年史　史料編上』28 頁より転載）

②国士舘教育関係資料一括（一九六〇年代）［資料番号1701］

一九六〇年代頃の舘長訓話などで学生に配布された一括資料の一紙。楽譜なし。作成年などの詳細は不明。なお、この一括資料以外にも同歌詞で「健児団の歌　柴田徳次郎作」（一九六〇年頃、ペン書・筆不詳［資料番号2929］）も存在し、それには「国士団」が「健児団」に、「大智大慈の利剣あり」が「大和大慈の利剣あり」と記される。

国士団歌

天の霊示と世の期待
乱麻の四海を平定し
国と人とを救わんと
気負ひ起ちたる国士団

核爆弾の惨害を
憤る世界の民草は
妖魔降さん術も無み
血涙つきて無告に泣く

憂うる勿れ同胞よ
正義の血潮み吉野の
桜と匂う日東に
大智大慈の利剣あり
大智大慈の利剣あり

2、国士舘舘歌

成立年代：一九二〇年／作詞：柴田徳次郎／作曲：東儀鉄笛／編曲：石川太郎

【解題】東儀鉄笛作曲の「大民団歌」に、柴田徳次郎が歌詞を付して成立した。国士舘舘歌は、『大民』六巻三号（一九二〇年三月一日）の初出で、当初の歌詞は一番・二番の構成であったが、一九二一年頃には一番が現在につながる「舘歌」へ、また二番は「学徒吟〈寮歌〉」へと変転していった。『第一五回商業学校卒業記念アルバム』（一九四二年一二月）が作られた一九四二年頃から歌詞「ここ武蔵野の一義塾」が「ここ武蔵野の国士舘」へと変わり、現在と同じ「舘歌」の歌詞となる。国士舘の諸学校は、戦前期に成立した独自の中学校校歌および戦後の至徳学園期を除いて、この「舘歌」を校歌とする。

曲は、一九六〇年代に職員で大学吹奏楽部長の石川太郎により編曲され、現在に至る。なお『国士舘大学歌集（カセットテープ版）』（国士舘大学同窓会、一九八五年頃）など大学同窓会の発行物では、現行の楽譜（**写真2**）とは音階が相違する楽譜が記されている。

①『国士舘大学手帳二〇二二』（国士舘大学学生部学生・厚生課、二〇二二年四月）**写真2**

国士舘舘歌

一、霧わけ昇る陽を仰ぎ
梢に高き月を浴び
皇国に殉す大丈夫の
ここ武蔵野の国士舘

二、松陰の祠に節を磨し
　豪徳の鐘気を澄す
　朝な夕なにつく呼吸は
　富嶽颪の天の風

三、区々現身の粗薪に
　大覚の火を打ち点し
　三世十方焼き尽す
　至心の焔あふらばや

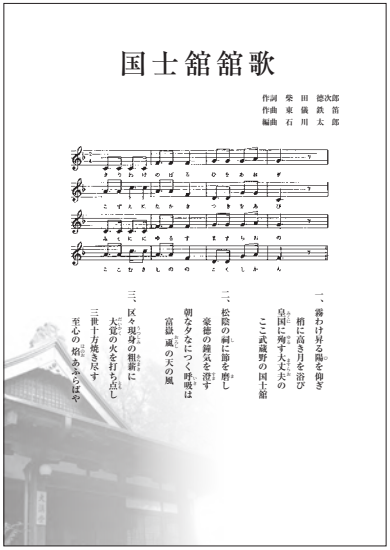


写真２　国士舘々歌
（『国士舘大学手帳 2022』2022 年４月）

【注】区々…ちっぽけなの意味。／大覚（だいかく）…大きな悟り。／三世十方…現在・過去・未来（三世）と四方・四隅・上下（十方）のこと、つまり無限の意。／至心…誠の心、つまり悟りを得た心身の意味。

②『大民』六巻三号（大民団、一九二〇年三月一日）**写真3**

歌詞のみの掲載で楽譜はない。歌詞の一番「太夫山（大夫山）」は、松陰神社周辺の古地名で、同地が毛利藩主毛利大膳大夫の所領であったことに由来する。読みは本来「だいぶやま」であるが、「たゆうやま」「たゆうがやま」の読みが記された別歌もある。なお、歌詞二番は後に「学徒吟〈寮歌〉」として分離独立する（3、学徒吟参照）。

国士舘々歌

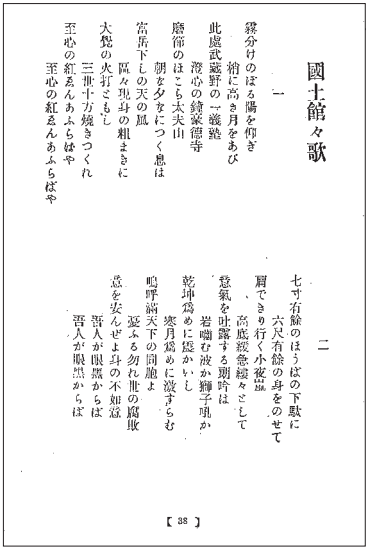
一

霧分けのぼる陽を仰ぎ

梢に高き月をあび
此処武蔵野の一義塾
澄心の鐘豪徳寺
磨節のほこら太夫山
朝な夕なにつく息は
富岳下しの天の風
区々現身の粗まきに
大覚の火打ともし
三世十方焼きつくれ（ママ）
至心の紅（紅炎・ほのお）ゑんあふらばや
至心の紅ゑんあふらばや

二

七寸有余のほうばの下駄に
六尺有余の身をのせて
肩できり行く小夜嵐
高（低・てい）底、緩急縷々として
意気を吐露する朗吟は
岩噛む波か獅子吼か
乾坤為めに震かいし


國士舘々歌

一

霧分けのぼる陽を仰ぎ
梢に高き月をあび
此處武蔵野の一義塾
澄心の鐘豪徳寺
磨節のほこら太夫山
朝な夕なにつく息は
富岳下しの天の風
區々現身の粗まきに
大覺の火打ともし
三世十方焼きつくれ
至心の紅ゑんあふらばや

二

七寸有餘のほうばの下駄に
六尺有餘の身をのせて
肩できり行く小夜嵐
高底緩急縷々として
意氣を吐露する朗吟は
岩噛む波か獅子吼か
乾坤爲めに震かいし
寒月爲めに激すらむ
嗚呼滿天下の同胞よ
憂ふる勿れ世の腐敗
意を安んぜよ身の不如意
吾人が眼黒からば

【38】

写真３　国士舘々歌
（『大民』６巻３号、1920 年３月）

寒月為めに激すらむ
嗚呼満天下の同胞よ
憂ふる勿れ世の腐敗
意を安んぜよ身の不如意
吾人が眼黒からば
吾人が眼黒からば

③『大民』七巻七号（大民倶楽部、一九二一年七月）

『大民』七巻七号から、②（『大民』六巻三号）の歌詞の一番「澄心の鐘豪徳寺　磨節のほこら太夫山」と二番が掲載されなくなる。

国士舘々歌

霧分け昇る陽を仰ぎ
梢に高き月を浴び
此処武蔵野の一義塾
朝な夕なにつく息は
富嶽颪の天の風
区々現身の粗薪に
大覚の火を打ともし
三世十方焼き尽くす
至心の紅焔煽らばや
至心の紅焔煽らばや

④『国士舘要覧』（財団法人国士舘、一九二二年七月頃）**写真4**

直近の③（『大民』七巻七号）と同歌詞であるが、途中「区々現身の…」で区切られて二番と表記・掲載される。また②（『大民』六巻三号）に見えていた二番「七寸有余の…」は「国士舘寮歌〈学徒吟〉」として分離独立させ掲載している（3、学徒吟参照）。楽譜なし。

⑤『国士舘と教育（初版）』財団法人国士舘、一九二六年一一月四日　**写真5**

『国士舘々報』一巻二号（国士舘出版部、一九二五年一一月一七日）及び『国士舘と教育（初版）』に歌詞と楽譜が初めて掲載される。歌詞は現在とほぼ同じとなるが、楽譜は「大民団歌」（**写真1**）と同一である。

⑥『国士舘大学歌集（CD版）』（国士舘大学同窓会、二〇一二年二月）

写真４　国士舘々歌（上）と国士舘寮歌（下）
（『国士舘要覧』1922 年７月）

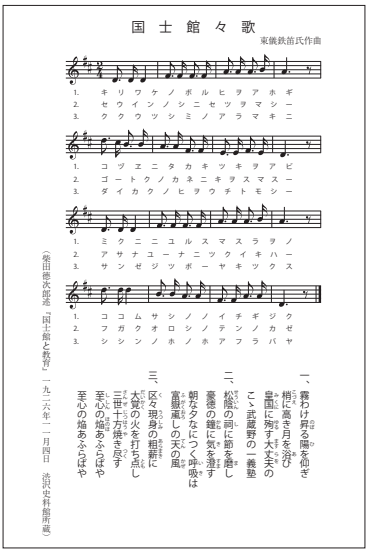


写真５　国士舘々歌
（『国士舘と教育（初版）』1926 年 11 月、『国士舘百年史　史料編上』185 頁より転載）

大学同窓会発行の『歌集（カセットテープ版）』は一九八五年の作成で、一九九三年頃にはCD版となり現在に至る。カセットテープ版から付されている小冊子には、全収録歌の歌詞と楽譜が掲載されるが、本資料（CD版）を含む大学同窓会の発行物では、学園発行の「国士舘大学手帳」（**写真２**）等とは音階の異なる楽譜が掲載されている。

3、国士舘学徒吟〈寮歌・逍遥歌・隊歌〉

成立年代：一九二一年頃／作詞：柴田德次郎／作曲：不明／採譜：石川太郎

【解題】もとは『大民』六巻三号（一九二〇年）に掲載された「舘歌」歌詞（2、舘歌-②）の二番である。一九二一年頃に分離独立し、『国士舘要覧』（一九二二年七月頃）に「寮歌」として掲載された（2、舘歌-④参照）。その後は「寮歌」「学徒吟」「逍遥歌」「隊歌」などさまざまな名称で歌い継がれ、また一九六〇年頃には歌詞が増え一～六番の構成となって現在に至るが、原則として寮（寄宿舎）で歌われる歌である。舘歌と同様、一九六〇年代に職員の石川太郎が曲を採譜・編曲した。なお、戦前から別バージョンの歌詞も存在しており（**写真６**）、寮別（または専攻武道の別）に一部を改変した歌詞で歌われたと推測できる。また同一歌詞にもかかわらず、一～四番としたり（『学生生活のしおり一九七六』）、あるいは一～三番としたり（『学生生活のしおり一九七八』）するなど、歌詞の区切り箇所に相違がみられるものもある。また、歌詞冒頭の「七寸」の読み方は、「ななすん」（『学生生活のしおり一九七八』まで）と「しちすん」（『学

生生活のしおり　昭和五五年度（一九八〇）』以降）の両方の資料が存在する。

①『国士舘要覧』（国士舘、一九二二年七月頃）**写真4**

舘歌②『大民』六巻三号（大民団、一九二〇年三月一日）に掲載された「国士舘々歌」の二番の歌詞が、本資料で分離独立し「国士舘寮歌」の名称で初掲された。楽譜なし。

国士舘寮歌

一、七寸有余の朴歯の下駄に
六尺豊の身をのせて
肩で切りゆく小夜嵐
高低緩急縷々として
意気を吐露する朗吟は
岩噛む涛か獅子吼へか

二、乾坤為めに震駭し
寒月為めに激すらむ
嗚呼満天下の同胞よ
憂ふるなかれ世の腐敗
意を安ぜよ身の不如意
吾人が眼黒からば
吾人が眼黒からば

【注】縷々…途切れることなく続くこと。／乾坤…天地の意。

②『霧分け　卒業記念誌』（国士舘高等学校、一九五二年四月二八日）

高等学校の卒業記念文集での掲載で、歌詞は現行の「学徒吟」（『国士舘大学手帳二〇二二』ほか、但し一～六番構成）と類似の区切り構成となるものの、タイトルは「逍遥歌」であり三番構成となっている。なお、戦後の一九四六年一月より国士舘は「至徳学園」に改称し、一九五三年四月に「国士舘」に復すが、一九五二年作の本資料が「国士舘高等学校」表記で発行されている点は興味深い。楽譜なし。

逍遥歌

一、七寸有余の方歯の下駄に
六尺豊かの身をのせて
肩で切りゆく小夜嵐
荒天寒久(高低緩急)縷々として

二、意気を吐露する浪吟(朗)は
岩噛む波か獅子吠えか
健魂(乾坤)ために震概(駭)し
寒月ために激すらん

三、ああ満天下の同朋(どうほう)よ
うれうるなれ世のすたれ
身をやすんぜよ世の人よ
吾人が瞳(まなこ)黒からば
吾人が瞳黒からば

③国士舘歌集綴（一九八九年頃・鈴木篤旧蔵資料）［資料番号5088］

一九八〇～一九八九年頃に鈴木篤（一九八二年法学部卒）氏によって収集された歌関連の一括資料の一部。この歌はノートに歌詞のみを手書きされたもので楽譜はない。タイトルは「隊歌」とあり、歌詞は②「逍遥歌」④「寮歌」などと若干異なる。さらに、一九四二年一二月『専門学校剣道科卒業記念アルバム』（**写真6**）に、二番歌詞の掲載が見えることから、この「隊歌」は戦前期より存在した①「寮歌」の別バージョンと推測される。一九八〇年代の卒業生によれば、この三番歌詞に見える「大太鼓」は、剣道部学生のみが歌う歌詞であり、通例は「陣太鼓」と歌うものとする（鶴見・宮川）。さらに剣道部では寮内で使用の太鼓を「大太鼓」と呼称したという（戸川博志）。つまり先述の『剣道科卒業アルバム』等の記載も推し量れば、この「隊歌」は、戦前から剣道部（剣道部の寮を含）のみで歌われた歌詞と考えられる。なおタイトル「隊歌」の「隊」については不詳。

隊歌(たいか)

一、七寸有余の朴歯の下駄に

六尺豊の身を乗せて
肩で切り行く小夜嵐
勇士堂々君見ずや

二、意気を吐露する朗吟は
うそぶく虎か龍巻か
乾坤為に震動し
嵐雲為に激すらん

三、とうとうと鳴る大太鼓
四海の眠り呼び覚し
熱火相打つ掛声に

写真６　寮歌
（『第九回国士舘専門学校剣道科（卒業アルバム）』1941 年３月）

報国武道の誇りあり

四、此の身は野辺に朽ちぬとも
大和魂留むべき
松陰の祠を受け継ぎて
国士我等は此に起つ
国士我等は此に起つ

【注】四海…世界の意。

④『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

応援用の各歌を収載した『歌集』は、歌詞のみで楽譜の記載はない。本資料『歌集』の寮歌は①～③と比して、歌詞が増え一～六番構成となるが、後に「学徒吟（寮歌）」「学徒吟」のタイトルとして現在に至る（『学生生活のしおり』など）。この寮歌は、前身となる②「逍遥歌」（一～三番構成）と比して三～五番歌詞の追加がみられる。また、追加分のうち三～四番をみれば、前出③「隊歌」の歌詞でもあることから、戦前から存在した複数の歌を

一つにまとめたものとも考えられる。つまり本資料『歌集』掲載の寮歌（後の「学徒吟（寮歌）」「学徒吟」）は、既に存在した②「逍遥歌」（一・二・六番）、③「隊歌」（三～四番、戦前の成立と推測）、及び追加の五番（詳細不詳も既存歌の一部と推測）をあわせ、寮生のための歌として一九六〇代前半には成立したものと推測できる。

寮歌

一、七寸有余の朴の下駄に
六尺豊かな身を乗せて
肩で切り行く小夜嵐
高低緩急縷縷として

二、意気を吐露する朗吟は
巌かむ浪か獅子吼えか
乾坤為に震駭し
寒月為に激すらん

三、とうとう鳴る陣太鼓
四海の眠り呼び覚し
熱火相打つ掛声に
報国武道の誇りあり

四、此の身は野辺に朽ちぬとも
大和魂とどむべし
松陰の祠を受け継ぎて
国士我等は此処に起つ

五、大道捨たれて仁義あり
天下乱れて吾人あり
皇国に殉す大丈夫の
意気天を衝く国士舘

六、嗚呼満天下の同胞よ
憂うる勿れ世の腐敗
意を安んぜよ身の不如意
吾人が眼黒からば
吾人が眼黒からば

4、学生歌

成立年代：一九六三年頃／作詞：戸村晃／作曲：戸村晃／採譜：宗鳳悦

【解題】一九六三年頃に応援団学生の戸村晃（一九六五年政経学部卒）が作った歌。第二応援歌と同時期の成立と推定（6、第二応援歌参照）。曲は、文学部講師（声楽等）の宗鳳悦が採譜した楽譜の写しが残る（**写真7**）。冒頭部分歌詞の表記は「武蔵野野辺に…」と「武蔵の野辺に…」が混在している。

①舞鶴寮新入生案内（国士舘大学鶴川分校舞鶴寮、一九六五年五月）

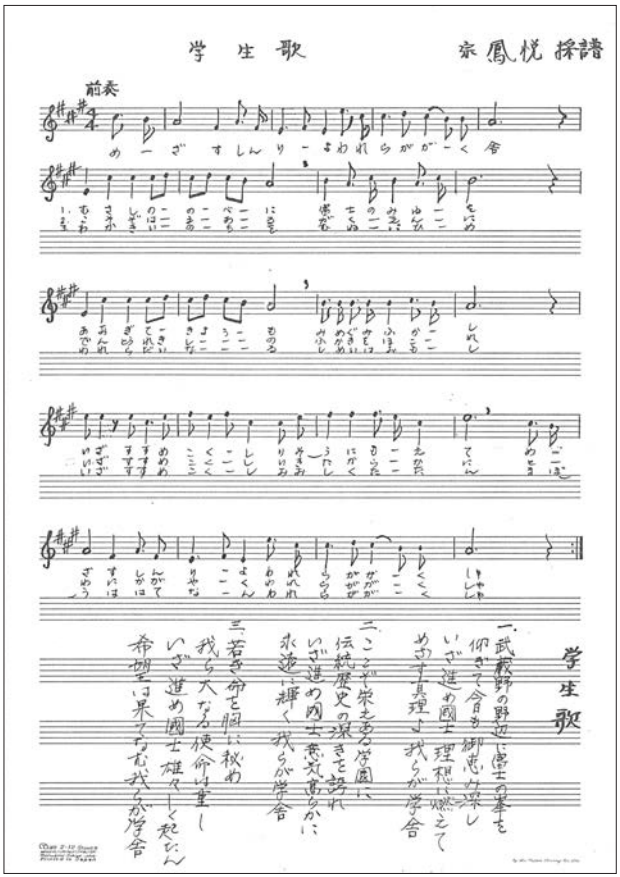


写真７　宗鳳悦採譜「学生歌」
（鈴木篤旧蔵国士舘歌集綴）

舞鶴寮のアクセスや規則などが書かれた新入生用案内三紙の裏面に国士舘大学々生歌・第一応援歌など国士舘関係歌九件の歌詞が刷られている。

国士舘大学々生歌

一、武蔵の野辺に富士の嶺を
仰ぎて今日も　御恵深し
いざ進め国士　理想に燃えて
めざす真理よ我等が学舎

二、此処ぞ栄ある学園に
伝統歴史の深きを誇れ
いざ進め国士　意気高らかに
永遠に輝く我等が学舎

三、若き生命を胸にしめ
我等が大なる使命は重し
いざ進め国士　雄々しく立たん
希望は果てなん我等が学舎

5、第一応援歌（人混沌に迷う世に…）

成立年代：不明（一九六〇年以前）／作詞：不明／作曲：不明／採譜：宗鳳悦

【解題】「人混沌に迷う世に…」から始まるこの応援歌は、一部の資料では「柔道部歌」となっていることから、元は柔道部歌か柔道部の応援歌であった可能性がある。なお、別の応援歌（7–①「春秋四十有余年…」）または現在の第二応援歌（6–①「並木照る白銀に…」）を「第一応援歌」「国士舘応援歌　第一」として、本応援歌を「第二応援歌」「国士舘応援歌　第二」としている資料もある。現在の第二応援歌（6–①）より以前の成立年である。曲は、文学部講師（声楽等）の宗鳳悦が採譜した楽譜の写しが残る（**写真8**）が、旧海軍の「艦隊勤務」（瀬戸口藤吉作曲）をもとにした歌とも伝わる。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

第一応援歌

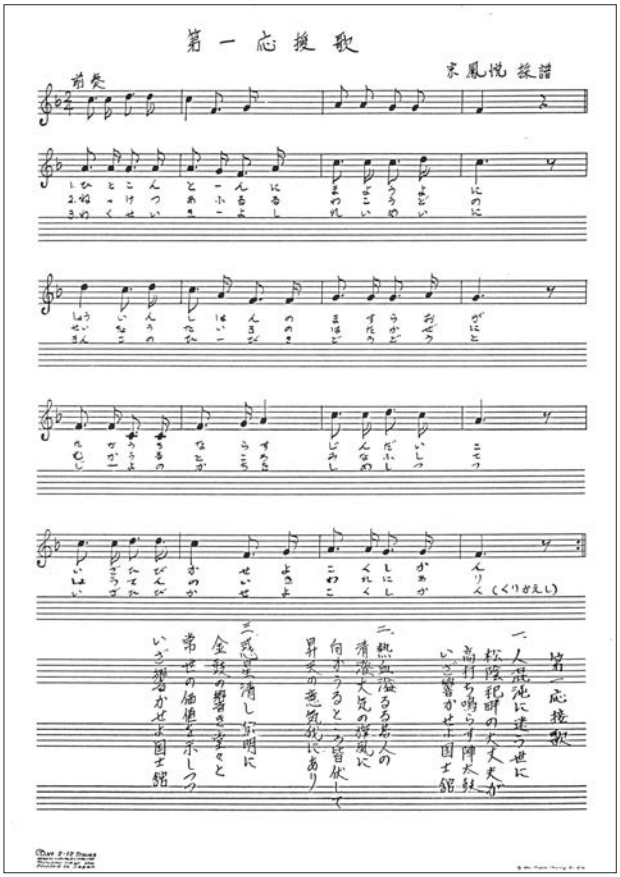


写真８　宗鳳悦採譜「第一応援歌」
（鈴木篤旧蔵国士舘歌集綴）

一、人混沌に迷う世に
松陰祀畔の大丈夫が
高打ち鳴らす陣太鼓
いざ響かせよ国士舘

二、熱血溢るゝ若人の
清澄大気の旗風に
迎うる処皆伏して
衝天の意気我にあり

三、惑星清し黎明に
金鼓の響き堂々と

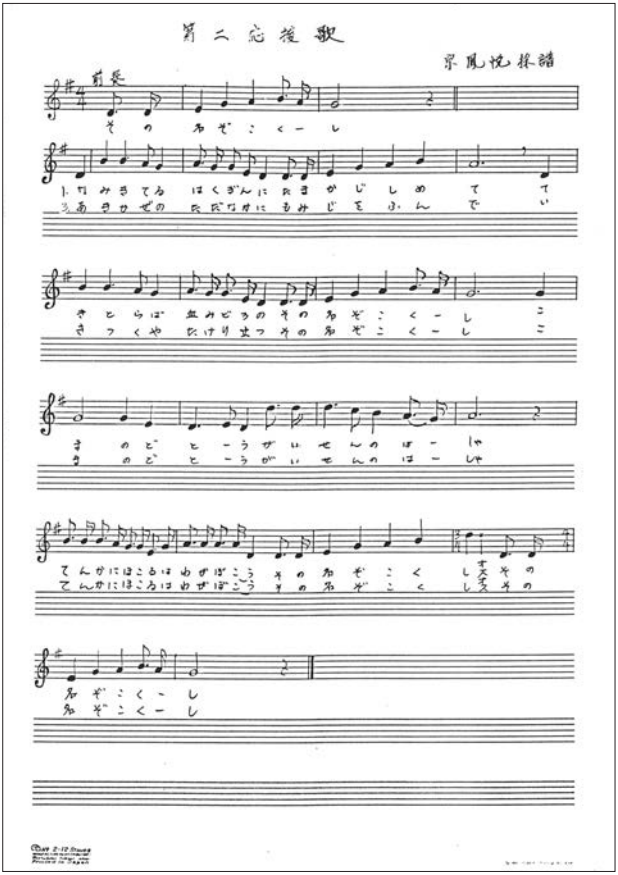


写真９　宗鳳悦採譜「第二応援歌」
（鈴木篤旧蔵国士舘歌集綴）

常世の勝を示しつゝ
いざ響かせよ国士舘
いざ響かせよ国士舘

6、第二応援歌（並木照る白銀に…）

成立年代：一九六三年頃／作詞：仲谷禎磨／作曲：仲谷禎磨／採譜：宗鳳悦

【解題】「並木照る白銀に…」から始まる応援歌で、一九六三年四月頃に応援団学生の仲谷禎磨（一九六五年政経学部卒）により作られた。橋田靖夫（一九六五年政経学部卒）の回顧によれば、応援団草創期において応援歌を増やすため「第二」応援歌の制作を仲谷禎磨・戸村晃に

指示したとする（二〇一四年一一月聞き取り）。学生歌（4-①）と同時期の成立と推定。曲は、文学部講師（声楽等）の宗鳳悦が採譜した楽譜の写しが残る（**写真9**）。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

第二応援歌

一、並木照る白銀に玉かじ締めて
　敵とらば血みどろのその名ぞ国士
　駒の怒濤を凱旋の覇者
　天下に誇るは我が母校
　その名ぞ国士　オス
　その名ぞ国士

二、口笛で歌う（原文ママ）
　駒の怒濤を凱旋の覇者
　天下に誇るは我が母校
　その名ぞ国士　オス
　その名ぞ国士

三、秋風の唯中に紅葉を踏んで
　意気衝くや猛けり起つその名ぞ国士

7、国士舘応援歌　第一（春秋四十有余年…）

成立年代：不明（一九六〇年頃）／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「春秋四十有余年…」で始まる応援歌で、一九六〇年頃、学生に配布されたプリントに掲載されている。なお、プリントではこの歌を「国士舘応援歌　第一」とし、「人混沌に迷う世に…」から始まる現・第一応援歌（5-①）を「国士舘応援歌　第二」としている。成立年は、国士舘一九一七年の国士舘創立年から「四十有余年」を経たとの歌詞から推定。

①国士舘教育関係資料一括（一九六〇年代）［資料番号1701］

一九六〇年代頃の舘長訓話などで学生に配布された一括資料の一紙。楽譜なし。

国士舘応援歌　第一

一、春秋四十有余年
　国士の伝統君知るや
　熱と意気とにきたえたる
　我等が鉄壁選手団

二、武蔵野原の炎天に
　松　陰祠畔の観月に
　共にちかいてはげみたる
　我等が同志選手団

三、紅葉が原のえいにない
　今こそ来れり競技場
　心は常に共にあり
　我等が希望選手団

8、応援歌（我国士舘の意気富みに…）

成立年代：不明（一九七〇年以前）／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「我国士舘の意気富みに…」から始まる応援歌で、一九七〇年の「言道歌集」六号以外の資料は確認できない。また「15、柔道部歌」と類似の歌詞を含むことから、元は柔道部の歌であったとも推測される。

①「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

大学言道部で作成された歌集。発声練習に歌唱を取り入れたため、言道部独自に歌集が作成された。楽譜なし。

応援歌

一、我国士舘の意気富みに
　燃ゆる高嶺の富士の山
　岩より固きこの胸を
　今日の戦に燃やさばや

二、花の吹雪と散る身こそ
　実に武士の幸なれや
　肉弾なりて行くところ
　誰れが向うる敵あらん

三、戦雲暗く　柵（棚・たな）引きて
若き生命と清き名の
為に我らが振うとき
いかでか勝たで帰るべき

四、輝く最後の栄冠を
誓いてとらん我腕に
勝つも敗るも堂々と
力の限り戦いて
倒れてのちに上（止・や）まんこそ

9、応援歌（富嶽颪吹き荒れて…）

成立年代：不明（一九七〇年以前）／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「富嶽颪吹き荒れて…」から始まる応援歌。「剣道部歌」とする資料も確認できる（9–②参照）。

①「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

応援歌

一、富嶽颪吹き荒れて
戦雲巻くや大夫山
昇天の意気高らかに
進まん哉や　いざやいざ

二、一角崩れ又崩る
敵の陣営色めけば
疾風迅雷踊り込む
剽悍決死の我健児

三、我等は勝ちぬ優勝の
旗は燦たり夕陽に
勝鬨の声　張り上げて
帰らん哉や　いざやいざ

【注】剽悍…素早く荒々しいこと。

②国士舘関連歌歌詞一括（作成年不明）楽譜なし［資料番号7374］

国士舘関係歌の歌詞が列記された一括資料の一紙で、

一九九〇年代に職員佐々木宗興が粗年表作成のために収集・使用したもの（粗年表編集資料）。本資料は複写コピーに佐々木ほか複数人の後筆・訂正跡がある。「13・14、剣道部歌」に関連。

剣道部歌（後筆「心援歌」）

一、富嶽（後筆「風」）嵐　吹き荒れて
　戦雲巻くや大富士
　勝天（社）の意気、敵営に
　いさみて向ふ常勝軍
　一角くずる又くずれ
　敵の陣営いろめけば
　疾風陣来（迅雷）躍りこむ
　ひようかん（後筆「剽悍」）決死の我が健児
　我等は勝ちぬ優勝の
　旗はさんたり夕陽に
　勝時の声張り上げて
　帰らんかなや、いざやいざ

10、国士舘中学校校歌

成立年代：一九三九年頃／作詞：土井晩翠／作曲：山田耕筰（耕作）

【解題】中学校校歌は、一九三六年三月卒業の第九期卒業生から制作費の寄付を受け、作詞を土井晩翠、作曲を山田耕筰に依頼して制作された。これは一九四〇年六月一〇日付で文部大臣から「唱歌用歌詞楽曲」としての校歌採用の認可を受けている。なお制作後の校歌を在学生徒が歌ったかは不明である。

①「昭和一二年度　国士舘中学校校友会会報」一号（国士舘中学校校友会、一九三七年三月）

寄付を受けた翌年発行の本資料「校友会会報」には、新校歌の歌詞が掲載される。但し楽譜の掲載はない。この時点で曲は未完成であったとも推測される。

国士舘中学校校歌
土井晩翠作

一、武蔵原頭（むさしげんとう）　松陰神社（しょういんじんじゃ）

其そば近くに　われらの校舎
朝夕仰ぐは　無双の富嶽

二、殉難報国　尊き犠牲
誉の烈士を　模範と仰ぐ
健児の一団　勉たるところ

三、文武の二道を　合せて磨く
青春盛りの　血潮は熱し
希望の光は　高らに照らす

四、祖先の伝統　わが身に継ぎて
四海平和の　理想に尽し
日本の誉を　世界に掲げむ

②国士舘中学校校歌採用認可申請書（一九三九年一〇月二五日、東京都公文書館所蔵）

国士舘中学校が一九三九年一〇月二五日付で東京府に提出した本資料には、校歌制作の経緯と歌詞・楽譜（**写真10**）が記される。全文は『国士舘百年史　史料編上』1部3章3節史料48（七七六頁）参照。

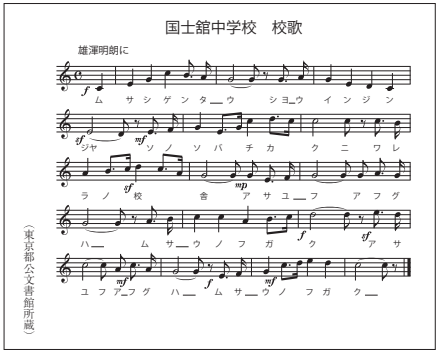


写真10　中学校校歌楽譜
（中学校校歌採用認可申請書、1939年10月、東京都公文書館所蔵、『国士舘百年史　史料編上』より転載）

11、至徳学園校歌

成立年代：一九四六年頃／作詞：鮎澤巌／作曲：（フランス国歌）

【解題】終戦後、GHQ／SCAPによる占領下の影響を受けて、一九四六年一月に国士舘は「至徳学園」へと名称を変更する。これに伴って従来の国士舘館歌に代わり校歌も新たに制作された。楽譜は確認できないが、作詞鮎澤巌、曲はフランス国歌を元とすると伝わる（『国

士舘百年史　通史編』三五九頁参照）。

①「昭和二十二年度　至徳専門学校卒業生名簿」（至徳専門学校、一九四七年二月二一日）［資料番号486］

至徳学園校歌

一、見よや日本の同胞よ　至徳学園に
更生の決意に燃えて希望に
かゞやく全日本の健児団。
封建独喜の弊挙りて打ち攘ひ自由と友愛の
理想に血はたぎる　吁人類の福社を念じ
務めはげむ使命に　われらは起てり。

二、聞けや諸びと黎明に　至徳学園の
樹陰の静寂を破り校庭に
どよめく若人の喊声を。
誠意勤労気魄見識を旨とし正義と博愛に
使命を捧げつゝ　吁日本の再建のため
奮ひすゝむわれらの　誓は固し。

三、来れ四海の同胞よ　至徳学園に
真理の擁護のために敢然と
たゝかふ人道の十字軍。
武断専制の敵悉く打ち破り民主的文明の
社会をきづくため　吁永遠の平和を目指し
いざや往かむ世界の　同志よ来れ。

12、高校応援部部歌

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

①応援部手帳（応援部、一九九七年頃）

国士舘高等学校応援部の手帳。舘歌や応援歌などの歌詞や楽譜、応援部内規のほか、弁論の方法、書道・暦などの教養に関する内容も多く収載する。一部の歌には楽譜あり。

応援部部歌

一、松陰の杜の桜の下で、胸に刻みし
我らが教え

ひとつに礼節　ふたつに気力
これが国士の応援部
我らが国士の応援部

二、声を鍛える　武蔵野の夏
振りを磨く　武蔵野の夏
道を究める　武蔵野の夏
これが国士の応援部
我らが国士の応援部

三、豪徳の鐘を朝に聞けば
梅もほころぶ　弥生の空に
己が姿を無心に探る
これが国士の応援部
我らが国士の応援部

13、剣道部歌（富嶽颪吹き荒れて…）→「9、応援歌―②（富嶽颪吹き荒れて…）」参照。

14、剣道部部歌（武蔵高原月冴えて…）

成立年代：一九六二年頃／作詞：村上済／作曲：不明

【解題】作詞した村上済（一九六四年体育学部卒、剣道部五期）の回顧記には、三年次生の村上が「喧嘩」による無期限停学処分を受け松陰神社で物思いに耽っている時に浮かんだ詩をもとに作ったとある（『国士舘大学回天剣友会五十周年記念誌』二〇一二年三月、国士舘大学回天剣友会、三九頁）。三番の歌詞は学徒吟〈寮歌〉（3―③・④）を引用している。

①ＬＰブック『国士』（一九七四年一月二六日、柴田徳次郎一周忌記念制作）

ＬＰブック『国士』は、創立者柴田徳次郎一周忌を記念し有志によって制作されたもので、収録歌詞を含めた記念誌にＬＰレコード二枚が同梱された装丁である。楽譜なし。

国士舘大学剣道部部歌

一、武蔵高原月冴えて

松陰森の月青し
剣士の胸はひと燃えて
刃にさわる月青し
あー　国士舘の剣道部
あゝ　国士舘の剣道（部）

二、水珠かぶる夏の日に
珠なす汗の心地良さ
真冬の板場凍りなば
我血潮をもて温めん
あー　国士舘の剣道部
あゝ　国士舘の剣道（部）

三、トオ　トオ　トオ　なる大太鼓
死（四・し）界の眠り呼び醒ます
熱火相打つ掛け声に
皇国武道の誇りあり
あー　国士舘の剣道部
あゝ　国士舘の剣道（部）

②『国士舘大学回天剣友会五十年史』（国士舘大学回天剣友会、二〇一二年三月）

前記①ＬＰブック『国士』掲載の剣道部歌と比して、歌詞二番「真冬の板場凍りなば」が「真冬の道場凍りなば」に、三番冒頭部が「滔々と鳴る大太鼓」に、同じく三番「皇国武道の誇りあり」が「報国武道の誇りあり」に変化して掲載されている。楽譜なし。

15、柔道部歌（戦雲暗くたなびきて）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】本歌は、歌詞の順序や区切りに相違がみえるものの「8、応援歌」に類似しており、両歌の成立年は明確でないが柔道部以外の応援でも歌われるようになるものとも推測される。

①国士舘関連歌歌詞一括（作成年不明）楽譜なし［資料番号7374］

国士舘関係歌の歌詞が列記された一括資料の一紙で、一九九〇年代に職員佐々木宗興が粗年表作成のために収集・使用したもの（粗年表編集資料）。本資料は複写コピー

に佐々木ほか複数人の後筆・訂正跡がある。この他に掲載される資料は確認できない。

柔道部歌

一、戦雲暗くたなびきて
若き命と清き名の
為に吾等が奮ふ時
何時でか勝で帰るべき

二、輝く最后の栄冠を
誓ひて取らん我が腕に
勝も負も堂々と
真の道を踏み行かん

三、力の限り戦いて
倒れてのちにやまん時
吾に正しき奮闘は
天地の神もみそなはず

16、柔道部歌（人混沌に迷う世に…）→「5．第一応援歌」参照。

17、言道部部歌

成立年代：一九六一年頃／作詞：島津定泰／作曲：石川太郎

【解題】一九六一年頃創部の言道部の歌。作詞の島津定泰は、福岡県出身、東京商科大卒を経て海軍予備中尉の来歴で、創部時に言道部「師範」に迎えられた。一九六三年九月に奉職（副室勤務・教授待遇職員）も一九六五年九月に急逝した。言道部「部歌」のほか「言道部綱領」第一・第二など、その演壇練習・発声練習に必要な素材が島津の作で整えられた。

①「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

言道部部歌

一、沸々と
燃ゆる血潮を胸に秘め

故郷出でて武蔵野の
国士の舘に学びしが
歴史は流れて早三年
叫べ見識　わが言道部

二、ほのぼのと
春の陽浴びて爛漫と
桜花は今も匂へども
昔に代る日本の
まことの姿既になし
叫べ誠意の　わが言道部

三、堂々と
馬上豊かに三間の
槍をしごきし若武者の
出陣に似たこの首途
魂　吐きて悔ゆるなし
叫べ雄々しき　わが言道部

四、月悲し
万山黄ばみて秋たけぬ
まこと捧げしつわものの
あとに続きてその夢を
果すことこそわが務め
叫べ気魄の　わが言道部

五、松柏の
みどりのうるわし大八州
正気抱きて尚眠る
民一億よこぞりたて
正論叫びて世を創る
あゝ天の声　わが言道部

作　島津定泰

②LPブック『国士』（一九七四年一月二六日、柴田徳次郎一周忌記念制作）

言道部部歌①の二・四番の歌詞がなくなり、一・三・五番の歌詞が一～三番となっている。

18、体操部の歌

成立年代：一九六四年頃／作詞：山下武士／作曲：佐々木敏之／編曲：石川太郎

【解題】東京オリンピックの頃、体操競技部副部長の池田睦彦の発案で「意気高揚」のための歌を作ることになり、体育学部七期の部員佐々木敏之が作曲、同六期の部員山下武士が作詞し、石川太郎の編曲によって成立した（『国士舘大学体操競技部創立三〇周年記念誌』国士舘大学体操競技部後援会、一九八六年三月二五日、一八七頁）。

①『国士舘大学体操競技部創立三〇周年記念誌』（国士舘大学体操競技部後援会、一九八六年三月二五日）楽譜あり

体操部の歌

作詞　山下武士
作曲　佐々木敏之
編曲　石川太郎

一、花紅いに　香る身の
燃ゆる胸の火　意気高し
日頃鍛えし　この心　いざや見ん
我等国士の体操部

二、血潮よたぎれ　誰が胸に
険しき道の　遠くとも
日頃学びし　この技を　いざ示せ
我等国士の体操部

三、高き望に　この斗志
今ぞ語らん　我集い
日頃誓いし　この団結よ　いざ進め
我等国士の体操部

19、ラグビー部の歌「燃ゆる闘魂」

成立年代：不明（一九五九年以降）／作詞：二ツ森修／作曲：新賢一／編曲：高松伸光

【解題】作詞の二ツ森修（一九六三年体育学部卒）は、一九五九年ラグビー部創部時の部員であり、のちにラグビー部監督・体育学部教授となる。

①『国士舘大学ラグビー部創部三〇周年記念誌　勇魂』
（国士舘大学ラグビー部・国士舘大学ラグビー部後援会、一九九二年一一月二七日）楽譜なし

国士舘大学ラグビー部の歌1
燃ゆる闘魂
二ツ森修　作詞、新賢一　作曲、
高松伸光　編曲

開明めざす両雄の精神磨きし我らの館
フィフティーン・フィフティーン　血潮は燃ゆる
ワインカラーのスクラムで
ゴールをめざして押し進め
轟け轟け武蔵野に　今我らに敵はなし
国士　国士　国士館

今敬天の節至る　技をきたえし我らの館
フィフティーン・フィフティーン　流れる汗に
ワインカラーのスクラムで
ゴールをめざして突き進め
轟け轟け武蔵野に　今我らに敵はなし
国士　国士　国士館

仁愛深し建学の　心技一体我らの館
フィフティーン・フィフティーン　気魄が宿る
ワインカラーのスクラムで
ゴールをめざして命をかけろ
轟け轟け武蔵野に　今我らに敵はなし
国士　国士　国士館

20、ラグビー部の歌「風を呼ぶラガーメン」

成立年代：不明（一九五九年以降）／作詞：のまたくま／作曲：新賢一／編曲：高松伸光

①『国士舘大学ラグビー部創部三〇周年記念誌　勇魂』
（国士舘大学ラグビー部・国士舘大学ラグビー部後援会、一九九二年一一月二七日）楽譜なし

国士舘大学ラグビー部の歌2
風を呼ぶラガーメン

のまたくま　作詞、新賢一　作曲、
高松伸光　編曲

風に走れ　無心に走れ
風の色が　変わるまで
鍛えた心　鍛えた身体
ラグビーボール　追いかけろ
命を燃やせ　命を燃やせ
我らが母校
国士　国士　国士舘ラグビー部

風を呼ぶよ　未来を運ぶ
君よ走れ　ゴールまで
平和の戦士　平和の国士
闘う勇姿　光る汗
血潮よ燃えろ　血潮よ燃えろ
我らが母校
国士　国士　国士舘ラグビー部

風と走れ　仲間と走れ
フィフティーン　ラガーメン
チームを信じ　勝利をつかめ
スクラム組んで　突き進め
炎と燃えろ　炎と燃えろ
我らが母校
国士　国士　国士舘ラグビー部

21、日本拳法部部歌

成立年代：不明（一九七〇年頃）／作詞：浅野寛／作曲：浅野寛

【解題】作詞・作曲の浅野寛は、一九七四年文学部卒の学生と推測される。

①「国士舘日本拳法部創部五〇周年記念式典（プログラム）」（国士舘日本拳法部、二〇一四年二月一五日）歌中、「武田節」（作詞　米山愛紫、作曲　明本京静、一九六一年）が挿入されている。楽譜なし。

国士舘大学日本拳法部　部歌

作詞・作曲　第八代　浅野寛

一、夜の渋谷の道玄坂で
　稽古帰りに呑む酒は
　右手に左手に盃持って
　唄う歌なら武田節
《甲斐の山々陽に映えて
　われ出陣にうれいなし
　おのおの馬は飼いたるや
　妻子につつがあらざるや　あらざるや》

二、酒を呑んでも呑まれちゃならぬ
　明日の試合の決め技は
　左面突き右突き蹴りで
　肉を切らせて骨を断つ

三、花のお江戸の国士の杜に
　今日も聞こえる掛け声は
　男命をリングに懸けた
　これぞ国士の拳法部　押忍
　これぞ国士の拳法部　押忍

22、空手道部々歌

成立年代：一九八三年頃／作詞：高木正朝／作曲：山羽三郎

【解題】地下階に空手道場が整備された一九八三年四月の柴田会舘の竣工に際し、「空手道々場新築落成記念」として日本空手協会の高木正朝から献歌された歌である。

①『国士舘大学空手道部五十周年記念誌』（国士舘大学空手道部・国空会、二〇一四年二月一日）楽譜あり

国士舘大学空手道部々歌

作詞　社団法人日本空手協会
総本部　高木正朝

一、若い血潮の高鳴りに
　汗にまみれて火と燃ゆる
　熱烈練磨の闘魂は
　あゝ国士舘空手道

二、希望溢れる青春の
　拳に誓う友情よ
　正義の讃歌高らかに
　あゝ国士舘空手道

三、世界に開く建学の
　理想の道に燦然と
　文化の光　掲げたり
　あゝ国士舘空手道

プログラム目次では「合気道同好会歌（合気道同好会）」と記載される。歌詞中の「たゆうが山」は「大夫山（だいぶやま）」（松陰神社周辺の古地名）を指すと推定する。楽譜なし。

合気道部々歌

一、ああ我が胸にたぎり立つ
　義憤の血潮いかにせん
　世の流布を消さんとす
　国士我等が合気道

二、春は桜か　秋なら紅葉
　咲いて見事な松陰祠畔
　誓って（五百人・ごじん）御仁を清めんと
　たゆうが山に我等立つ

三、日（ひ）が西山に沈（しず）むころ
　熱気溢（ねっきあふ）るる青畳（あおだたみ）
　朋友（ほうゆう）互（たが）いに練磨（れんま）して

23、合気道部々歌

成立年代：不明（一九六二年頃）／作詞：不明／作曲：（青年日本の歌・三上卓）

【解題】原曲は一九三〇年に海軍中尉三上卓が作った「青年日本の歌（昭和維新の歌）」（Ⅳ-6参照）の替え歌である（宮川）。

①「国士舘健児熱血歌唱祭（プログラム）」（国士舘健児熱血歌唱祭実行委員会、一九八五年頃）［資料番号22623］

合気精神汲み取らん
合気精神汲み取らん

24、国防部々歌

成立年代：不明（一九七〇年頃）／作詞：不明／作曲：（民族の歌・古賀政男）

【解題】原曲は一九六九年一二月発表の「民族の歌」（作詞児玉誉士夫・作曲古賀政男）の替え歌である。国防部（国防研究部）は一九六二年頃の創部で、当初は高等学校教諭斎藤朋雄を部長として活動した。部は一九七八年六月に解散指示（「会報」五三-三九号）が出されるも、有志による活動は続けられた。

①合気道部心得メモ（一九八〇年頃、宮川英之氏所蔵）

楽譜なし［資料番号22626］

国防部々歌

一、若き力を青春に
賭けていざ行く我が道を
護国尊皇七生報国
いざ行け国士の国防部

二、桜花散る国士舘
意気は木霊し丹沢嶺に
此処に捧げて愛する母校
進め国士の国防部

三、憂国目指す曙は
我が栄光意気の声
菊の薫る武蔵野に
轟け国士の国防部

四、嵐の中を我等行く
響け雄叫び松陰杜に
遥るか彼方に白雲靡く
輝け国士の国防部

〈

25、国士の雄叫び（行進曲）

成立年代：一九七〇年／作詞：（歌詞なし）／作曲：石川太郎

【解題】戦後、各式典で実施された分列行進の際には軍艦マーチを使用していたが、職員で大学吹奏楽部部長の石川太郎が発案し、国士舘に相応しい行進曲として舘歌をテーマに作曲した（石川太郎「吹奏楽部一〇年の歩み」一九七三年頃〈「ブラスバンドの十年の歩み綴」〉）。成立直後の一九七〇年三月一〇日に、7インチレコード「舘歌・寮歌／「国士の雄叫び」」として収録・発行されている。

Ⅱ　関連学校歌

国士舘の関係者が設置したアマゾニア産業研究所及び満洲鏡泊学園の関連歌を収載した。これらは一九三〇年設置の国士舘高等拓植学校に関連する組織・機関である。

1、アマゾニア産業研究所・同実業練習所の歌

成立年代：一九三〇年一二月頃／作詞：上塚司／作曲：陸軍戸山学校軍楽隊

【解題】国士舘高等拓植学校卒業後の入植候補地として、一九三〇年一〇月、ブラジル国アマゾナス州に設けたアマゾニア産業研究所と附属実業練習所の所長上塚司の作詞による。『大民』第一七年三号（一九三一年三月）の掲載記事には、アマゾン第二次調査で渡伯中の上塚が、大西洋の船上から国士舘に宛てた近況に同歌の成立が示されている。曲の成立は、上塚帰国前後の一九三一年三月と推測。なお同歌は一九三二年四月、上塚によって神奈川県橘樹郡生田村（現川崎市多摩区東三田）に設置された日本高等拓植学校の「校歌」となる。

①「門出の歌・アマゾニア産業研究所・同実業練習所の歌」（一九三〇年五月二〇日）［資料番号20959ほか］

共に上塚司の作詞である「門出の歌」と「アマゾニア産業研究所・同実業練習所の歌」の歌詞を一紙に印刷したもの。歌詞は『大民』第一七年三号（一九三一年三月）、『アマゾニア産業研究所月報』第一号（一九三一年八月）にも掲載。楽譜なし。

アマゾニア産業研究所・同　実業練習所の歌

上塚　司

第一節　希望

碧り綾なす大空に
金色の雲照り映へて
霞に咽ぶアマゾンの
流れ豊けき朝ぼらけ
草踏み分けて岸に立つ
健児の胸に希望あり

第二節　学舎

溶（洋・よう）ようとしてたゆみなく
水は揺ぎて四千里
北ブラジルの中枢に
七大河川の合しては
大江に入る要地こそ
我が学舎の在る所

第三節　植民地

広ぼう八百余万町
緑の森は天を蔽ひ
清き流れは地を洗ふ
南十字の星影に
カカオ花咲き風薫る
新日本の植民地

第四節　土民

アンヂラ河の高台に
斜に懸る三日月は
世の推移を外にして
椰子の葉蔭に白銀の
砂を蹴りつゝ舞ひ狂ふ
太古の民を照すかな

第五節　創造

白鷺の群嬉々として
渚に遊ぶジョゼアツスウ
肥沃の高台の木の間より
ブランタマキナ（原文ママ）（播種機）の冴ゆる音は

天地万有創造の
歓喜に満つ（る）楽の音か

第六節　努力
神の御庫に秘められし
富源の扉開かんと
重き使命を荷ひつゝ
大和男子が振りかざす
フオイセ（原文ママ）（長柄の鍬）の先に世を救ふ
新文明の光あり

第七節　建設
高き理想に燃へ立ちて
朝な夕なに若人が
原生林に打揮ふ
斧の響に建国の
尊き歴史は刻まれん
我等の歴史を作らばや

以上

2、門出の歌

成立年代：一九三〇年五月二〇日／作詞：上塚司／作曲：陸軍戸山学校軍楽隊

【解題】一九三〇（昭和五）年四月に設置した国士舘高等拓植学校の第一回卒業生のうち三五名が一九三一年四月一九日に横浜を出港してブラジルに向かう際に歌ったとされる。

①「門出の歌・アマゾニア産業研究所・同実業練習所の歌」（一九三〇年五月二〇日）［資料番号20959ほか］

門出の歌　上塚司

第一
男子一度決すれば
如何なる事か成らざらん
遠く渡りてアマゾンに
新日本を樹てよとの
君が　御訓畏みて
今日を門出の晴の旅

第二

希望の海に棹させば
早や祖国の島影は
霞の中に消へ去りて
紺青の波南溟に
浮ぶは大英帝国の
東亜の鎖鑰香港か

第三

世界の咽喉と誰が言ひし
新嘉坡の埠頭に
高く聳ゆる銅像は
スタンフオードラツフルが
偉業を偲ぶジオンブルの
無限の感謝凝る所

第四

草奔の志士クライブが
一剣天下の　志
已むに止まれぬ鬱勃の
燃ゆる思ひはベンガルの
湾頭高く翻る
ユニオンジヤツクの旗に見る

第五

恋を失ひ肺を病み
広き天地に容れられず
悶々の情アフリカに
新帝国を築きてし
セシールローヅの跡訪へば
健児の胸は躍るかな

第六

海路遥かに天孫の
パリンチンスに来て見れば
天の潤ひ地の恵み
生々として蔽ほひ立つ
原生林の広がりは
アンデス以東三千里

第七

これぞ我等の発祥地
いなゝく駒に跨りて
小手をかざして眺れば
今烈々の朝日影
はてしもしらぬ樹の海の
雲を破りて昇り行く

昭和五年五月廿日

【注】鎖鑰（さやく）…要衝の地。／スタンフォード・ラッフル…イギリスの植民地行政官、近代シンガポール建国の父。／ジオンブル…ジョン・ブル、イギリス人のこと。／クライブ…ロバート・クライブ、英領インドの基礎を築いたイギリス軍人。／セシル・ローズ…南アフリカの鉱山業で巨富を得て植民地首相となったイギリス人。

3、満洲鏡泊学園校歌

成立年代：一九三三年七月頃／作詞：真野正順／作曲：山田耕筰

【解題】一九三二年一〇月、国士舘理事の山田悌一らが満洲国に「満洲鏡泊学園」を設置する。しかし一九三四年五月に匪賊の襲撃で山田らが死去した後、満洲鏡泊学園は翌年七月に解散となる。作詞は国士舘評議員・理事の真野正順。作曲は、後に国士舘中学校校歌（I-10参照）の作曲も手掛けた山田耕筰。本歌は一九三三年七月に成立し、同年八月に渡満予定の学生らが、国士舘の柔道場でレコードに合わせて校歌の練習をしたという（野田美鴻『先師録』、私家版、一九七八年一月）。この頃の制作と推測するSPレコード「鏡泊学園の歌（中野忠晴独唱、山田耕筰ピアノ伴奏）／合唱満洲興国の歌（山田耕筰指揮、江文也・日本コロムビア合唱団、同バンド伴奏）」（日本コロムビア社）が現存する。

①『国士館大学新聞』二三七号（国士舘大学新聞編集局、一九八三年五月二七日）
鏡泊学園殉難者五〇回忌追悼法要を伝える記事に楽譜と共に掲載。

満州鏡泊学園校歌

真野正順　作詞
山田耕筰　作曲

一、北溟の空　風暗く
星影淡き鏡泊の
湖畔に来たり朝霧を
破りて崇き高邁の
東亜の炬火かかげ立つ
日東の健男児、健男児我等

二、渤海の昔　王者出で
王化を遠く布しより
幾星霜や草の跡
沃土再び王道の
恵みに返す人や誰
日満の健男児、健男児我等

三、奥長白の嶺清く
牡丹の流れ岸を噛む
山水紫明の地を選み
質実剛毅の理想郷
打ち拓くべく渡り来し
日東の健男児、健男児我等

四、嗚呼神州の大丈夫が
汗と血をもて築きつる
王土の上に輝ける
理想は遠く空越えて
亜細亜全土の炬火とならん
日満の健男児、健男児我等

4、鏡泊学園寮歌

成立年代：一九三二年頃／作詞：田中七治／作曲：田中七治

【解題】作詞・作曲を手掛けた田中七治は、満洲鏡泊学園の「園医」「学園医」の役にあり（『満洲鏡泊学園渡満者名簿』一九三三年八月ほか）、鏡泊学園の音楽隊も指導した（鏡泊学園アルバム『湖畔の炬火（ひかり）』、一九三五年頃）。

①『鏡泊』二巻四号（満洲鏡泊学園本部、一九三四年一〇月一五日）

雑誌『鏡泊』は、吉林省の鏡泊学園本部から年四回ほど発行された。内容は、学園近況や農業、現地の歴史・地理、川柳など。楽譜なし。

鏡泊学園寮歌

作歌　田中七治

一、沖に逆巻く黒潮の
瀬よりもはやき若人の
血潮の色の紅きかな
再び還らぬ青春の
身をば鍛えん時ぞ今
起て学園の健男児

二、歴史栄ある大亜細亜
青年亜細亜に幸あれと
崇き希望の炬と燃えて
やむにやまれぬ大和魂
尊き縁に結ぶ健児の
見よ学園の大栄を

三、山紫に水碧き
鏡泊湖畔に堂々と
北溟の空にそびゆるは
健児試練の大道場
吾等が行手は久遠の道ぞ
起て学園の健男児

四、百合鈴蘭の薫る春
山楂子浜の夏の宵
砲台山の秋の月
銀盤に踊る冬の快
唄に夜が明け日が暮れる
見よ学園の団欒を

5、鏡泊学園数え歌

成立年代：一九三三年頃／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「Ⅲ学生歌集」でも取り上げる数え歌の一種、「Ⅲ

-1、国士舘数え歌」や「Ⅲ-7、国士豪気節」と同種の歌と推察される。

①『鏡泊誌その二（鏡泊学園村外史）』（田島梧郎著、私家版、一九八五年頃）

『鏡泊誌その二』は、鏡泊学園や関係者などについてまとめた学園卒業生田島梧郎の回顧録。同書には「これは鏡泊学園寮歌の中の『数え歌』」と記されており、当時の鏡泊学園の学生たちに歌われた歌の一つである。

学園数え歌

一つとせ　人に知られぬ　鏡泊湖
渤海文化の興りし地　ソイツアー　剛（毅・こう）気だね！

二つとせ　二親見捨て、来たからにやー
末の成功は胸の中　ソイツアー剛気だね！

三つとせ　見よ長白の嶺清く
牡丹の流れ　岸を噛む　ソイツアー剛気だね！

四つとせ　善し悪し言う奴は野暮な奴
色気　娑婆気を捨てた身が　ソイツアー剛気だね！

五つとせ　意気に溢れる三年の
学園生活あー　国の為め　ソイツアー剛気だね！

六つとせ！　昔を偲ぶ高麗城
湖畔の柳の葉隠れに　ソイツアー剛気だネェ！

七つとせ　泣いちゃーいけない気が弱い
亜細亜全土に吼ゆる身が　ソイツアー剛気だね！

八つとせ　軈て　でかすぞこの腕で
鏡泊湖畔の理想郷　ソイツアー剛気だね！

九つとせ　此処は北満　鏡泊湖
（匪）賊　馬賊の棲む所　ソイツアー剛気だね！

十とせ　とうとう学園卒業して
満洲姑娘と愛の巣を　ソイツアー剛気だね！

【注】姑娘（クーニャン）…女の子。

6、鏡泊音頭

成立年代：一九三三年頃／作詞：杉山弍外有志一同／作曲：（東京音頭）

【解題】作詞の「杉山弍」は満洲鏡泊学園の学生。『昭和八年八月　満洲鏡泊学園渡満者名簿』（財団法人満洲鏡泊学園、一九三三年八月）によると、神奈川県出身で当時一八歳であった。後に鏡泊学園卒業生らによる鏡友会の主メンバーとなり、鏡友会の運営や鏡泊学園之碑（那須高原南ヶ丘牧場）建立などに関わった。

①『鏡泊』二巻一号（満洲鏡泊学園本部、一九三三年一月一〇日）楽譜なし

鏡泊音頭

一、ハア　踊り踊るなら　チョイト鏡泊音頭
　ヨイ〳〵
　首と血潮の　首と血潮の真中で　サテ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ

二、ハア　満洲ヨイトコ　チョイト亜細亜の護り
　ヨイ〳〵
　君がミイズは　君がミイズは君照らす　サテ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ

三、ハア　匪賊は敦化よ　チョイト　女は新京
　ヨイ〳〵
　月は鏡泊湖の　月は鏡泊湖の船の上　サテ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ

四、ハア　俺が学園は　チョイト　満洲の花よ
　ヨイ〳〵
　文と剱の　文と剱の熱血児　サテ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ
　ヤートナソレヨイヨイヨイ

五、ハア　妻をめとるなら　チョイト　満洲のクー
ニヤン　ヨイ〳〵
結ぶ鏡泊湖の　結ぶ鏡泊湖の愛の家　サテ
ヤートナソレヨイヨイヨイ
ヤートナソレヨイヨイヨイ

六、ハア　西は白頭山　チョイト　北には敦化
ヨイ〳〵
音頭とる子は　音頭とる子は学園児　サテ
ヤートナソレヨイヨイヨイ
ヤートナソレヨイヨイヨイ

七、ハア　昔や東京城　チョイト満洲の大命
ヨイ〳〵
今は学園の　今は学園の文化村　サテ
ヤートナソレヨイヨイヨイ
ヤートナソレヨイヨイヨイ

八、ハア　男死ぬなら　チョイト満洲の原野
ヨイ〳〵
大和男子の　大和男子の死所　サテ
ヤートナソレヨイヨイヨイ
ヤートナソレヨイヨイヨイ

【注】敦化・新京・白頭山…満州の地名。

7、鏡泊湖守備隊歌

成立年代：一九三二年頃／作詞：吉良守備隊長／作曲：吉良守備隊長

【解題】作歌の「吉良守備隊長」は、鏡泊学園の守備隊長を務めていた「日本軍敦化独立守備隊松音溝（松乙溝）分散配置隊」所属の「吉良少尉」（『鏡泊』二巻三号、満洲鏡泊学園本部、一九三四年九月一日）を指し、鏡泊学園職員・学生らの護衛にあたった人物である。一九三四年五月一七日に鏡泊学園一行が匪賊の襲撃に遭い、山田悌一ら学園関係者と守備隊員五名を含む一四名が落命するが、吉良守備隊長はこの時随行しておらず、捜索隊として遭難現場へ向かっている（「満洲鏡泊学園山田総務以下十三名ノ遭難詳報　昭和九年五月二十六日」）。

①『鏡泊』二巻四号（満洲鏡泊学園本部、一九三四年一〇月一五日）楽譜なし

鏡泊湖守備隊歌

作歌　吉良守備隊長

一、山紫に水清く　黎明の地の鏡泊に
守備する我等は神州の血潮を受けし若武者ぞ

二、正義を守り人道の　仇なす奴輩を攻め討てと
胸に流るゝ赤き血に虫の情を蔵すなり

三、敦化離れて三拾里　誓ぞ固き三十四士
討つも攻むるも一筋に尽すは君と国の為

四、寒夜に立てる歩哨陣　炎暑に耐ゆる強襲も
日満和平の実現に勇み進まんいざ共に

五、鏡泊の地に半余歳　我等守備せし甲斐ありて
日の大御旗空高く　かゝげて帰る時ぞ今

Ⅲ　学生歌集

主に一九六〇～一九八〇年代において、学生・生徒の間で歌い継がれてきた歌を収載した。その多くは、当時の流行歌に学生の生活情景や心情を詠み込んだものである。基本的に上級生から下級生へと口伝されるため、印刷物などのかたちで文字化される機会も少ないことから、現存する歌詞の細部には差異も多い。また大学名などを変えて、他大学でも同様に学生間で流布した歌も多い。

1、国士舘数え歌（一つとせ一日二日はびんたで暮す…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】大学数え歌の一つ。

①国士舘関連歌歌詞一括（作成年不明）楽譜なし［資料番号7374］

国士舘関係歌の歌詞が列記された一括資料の一紙で、一九九〇年代に職員佐々木宗興が粗年表作成のために収集・使用したもの（粗年表編集資料）。本資料は複写コピー

に佐々木ほか複数人の後筆・訂正跡がある。

国士舘数へ歌

一つとせ一日二日はびんたで暮す
三日四日五日は猛稽古

二つとせ二人歩きはよいけれど
上級生に見つかってびんた七つ

三つとせ見れば見る程よい男
紋附姿のいきな事

四つとせ酔てうたゝねからいびき
天下取る日を夢に見る

五つとせ何時も渋谷でごろをまく
国士むそうと人はいう

六つとせむりに出された勇士稽古
でなけりゃ点呼がおそろしい

七つとせ何も知らない新入生
色けづいたか二年生

八つとせやぼなけんかはよしましょう
米英相手の大げんか

九つとせ国士学徒のよい処は
稽古帰りのみだれ髪

十つとせ十迄数へた数へ歌
歌ってちょうだい
世田谷の娘さんよ

2、国士舘五万節（国士舘出てから十余年…）

成立年代：一九六一年／作詞：不明／作曲：萩原哲晶

【解題】原曲は、ハナ肇とクレージーキャッツのシングル曲「五万節」（作詞青島幸男、作曲萩原哲晶）。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

国士舘五万節

一、国士舘出てから十余年
今じゃ会社の大社長　ヨイショー
腕に脂の乗る頃にゃ
首切る社員が五万人　ヨイショー
（以下同じ）

二、国士舘出てから十余年
今じゃ国士舘の名教授
真昼のサイレンなる頃にゃ
いねむる学生が五万人

三、国士舘出てから十余年
今じゃ満州の総裁で
一度酒宴を張る時にゃ
侍る芸者が五万人

四、国士舘出てから十余年
今じゃ海軍の元帥で
怒涛逆巻く波を蹴りゃ
ひれふす毛唐が五万人

3、寮生哀歌〈国士舘ブルース〉（身から出ましたさび故に…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は、軍隊生活の辛さなどを歌った兵隊節・軍隊小唄の「可愛いスーチャン〈スーチャン節〉」。その替え歌として一九七〇年代に「練鑑（ねりかん）ブルース」など、その地域の少年鑑別所での生活を詠んだ歌が若者の間で流行した。なお「練鑑」は練馬にある東京少年鑑別所の俗称である。その歌詞に、大学や寮生活・部活動での日常を置き替えて歌ったもので、多くの派生形が存在し、それぞれに歌詞が異なる。

①国士舘歌集綴（一九八九年頃・鈴木篤旧蔵資料）［資料番号5088］楽譜なし

寮生哀歌

一、身から出ましたさびゆえに　人の恐がる国士舘
　入ったわが身はよいけれど　かわいいいあの子
　と泣きわかれ。

二、朝は早から起こされて　便所そうじやふきそうじ
　いやな先輩にどなられて　泣き泣き過ごす日の長さ。

三、ラーメン食べるひまもなく　消灯ラッパ鳴りひびく
　五尺の寝台わらぶとん　これがおいらの夢の床

四、人里遠く離れては　面会人とてさらになく
　ついた手紙のうれしさよ　かわいいあの子の筆のあと

五、いいぞ　いいぞと進められ　何も知らずに来てみれば
　朝から晩までしごかれて　月日のたつのも夢の内

六、部屋長さんは仏様　おこった姿はえんま様
　あとの先輩鬼の様　今日も正座のうちあせ

七、郷里遠く離れては　思い出します　父と母　早く会いたい
　今すぐに　帰っちゃならない身の修業

八、めでたく四年修業して　かわいいあの子は人の妻
　世間の様子は変っても　寮の思いでいつまでも

②替え歌歌詞（一九八〇年頃、松本吉英旧蔵資料）［資料番号21209］

松本吉英（一九八四年体育学部卒）氏の自筆メモで、横書用の「国士舘大学卒業論文用紙（原稿用紙）」に書かれている。松本は在学中の同時期に、この歌と若干歌

詞の異なる三パターンの歌詞を書き残している。松本は体育学部在学中に陸上競技部に所属したため、陸上部版の歌詞も存在する。歌詞中の「〇〇」には、その時々に対戦またはライバル視した校名などを入れて歌っていた。

（タイトルなし）

一、身からでましたさびゆえに
　人の嫌がる国士舘
　はいった我身は良いけれど
　かわいいあの娘と泣き別れ

二、俺は士舘の新入生
　御客さん扱いだいいのかな
　掃除洗濯しないのに
　飯はたらふく食っている

三、俺は士舘の新入生
　話が一変してしまい
　あいさつ掃除お使いと
　汗にまみれて走ってる

四、士舘名物陸上部
　この世に地獄があろうとは
　夢にも想わぬ女学生
　それならおいらが教えましょ

五、朝も早よから起こされて
　トイレ掃除にふき掃除
　嫌な先輩に怒鳴られて
　泣き泣き暮らす日の長さ

六、（歓）観迎会だよ一回生
　飲めない酒を流しこみ
　あけて飲んだらまたあけて
　朝になったら素裸

七、松陰神社の松の木に
　枝もないのに登らされ

松の木抱いて蝉のまね
こんな姿を見せらりょか

八、寮に帰れば先輩に
こき使われて歩いてる
寝る暇なしに働いて
気付いてみたら朝練習

九、朝もはよから一回生
酔って帰った先輩が
包丁持って意気がって
ついでに殴って寝ろという

十、朝は遅刻の一回生
昼はいねむり一回生
席についたら寝てしまい
先生も飽きれて寝てしまう

十一、うさを晴らそう一回生
〇〇(ママ)相手に殴り込み
ついでにマッポとケンカして
着いた所が豚箱だ

十二、俺は士舘の一回生
胸のジャバラを引き締めて
街を歩けば人々が
俺の為に道あける

③替え歌歌詞（一九八〇年頃、松本吉英旧蔵資料）［資料番号21210］

前掲②と同じく松本吉英（一九八四年体育学部卒）氏の筆で、市販の横罫レポート用紙に書かれたものである。

（タイトルなし）

一、俺は国士舘の入学生
御客さん扱いだいいのかな
掃除洗濯しないのに
飯はたらふく食っている

二、俺は国士舘の入学生
　話が一変してしまい
　あいさつ掃除お使いと
　汗まみれで走ってる

三、勧(歓)迎会だよ一回生
　飲めない酒を流しこみ
　空(あ)けて飲んでまた空けて
　朝になったら素裸

四、俺は国士舘の一回生
　胸のジャバラを引き締めて
　街を歩けば人々が
　俺の為に道開ける

五、寮に帰れば先輩に
　こき使われて歩いてる
　寝る暇なし働いて
　気付いてみたら朝練習

六、朝も早から一年生(いちねんせい)
　酔って帰った先輩が
　点呼(てんこ)だぞと意気がって
　ついでに殴って寝ろという

七、朝は遅刻の一回生
　昼も遅刻の一回生
　席についたら寝てしまい
　先生飽きれて寝てしまう

八、気晴(きば)らしだ一回生
　〇〇(ママ)相手に殴り込み
　ついでに警察(マッポ)とケンカして
　着いた所が豚箱だ

④替え歌歌詞（一九八〇年頃、松本吉英旧蔵資料）［資料番号21210］
前掲③と同資料で松本吉英（一九八四年三月体育学部卒）氏による筆。

国士舘ブルース

一、身から出ましたさびゆえに
　人の嫌がる国士舘
　入った我身は良いけれど
　カワイイあの娘と泣き別れ

二、士舘名物陸上部
　この世に地獄があろうとは
　夢にも想わぬ女学生
　それならおいらが教えましょ

三、朝も早よから起こされて
　便所掃除して吹(拭)き掃除
　嫌な先輩に怒鳴られて
　泣き泣き暮らす日の長さ

四、松陰神社の松の木に
　枝もないのに登らされ
　松の木抱いて蝉のまね
　こんな姿を見せらりょか

4、一回生ブルース（東京名物数あれど…）
成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明
【解説】「Ⅲ-3、寮生哀歌〈国士舘ブルース〉」の派生形と推測される。

①替え歌歌詞（一九八〇年頃、松本吉英旧蔵資料）［資料番号21209］
松本吉英（一九八四年体育学部卒）氏の自筆メモで、横書用の「国士舘大学卒業論文用紙（原稿用紙）」に書かれる。

（タイトルなし）

一、東京名物数あれど
　数ある中のその中に
　泣く子も黙る松陰寮
　その名ぞ天下の国士舘

二、今日も屋上に正座して
鬼の2年にどつかれて
ぐっとこらえりゃでる涙
泣きべそかくのは一回生

三、今日も練習またしごき
正座かやきかこま使い
休む暇なくせこせこと
ベソかく奴隷は一回生

四、寮の窓から空見れば
星がきらきら呼んでるぜ
遠い故郷を想い出し
ベットで泣くのは一回生

五、町で見かけたカップルを
指をくわえて眺めてた
そんなせつない想いでも
女はいらない一回生

六、ついに来ました夏休み
地獄の寮ともおさばらさ
やっと自由になれるんだ
早く会いたいおふくろに

5、水泳部ブルース（知らぬこととは云いながら…）

成立年代：不明（一九七〇年代）／作詞：不明／作曲：不明

【解説】「Ⅲ-3、寮生哀歌〈国士舘ブルース〉」の派生形と推測される。

①応援部手帳（応援部、一九九七年）楽譜なし

国士舘高等学校応援部の手帳。一部の歌には楽譜あり。

水泳部ブルース

一、知らぬこととは云いながら、
好きで入った水泳部
足をふみ入れ　気がついた、
これが国士の水泳部

二、1にあいさつ、2に礼儀
　3・4がなくて　5にパシリ
　先輩たてて　さからわず、
　これが国士の水泳部

三、夜中の0時に　とび起きて、
　バッグをかついで神宮へ
　一番のりでかけつける、
　これが国士の水泳部

四、体を動かす　1年生、
　頭をつかう　2年生
　口だけ動かす　3年生、
　これが国士の水泳部

五、いやだ　いやだの1年間、
　やっと一息　2年生
　もうすぐ卒業　3年生
　我らが国士の水泳部
　我らが国士の水泳部

6、狼の歌〈風雲児〉（男一匹やるだけやれば…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

①第二回歌唱祭プログラム（楓門祭実行委員会・歌唱祭運営委員会、一九八五年一一月三日）　楽譜なし

この歌は「風雲児」ともいい、大学名を替えて他大学でもよく歌われていた。

狼の歌

作詞・作曲不詳

一　男一匹やるだけやれば、
　なんのこの世に未練がありょか
　吹けよ竜巻アルタイ越えて
　俺も行きたや命をかけて

二　胸に秘たる男の夢は、
　女なんかにゃわかろうものか
　あごでしゃくろか小指でやろか
　馬賊三千砂塵を巻いて

三　俺が死んだら裸のままで
　ゴビの砂漠にうっちゃっておくれ
　どうせ俺らにゃ狼の血が
　親の代から流れているのさ

四　北に輝く北斗の星と
　南に輝く南斗クロス
　あゝ大亜細亜皇御国に
　天下治める国士舘

7、国士舘豪気節（一つとせ　人に知られた国士舘…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「豪気節」という数え歌の一つで、全国の高校・大学・寮などで歌詞を替えて歌われていた。ここに挙げた歌詞では略されているが、各番の最後に「そいつは豪気だね」を繰り返す（いわゆる合いの手）。「Ⅱ-5、鏡泊学園数え歌」「Ⅲ-1、国士舘数え歌」も参照。

①国士舘関連歌歌詞一括（作成年不明）楽譜なし［資料番号7374］

国士舘関係歌の歌詞が列記された一括資料の一紙で、一九九〇年代に職員佐々木宗興が粗年表作成のために収集・使用したもの（粗年表編集資料）。本資料は複写コピーに佐々木ほか複数人の後筆・訂正跡がある。

国士舘豪気節

一つとせ　人に知られた国士舘
　誠意と気魄の国士舘
　そいつは豪気だね

二つとせ　二親見捨てゝ風雲の
　亜細亜全土に吼ゆる身は

三つとせ　見よ松陰の森深く
　そびゆる天下の国士舘

四つとせ　よしも、あしきも、あるものか
　色気、しゃばけを捨てる身が

五つとせ　意気に溢る国士舘
　にやけた野郎はぶんなぐれ
六つとせ　無理もへちまもあるものか
　アジアの嵐に散る身には
七つとせ　何はなくとも国の為
　捨てる命が一つある
八つとせ　やがてはでかすぞこの腕だ
　御威稜普の大亜細亜
九つとせ　此処は天下の国士舘
　豪傑国士の大道場
十つとせ　とう〳〵国士舘卒業すりゃ
　末はアジアの大統領
そいつは豪気だね〳〵〳〵

繰り返し

【注】御稜威（みいつ）…天皇の威光

8、花の御江戸の国士舘（花の御江戸に立つ時は…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は不明だが、同じような歌詞の歌が各地の大学で歌われている。大阪商業大学「商大節」・國學院大学「国大小唄」など。

①替え歌歌詞（一九八〇年頃、松本吉英旧蔵資料）［資料番号21209］

松本吉英（一九八四年体育学部卒）氏の自筆メモで、横書用の「国士舘大学卒業論文用紙（原稿用紙）」に書かれる。歌詞中の〇〇〇〇や〔　〕表記部分には、適宜の詞を用いて歌われる。

花の御江戸の国士舘

一、花の御江戸に立つ時は

袖にすがって恋人が
お願いだからそれだから
出 世してねと泣いていた
泣いていた

二、泣いて離れてまた泣いて
入った学校が国士舘
士舘だからそれだから
陸上やりやり酒を飲む
酒を飲む

三、酒を飲み飲み陸上して
〇〇〇〇（ママ）したならば
早く故郷に帰ってね
私それまで待ってるわ
待ってるわ

四、かわいいあの娘に励まされ
苦節こうなる四年間
めでたく卒業する時は

〔　　（ママ）　　〕

9、ツンドカドカドカ（渋谷の国士か国士の渋谷か…）
成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

①国士舘歌集綴（一九八九年頃、鈴木篤旧蔵資料）楽譜なし、手書き［資料番号5088］

一九八〇～一九八九年頃に鈴木篤（一九八二年法学部卒）氏が収集した国士舘に関する歌の一括資料のうちノート。この歌は歌詞のみノートに手書きされており、楽譜はない。

ツンドカドカドカ

渋谷の国士か国士の渋谷か
肩で風切るヤクザ者
勢な紋附サンダラバキで
今夜又出る点呼前

ツンドカドカドカ
ツンドカドカドカ

此処で分かれちゃ未練が残る
せめて正気寮の前迄も
送りましょうか送りましょうか
甲州街道　道恋（路・じ）道

10、国士大恋歌（酒に対して　まさに唄うべし…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】前半は『三国志演義』で曹操が赤壁の戦いの際に詠んだと言われる「短歌行」という漢詩を一部改変したもの。後半は「狼の歌」と一部の歌詞が似るが、関連不明。「〇〇大恋歌」と大学名を入れて各地の大学で歌われている。

①『国士舘健児熱血歌唱祭（プログラム）』（国士舘健児熱血歌唱祭実行委員会、一九八五年頃）　楽譜なし

国士大恋歌

台詞

酒に対して　真に唄うべし

人生幾ばくぞたとえば朝露の如し
忘るる日々ははなはだ多し
されどうるわしき日々は忘れがたし
何を思ってか愛をとかん
酒は飲むべし百薬の長
女は抱くべし一夜の快楽
いざ唄わんかな
国士大恋歌を

一、もしも俺が死んだなれば
俺の骨と拳銃を
ゴビの砂漠にうっちゃっておくれ

二、如何に時節が変わりょうとても
俺の行く道はただひとつ
ごたくならべたシャバにゃあ縁も
みれんもないさこの俺にゃ

三、俺に大義があるなれば
千万人とても我行かん

俺の故郷の国士舘にゃ
男ばかりが住むという

11、突撃音頭（皆さん〳〵選手の後で…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は、戊辰戦争の際に新政府軍が唄ったといわれている「宮さん宮さん〈トンヤレ節〉」。応援団による作詞と思われ、応援の際によく歌われた。

①ＬＰブック『国士』（一九七四年一月二六日、柴田徳次郎一周忌記念制作）　楽譜なし

突撃音頭

一、皆さん〳〵選手の後で
　ヒラヒラするのはなんじゃいな
　トコトンヤレトンヤレナー

二、あれは強敵征伐せよとの
　応援団旗じゃ知らないか
　トコトンヤレトンヤレナー

三、国士の選手に向かうものを
　撃滅させるは応援団
　トコトンヤレトンヤレナー

12、国士舘小唄〈国士舘節〉（春が来たかよ国士のお庭に…）

成立年代：一九六五年以降／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は一九六五年発売の「ステテコシャンシャン」。お座敷や盆踊りなどで広く歌われてきたが、一九八〇年代に日清・どん兵衛のＣＭソングとして使用されたことでもおなじみの歌。一九七四年制作のＬＰブック『国士』に音源が残る。

①応援部手帳（応援部、一九九七年）　楽譜なし

国士舘小唄

春は桜に国士舘

ぱっと咲いた桜花
あの娘を思えばついほろり
夏は蛍に国士舘
ぱっと消えてどこへ行く
あの娘を探しに俺は行く
秋は紅葉に国士舘
はらりと散った紅葉葉は
愛し恋しあの娘の手
冬は雪に国士舘
あの娘を忘れて寒稽古

一、春が来たかよ、国士のお庭に　ヨォコリャ
桜咲いた咲いた、ステテコシャンシャン
ドンブリバチャ浮いた浮いた、ステテコシャン
シャン

二、夏が来たかよ、国士のお庭に　ヨォコリャ
蛍飛んだ飛んだ、ステテコシャンシャン
ドンブリバチャ浮いた浮いた、ステテコシャン
シャン

三、秋が来たかよ、国士のお庭に　ヨォコリャ
紅葉散った散った、ステテコシャンシャン
ドンブリバチャ浮いた浮いた、ステテコシャン
シャン

四、冬が来たかよ、国士のお庭に　ヨォコリャ
雪が降った降った、ステテコシャンシャン
ドンブリバチャ浮いた浮いた、ステテコシャン
シャン

13、国士舘節〈士舘節・国士舘数え歌・応援団節〉（此処は武蔵か世田谷町か…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は不明だが、歌詞を変えて各地の大学で歌い継がれている。合間に入る合いの手が、「コーリャコリャコリャ」（国士舘節など）と「サノヨイヨイ」（応援

団節）がある。「Ⅲ-9、ツンドカドカドカ」と同じ曲か。

①国士舘歌集綴（一九八九年頃、鈴木篤旧蔵資料）楽譜なし、手書き［資料番号5088］

一九八〇～一九八九年頃に鈴木篤（一九八二年法学部卒）氏が収集した国士舘に関する歌の一括資料のうち一紙（ノートの複写物）。

此々は武蔵か

一、此々は武蔵か世田谷町か
　世田谷町なら大学国士

二、大学国士の学生さんは
　度胸を一つの男だて

三、度胸一つで皇国の道を
　歩いて行きます紋付姿

四、紋付姿は国士の育ち
　ぼろはおいらの旗印

五、ぼろはまとえど心は綿
　どんな者にも恐れはせぬぞ

六、どんな者にも恐れはせぬが
　可愛いあの娘にゃかなぁいはせぬぞ

七、可愛いあの娘は何時でも捨てる
　皇国の為なら命までも

八、命捨てても名前は残る
　殉国国士の名前は残る

②「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

国士舘節の言道部版。手書き、楽譜なし。

（タイトルなし）

此処は世田谷か松陰の町か

松陰の町なら大学は国士
大学国士の学生さんは
度胸一つの男伊達
度胸一つで世田谷町を
歩く姿は紋付袴
紋付袴は国士の育ち
襤褸を纏えど心は錦
男伊達なら命はおろか
勢んで捨てますあの女の為なら
襤褸を纏えど心は綿
御国の為なら命を捨てる
御国の為なら命を捨てる
大学国士のその名を残す
序に言道部のその名を残す

14、国士舘節〈士舘節〉（士舘よいとこ誰いうた…）
成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明
【解説】三番の歌詞の後に「舘長先生が許さねば　みどりの黒髪断ち切って　男姿に身をやつし　ついて行きます国士舘（何処までも）」が入るパターンもある。

①国士舘歌集綴（一九八九年頃、鈴木篤旧蔵資料）楽譜なし、手書き［資料番号5088］
一九八〇～一九八九年頃に鈴木篤（一九八二年法学部卒）氏が収集した国士舘に関する歌の一括資料のうち一紙（ルーズリーフ）にペン書き。

士舘節

一、士舘良い所誰言った
松陰神社のその中に
粋な学生が居るという
一度は惚れてみたいもの

二、胸のジャバラにしがみつき
連れて行きゃんせ国士舘
連れて行くのはやすけれど
女の座る席はない

三、座る席がないならば
せめてあなたのひざの上

共に許した仲ならば
舘長先生も許すだろ

四、中学高校大学と
入学してから卒業まで
どうせ来るなら国士舘
一度は惚れる銃剣道

15、国士舘節〈士舘節〉（男度胸はノーエ…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は民謡。「ノーエ節」などの名前で各地に似た民謡が存在する。

①ＬＰブック『国士』（一九七四年一月二六日、柴田徳次郎一周忌記念制作）

士舘節

一、男度胸はノーエ　〈
ノーエのサイサイ
男は国士の応援団

二、国士の応援団はノーエ　〈
ノーエのサイサイ
応援団は女にもてる

三、女にもてるはノーエ　〈
ノーエのサイサイ
もてるは男にもてる

四、男にもてるはノーエ　〈
ノーエのサイサイ羽織袴

五、羽織袴はノーエ　〈
ノーエのサイサイ
羽織は先輩ゆずり

六、先輩ゆずりはノーエ　〈
ノーエのサイサイゆずりは俺達心

七、俺達心はノーエ　〳〵
　ノーエのサイサイ俺達心は丸い
　国士押忍、国士押忍、国士押忍

②「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

国士舘節

一、男度胸は　ノーエ
　男度胸は　ノーエエエ
　ノーゲノサイサイ（原文ママ）（以下略）
　男は国士の言道部

二、国士の言道部は
　国士の言道部は
　言道部女にもてる

三、女にもてるは
　女にもてるは
　もてるは男にもてる

四、男にもてるは
　男にもてるは
　もてるは羽織袴

五、羽織袴は
　羽織袴は
　羽織袴は先輩ゆずり

六、先輩ゆずりは
　先輩ゆずりは
　ゆずりは俺達心

七、俺達心は
　俺達心は
　俺達心は丸い

16、国士舘節（麻と乱れる天下治め　コリャ〳〵…）

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】原曲は民謡か。各地の大学で歌詞を変えて歌われている。

①国士舘関連歌歌詞一括（作成年不明）楽譜なし［資料番号7374］

国士舘関係歌の歌詞が列記された一括資料の一紙で、一九九〇年代に職員佐々木宗興が粗年表作成のために収集・使用したもの（粗年表編集資料）。本資料は複写コピーに佐々木ほか複数人の後筆・訂正跡がある。

国士舘節

一、麻と乱れる天下治め　コリャ〳〵
　国を安むる国士舘
　ヨイ〳〵国士舘

二、何はなくとも君国の為
　捨てる命が一つある

三、まかりちがえは白装束で
　白木三宝にゃ九寸五分

四、桜花咲く日本の国で
　文武鍛えし大丈夫

五、大和男児の真心問へば
　抜けば玉散る日本刀

六、優柔不断は男の恥よ
　腰の黒帯は伊達でない

七、どうせ死ぬなら桜の下で
　死なば屍に花が散る

八、モダンづくならゆずりもしょうが
　腕と度胸じゃ譲りゃせぬ

九、死ぬも生きるも一億万が
　君に尽すを忠と云う

十、誠意、勤労、見識、気魄
　これが天下の国士舘

十一、木綿紋附伊達には着ない
　魔よけ、虫よけ、女よけ
　ヨイ〳〵国士舘

【注】白装束・白木三宝・九寸五分…切腹を示す語、白装束で短刀を置いた三宝（供物台）のこと。

17、国士舘デカンショ

成立年代：不明／作詞：不明／作曲：不明

【解題】元は民謡の学生歌。詞を変えて広く歌われている。国士舘デカンショの内容や順番、数は、掲載物や版により違う場合がある。

①『国士舘朗吟集』（安藤尚志・内田輝光編、一九六一年九月二三日初版）楽譜なし

和歌や漢詩などを集めた小冊子で、何度か重版されている。舘長訓話などで利用された。国士舘デカンショの数と順番は版により違いがあり、例えば重版では「酒と踊りで世界を知らず…」など時代に相応しくない表現部分は削除されるなどしている。

国士舘デカンショ

誠意、勤労、見識、気魄、これが天下の国士舘。
読書、体験、反省しつつ、たへず励むが国士舘。
起ち居振る舞ひすべての動作、神速、正確、国士舘。
言葉、服装はたから見ても、高雅、質実国士舘。
塵や埃は見たくも見れぬ、これが天下の国士舘。
麻と乱るる天下を治め、国を靖むる国士舘。
麻と乱るる天下（を）治め、民を安むる国士舘。
広い世界を旭の旗の、風に靡かす国士舘。
煙あがれば必ず火有り、煙迷いで火は悟り。
迷ひの煙を飽くまであふげ、ぱつと悟りの火があがる。
一度ついたら悟りの火種子、吹いて虚空を焼き尽せ。
小さい体裁少しの不平、がらり投げ捨て働かう。
真に心の平和の風は、義務を果した胸に吹く。
シヤベル採っても人後に落ちぬ、自信さえありゃ大丈夫。

広い世界に日本の外に、外国かぶる馬鹿はない。
槿花ゆえあり三千年の、国の歴史がただあるか。
官僚さなだ虫、国民蛔虫、力併せて国潰す。
井戸の蛙で内輪の喧嘩、世界の縁日売れるぢゃろ。
水で威張った琵琶湖の鮒も、津波の塩水何とする。
酒と踊りで世界を知らず、今じゃ見世物インディアン。
職に雑多の差別あれど、人格平等新日本。
奇妙不可思議日本の書生、上に行く程馬鹿になる。
どうかなろうでその日を暮す、歩くミイラのいじらしさ。
陽気、活溌、冒険、敢為、これがアメリカ国民性。
我慢、分別、質実、自尊、これがイギリス国民性。
射利と面子、忍従、自大、これが中国国民性。
譎詐、残忍、強奪、暴行、これがソ連の支配層。
俺の目玉の光れるうちは、国歩艱難何のその。
俺と交わる男でなけりゃ、真の男たあ言はせない。
智慧と誠意で足並そろや、天下に冠たる日本国。
意気が旺んで誠意であれば、天下成らざる事やある。
何はなくとも君国の為め、捨つる命が一つある。
我は努めず他人の事を、けなす心が国の賊。
人を云ふより我れ働かん、天下は働く人のもの。
草履とりとり藤吉郎は、いつの間にやら天下取り。
馬鹿と怠けが一番こわい、家も国家も身もつぶず。
二度と再び生れぬ命、天地狭しとさあやろう。
裸一貫神智を宿し、世界相手の大相撲。
己が曲直他人を待たず、神と二人でさばき去れ。
人にさばかれ白黒云うは、馬鹿の程度の知れぬ奴。
露も愚かな我身と知れば、神の心になれるもの。
命かけたる男児の業は、天地裂けても滅びない。
人の向背意とする勿れ、耶蘇も宗吾も一人馳け。
楠氏一度大義を説けば、木挽山賊皆義軍。
大和男の児の真心問へば、抜けば玉散る日本刀。
大和乙女の真心問へば、匂ふ吉野の山桜。

【注】槿花（きんか）…ムクゲや朝顔の花、儚い栄華の例え。／藤吉郎…豊臣秀吉。／耶蘇…イエス・キリスト。／宗吾…佐倉惣五郎。

②『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

国士舘デカンショ節

一、誠意、勤労、見識、気魄ヨイヨイ
　これが天下の国士舘
　ヨーイヨーイデッカンショ（以下同じ）

二、怠け臆病は見たくも見れぬ
　これが天下の国士舘

三、麻と乱るる天下を治め
　民を安むる国士舘

四、広い世界を旭の旗で
　風に靡かす国士舘

18、国士舘同志会デカンショ・オリンピックデカンショ

成立年代：一九六四年頃／作詞：（国士舘同志会）／作曲：不明

【解説】一九六〇年三月の体育学部第一回卒業式にあわせて、現「大学同窓会」の前身となる同窓組織「同志会」が発足した。本歌は、歌詞の内容から一九六四年開催のオリンピック東京大会の直前に、同志会によって作成されたものと推定される。一九六四年の東京五輪に国士舘出身の選手は出なかったが、印刷物で配付された本歌が関係者間に親しまれたものと思われる。

①「国士舘同志会デカンショ　オリンピックデカンショ」（国士舘同志会、一九六四年頃）［資料番号1317］
わら半紙に二種のデカンショが、ガリ刷で印刷されている。

◎国士舘同志会デカンショ。

俺が勝つのはデッカイ試合　ヨイ〳〵
国と国との大勝負　ヨーイ〳〵　デッカンショ

科学教育、道徳、軍備

それに産業五種試合
ソ連、アメリカ相手に廻し
智恵と度胸の大試合

国と国との試合に勝つは
国民一億総選挙

◎オリンピックデカンショ。

オリンピックを迎ゆるからは
目ざせ日の丸金メダル

オリンピックを迎ゆる前に
無くせ赤旗デモ騒ぎ

Ⅳ　愛唱歌

主に一九六〇～一九八〇年代において、全国の学生・生徒に好まれ歌われた歌のうち、国士舘学生がよく愛唱した代表的な歌を掲載した。

1、蒙古放浪の歌（心猛くも鬼神ならぬ…）

成立年代：昭和初期／作詞：不明／作曲：不明

【解題】「蒙古の歌」「蒙古放浪歌」とも。昭和初期の流行歌だが、それ以前から存在しており成立時期などは不詳。学生に好まれ、各地の大学で歌われていた。

最後に「五、負はす駱駝の糧薄けれど　星の示せる向だに行けば　砂の逆巻く嵐も何ぞ　やがては越えなん蒙古の砂漠」と続くパターンもある。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

蒙古放浪の歌

一、心猛くも鬼神ならぬ
人と生まれて情はあれど
母を見捨てゝ波越えて行く
友よ兄弟よ何時又逢わん

二、海の彼方の蒙古の砂漠
男 多恨の身を捨て処
胸に秘めたる大願あれど
生きて帰らぬ望みは持たぬ

三、朝日夕日を馬上に受けて
続く砂漠の一筋路を
大和男子の血潮に染めて
行くや若人千里の旅路

四、砂丘に出でて砂丘に沈む
月の幾夜か我等が旅路
明日は何(河辺・かわべ)辺か見えすば何処
水を求めん蒙古の砂漠

2、人を恋うる歌〈支那浪人の歌〉（妻をめとらば才たけて…）

成立年代：不明／作詞：与謝野鉄幹／作曲：不明

【解題】与謝野鉄幹の詩をもとに、島崎藤村の「酔歌」などが加わって、長いものでは三九番まで歌詞が続くものもある。三高（現京都大学）寮歌でもあり、明治期から全国的に愛唱されていた（『歌集　国士』倉田勝彦編、私家版、一九八〇年二月一一日初版、一九八二年一一月三日改訂）。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

人を恋うる歌（支那浪人の歌）

一、妻をめとらば才たけて
みめうるわしく情あり
友を送らば書を読みて
六分の侠気四分の熱

二、恋の命をたずぬれば
名を惜むかな男の子故
友の情をたずぬれば
義のあるところ火をも踏む

三、嗚呼我ダンテの奇才なく
　バイロンハイネの熱なきも
　石を抱いて野に歌う
　芭蕉の寂びは喜ばじ

四、三度び玄海の波を越え
　唐の都に来て見れば
　秋の日悲し王城や
　昔にかわる雲の色

【注】ダンテ…イタリア・フィレンツェ出身の詩人・哲学者・政治家。／バイロン…イギリスロマン派の詩人。／ハイネ…ドイツロマン派の詩人。

3、男度胸〈流砂の護り〉（男度胸は鋼の味よ…）

成立年代：一九三七年／作詞：柴室代介／作曲：佐藤富房

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

別名「流砂の護り」とあるように、三番歌詞は一般的には「流れ沙（砂・すな）」であり、「流れ網」となっているのは誤記である。なお、三番歌詞冒頭の「背い子」は「背嚢（はいのう）」と表記する資料もある。

男度胸

一、男度胸は鋼の味よ
　伊達にやささない腰の剣
　抜けば最後だ命を儲けて
　指をさゝせぬ此の守り

二、流れ豊かな黒竜江よ
　岸の繁みは我が住家
　水を鏡に髪（髭・ひげ）づら面剃れば
　満洲娘も一目惚れ

三、可愛背い子の枕の下に
　今朝も開いた名無し草

千里続いたこの流れ網（砂・すな）
国の光で花が咲く

4、男なら（男なら男なら…）

成立年代：一九三七年／作詞：西岡水朗／作曲：草笛圭三

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）楽譜なし

男なら

一、男なら男なら
暗い浮世の荒波風も
何が恐か（ママ）男ならば
たとえ嵐が吼えようとまゝよ
散っちゃいけない花と咲け

二、男なら男なら
可愛いあの娘と別りょまゝよ
何が辛かろ男ならば
涙かくしてこの胸張って
どんと行け行けやってみな

5、桜花（咲いた桜が男なら…）

成立年代：一九三八年／作詞：西條八十／作曲：古関裕而

【解題】軍歌「さくら進軍」をもとにしている。

①『歌集』（国士舘大学応援団総務部、一九六三年四月一日二刷）

桜花

一、咲いた桜が男なら
慕う胡蝶は妻じゃろう
意気で咲け桜花
広（宣・せん）直流布の八重桜

二、大和桜の枝のびて

花は吉野に乱れ咲く
パッと咲け桜花
俺も咲きたや華やかに

三、明日の初陣軍刀を
月にかざせば散る桜
パッと散れ桜花
俺も散りたや華やかに

6、青年日本の歌〈昭和維新の歌〉（汨羅の淵に波騒ぎ…）

成立年代：一九三〇年／作詞：三上卓／作曲：三上卓

【解説】作詞・作曲は五・一五事件に関与した海軍中将三上卓。歌詞中の詩の多くは土井晩翠と大川周明の著作から引用された。

①国士舘歌集綴（一九八九年頃、鈴木篤旧蔵資料）楽譜なし、手書き［資料番号5088］

一九八〇～一九八九年頃に鈴木篤（一九八二年法学部卒）氏が収集した国士舘に関する歌の一括資料のうち一紙（複写物）。

青年日本の歌

一、汨羅の淵に波騒ぎ
巫山の雲は乱れ飛ぶ
混濁の世に我立てば
義憤に燃えて血潮湧く

二、権門上に驕れども
国を憂うる誠なく
財閥富を誇れども
社稷を念ふ心なし

三、ああ人栄え国滅ぶ
盲ひたる民世に踊る
治乱興亡夢に似て
世は一局の碁なりけり

四、昭和維新の春の空
正義に結ぶ益良雄が
胸裡百万兵足りて

散るや万朶の桜花

【注】汨羅（ベキラ）…中国湖南省の川。／巫山（ふざん）…中国の重慶にある名山。／社稷（しゃしょく）…国家。／万朶（ばんだ）…多くの枝。

②「言道歌集」六号（大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

昭和維新の歌

一、汨羅の淵に波騒ぎ
　巫山の雲は乱れ飛ぶ
　混濁の世に吾立てば
　義憤に燃えて血潮湧く

二、権門上に驕れども
　国を憂うる誠なし
　財閥富を誇れども
　社稷を思う心なし

三、ああ人栄え国ほろぶ
　盲たる民世に躍る
　治乱興亡夢に似て
　世は一局の墓（碁・こ）なりけり

四、昭和維新の春の空
　正義に結ぶ（大）丈夫が
　胸裡百万兵足りて
　散るや万朶の桜花

五、古びし死骸乗り越えて
　雲（漂・ひょうよう）　飄　揺の身は一つ
　国を憂いて立つからは
　大丈夫の歌なからめて

六、天の怒りか地の声か
　その只ならぬ響きあり
　民永劫の眠りより
　醒めよ日本の朝ぼけら

七、見よ九天の雲は垂れ
四海の波は雄叫びて
革新の機は至りぬと
吹くや日本の冬嵐

八、ああうらぶれし天地の
迷いの道を人は行く
栄華を誇る塵の世に
誰が高楼の眺めぞや

九、功名何ぞ夢の跡
消えざるものはただ誠
人生意気に感じては
成否を誰かあげつらう

十、止めよ離騒の一悲曲
悲歌（慷）慨の日は去りぬ
我らが剣今こそは
革世の血に振うかな

十一、（記載なし）

7、馬賊の唄（僕も行くから君も行け…）

成立年代：一九二二年頃／作詞：宮島郁芳／作曲：不明

①「言道歌集」六号（国士舘大学言道部、一九七〇年七月一〇日）

馬賊の唄

一、僕も行くから君も行け
狭い日本にゃ住みあいた
海のかなたにゃ支那がある
支那にゃ四億の民が待つ

二、僕には父も母もなく
生まれ故郷に家もなし
幾年慣れたる山あれど
別れを惜むものもなく

三、ただいたわしの恋人や
幼きころの友人も
どこに住めるや今はただ
夢路に姿をたどるのみ

四、昨日は東　今日は西
流れ流れしうき草の
果てしなき野にただ
ひとり
月を仰いで草まくら

8、その他一覧

資料にみえる愛唱歌は多数のため、紙幅の都合により主な歌名と解説のみを記す。

(1) **ある晴れた日に〈ああ予科練〉**（ある晴れた日に俺は死ぬ…）
一九六八年／作詞・作曲：村上てつや。映画「あゝ予科練」の挿入歌。

(2) **歩兵の歌**（万朶の桜か襟の色…）
一九一一年／作詞：加藤明勝／作曲：永井建子。明治時代の軍歌で、正式名「歩兵の本領」。

(3) **黒の舟唄**（男と女の間には…）
一九七一年／作詞：能吉利人／作曲：櫻井順。

(4) **学徒動員の歌〈あゝ紅の血は燃ゆる〉**（花もつぼみの若桜…）
一九四四年／作詞：野村俊夫／作曲：明本京静。一九四四年の勤労学徒動員令により制定された戦時歌。正式名「あゝ紅の血は燃ゆる」。

(5) **惜別の唄**（遠き別れに耐えかねて…）
一九四四年／作詞：島崎藤村／作曲：藤江英輔。中央大学の学生が、嫁ぐ姉との別れを詠んだ島崎藤村の詩をもとに、「姉」を「友」に替えて作曲したもの。戦後、全国で愛唱された。

(6) **海行かば**（海行かば水漬く屍…）
一九三七年／作詞：大友家持／作曲：信時潔。大友家持の長歌をもとに、戦時中に国民精神総動員強化週間のテーマ曲として作った。

(7) **満州エレジー〈満州哀歌〉**（街を離れて野に山に…）
一九四〇年頃／作詞・作曲：不明。満洲開拓者の哀歌。

(8) **黒田節**（酒は呑め呑め…）

福岡の民謡。酒宴などでよく歌う。

(9) **同期の桜**（貴様と俺とは同期の桜…）

軍歌。一九三八年に発表された「戦友の唄」（作詞西條八十）をもとに、複数の人の手を経て「同期の桜」となる。戦争末期には特攻隊員らの間で歌われた。

(10) **予科練の歌〈若鷲の歌〉**（若い血潮の予科練の…）

一九四三年／作詞：西條八十／作曲：古関裕而。「若鷲の歌」は、映画「決戦の大空へ」主題歌。

(11) **無名の志士を弔ふの歌〈無名戦士の歌〉**（艱難汝を玉にすと…）

年代不明／作：多々良康信（庸信）。軍歌。

(12) **剣道小唄**（松は緑に茗荷の森に…）

年代不明／作詞：不明／作曲：古賀政男。一九五二年発売「ゲイシャ・ワルツ」（作詞：西條八十／作曲：古賀政男）の曲に剣道一筋の生きざまを唄った詩を付したもの。

(13) **民族正気の歌**（あゝ緑り濃き東海の…）

年代不明／作詞：不明／作曲：不明。

V　私製歌

1、母校を懐う歌

成立年代：一九七六年頃／作詞：武田凞／作曲：武田凞

【解題】武田凞は国士舘高等部の第一期卒業生（一九二二年一一月卒）で、一九八七年には国士舘理事などを歴任した。この歌は武田が一九七六年頃に作成した私製歌である。

①『国を定めるもの―建学の精神―』（武田凞著、学書房出版株式会社、一九八五年二月一〇日）楽譜あり

同歌は『国士舘大学新聞』第一六四号（一九七六年九月二七日）に初出するが、武田著掲載の本歌詞とは若干異なる箇所もある。

母校を懐う歌

作詞・作曲　武田凞

一、広野にとどろく　大太鼓　希望の朝は　明けて
ゆく

豪徳の鐘　松陰の杜　かがやく歴史　正大気みつ
ああ　たのしき母校　国士舘

二、紺碧彼方　大空に　そびゆ象徴　富士の嶽
自由と気節　清き風　仰ぐ師生の　心境高し
ああ　たのしき母校　国士舘

三、われ人生に　誓いたる　宇宙つらぬく　覚者の灯
国の礎　人類の智恵　若き血潮を　たぎらせし
ああ　たのしき母校　国士舘
好！　国士舘

2、その他一覧

このほか『国士館大学新聞』にみえる学生が私製した歌を列記する。いずれも楽譜がなく曲については不明である。

(1) **国士舘大学讃歌**（なびく日の丸仰ぎ見て…）

『国士館大学新聞』第一〇号（一九六二年四月二七日）掲載。当時、体育学部三年の田部典夫が作詞。曲の有無は不明。

(2) **国士舘応援歌**（紅梅春に微笑めば…）

『国士館大学新聞』第一〇号（一九六二年四月二七日）掲載。当時、体育学部一年の兼部邦夫が作詞・作曲したが、楽譜はない。

Ⅵ　参　考

1、関連人物

(1) **石川太郎**

一九六四年九月頃職員入職（学生監）、一九六四年一一月一七日大学吹奏楽部長着任（『会報録』一三号）、石川指揮（部分）でレコード『舘歌・寮歌／国士の雄叫び』（一九七〇年三月）・『国士』（一九七四年一月）を発行、一九八一年三月二三日職員在職中（総務部総務課印刷室）に病気のため死去・享年六四。「舘歌」ほか国士舘の関連歌の編曲を手掛けた。

(2) **宗鳳悦**

一九一二年一〇月二日生、一九五〇年三月國學院大学

中退、一九七四年四月一日文学部教育学科初等教育専攻講師着任（声楽・器楽など担当）（「昭和五八年度教員調書」）、一九九一年三月三〇日死去・享年七八。

2、「歌集」関連の発行物

①『国士舘朗吟集』（安藤尚志・内田輝光編、一九六一年九月二三日初版、一九六五年三月二七日再版）楽譜なし

収録歌：国士舘舘歌／国士舘学徒吟／揚子江上に第二革命戦を見る／明治天皇御製／和歌／詩／国士舘デカンショ／漢詩

②『歌集』（国士舘大学応援団総務部発行、一九六三年四月一日二刷）楽譜なし［資料番号1032］

収録歌：舘歌／第一応援歌／第二応援歌／寮歌／学生歌（未完成）／応援団節／国士舘節／国士舘小唄／国士舘デカンショ節／国士舘五万節／蒙古放浪の歌／人を恋うる歌（支那浪人の歌）／男度胸／男なら／桜花

③『国士舘歌集』（国士舘大学園発行、一九六八年頃）楽譜なし［資料番号2358］

収録歌：国士舘々歌／国士舘学徒吟／揚子江上に第二革命（張勲と河海鳴南京攻防）戦を見る（大正二年秋）／国士舘デカンショ

④7インチレコード『舘歌・寮歌／「国士の雄叫び」』（舘歌・寮歌の歌詞カード付、国士舘大学発行、一九七〇年三月一〇日）［資料番号音309］

収録歌：舘歌／寮歌／国士の雄叫び（行進曲）

⑤「言道歌集」六号（大学言道部発行、一九七〇年七月一〇日）楽譜なし　［資料番号14594］

収録歌：国士舘舘歌／言道部部歌／応援歌第一／応援歌第二／学生歌／学徒吟（寮歌）／桜花／昭和維新の歌／蒙古放浪の歌／応援歌／国士舘小唄／応援歌／国士舘節／馬賊の唄／民族正気の歌／人を恋ふる歌／流砂の護り／学徒動員の歌／男なら／惜別の詩

⑥LPブック『国士』（編纂　国士舘大学内昭和四十八年度卒業生、発行者「国士」刊行委員会、レコード日本ミュージカラー株式会社、製造株式会社アズマ音楽工房、一九七四年一月二六日）楽譜なし［資料番号音302］

収録歌：国士の雄叫び（マーチ）／第一応援歌／第二応援歌／学生歌／応援国士舘節／突撃音頭／威風堂々

（マーチ）／国士舘小唄／士舘節／男度胸／桜花／剣道部部歌／言動部部歌／青年日本の歌／寮歌／舘歌／「訓話集」

⑦『歌集　国士』（倉田勝彦編、私家版、一九八〇年二月一一日初版、一九八二年一一月三日改訂）楽譜なし［資料番号227］

収録歌：唱歌編　学徒吟／第一応援歌／第二応援歌／学生歌／昭和維新の歌／蒙古放浪の歌／桜花／男度胸／嗚々予科練／馬賊の歌／人を恋うる歌／嗚々紅の血は燃ゆる／無名の志士を弔ふの歌／田原坂／海行かば／一月一日／紀元節／天長節／明治節／漢詩編　生気（正気）の歌／偶成／和歌編／松下村塾連／改訂追録満州エレジー／狼の歌／人を恋うる歌・追補／付録教育勅語／教育勅語口語文訳／五箇条の御誓文／軍人勅諭（抄）

⑧「歌集」（国士舘大学詩吟部カ、一九八五年一一月三日）楽譜なし［資料番号5948（欠落頁あり）］

収録歌：君が代／寮歌／学生歌／蒙古放浪歌／青年日本の歌／桜歌／狼の歌／突撃音頭／第一応援歌／第二応援歌／海行かば／舘歌

⑨『国士舘大学歌集（カセットテープ版）』（国士舘大学同窓会　監修・発行、一九八五年）全楽譜付［資料番号音291］

収録歌：国士舘舘歌／国士舘学徒吟（寮歌）／学生歌／第一応援歌／第二応援歌／訓話集

＊以降もCD版など形を変えて発行されるが、収録内容は同じ。

⑩『歌唱祭（第二回プログラム）』（楓門祭実行委員会・歌唱祭運営員会発行、一九八五年一一月三日）楽譜なし［資料番号10115］

収録歌：君が代（国歌）／明治節／寮歌／国士舘大学剣道部部歌／躰道ひとすじ／言道部部歌／青年大民団々歌／蒙古放浪歌／満州鏡泊学園校歌／母校を懐う歌／青年日本の歌／桜歌／学生歌／狼の唄／寄題国士舘（漢詩）／突撃音頭／国士舘第一応援歌／国士舘第二応援歌／海行かば

⑪「国士舘健児熱血歌唱祭（プログラム）」（国士舘健児熱血歌唱祭実行委員会、一九八五年頃）楽譜なし［資料番号22623］

次第（収録歌）：吹奏楽部による演奏（軍艦行進曲）

／太鼓／開会の辞／国歌斉唱／趣旨説明／寮歌／剣道部々歌／言動部々歌／空手道部々歌／空手道演武／国士大恋歌／詩吟／合気道同好会歌／躰道の歌／男度胸／桜花／青年日本の歌／学生歌／突撃音頭／第一第二応援歌／舘歌／閉会の辞／太鼓

⑫『柴田徳次郎先生御生誕百年記念・大歌唱祭　青年日本の宴（プログラム）』（一九九〇年一一月三日開催、主催　柴田徳次郎先生御生誕百年記念大歌唱祭実行委員会）楽譜なし［資料番号簿学生48部分］

収録歌：国歌／海行かば／国士舘々歌／国士舘寮歌／若き支那浪人の歌／馬賊の歌／亡命者の歌／狼の歌／流浪の旅／蒙古放浪歌／戦友／日本魂の歌／英霊の声／憂国／いざ起て戦人よ／秋のピエロ／吟・草彅城輝示人／春江花月夜／競馬／青年讃歌／一献歌／祖国弐千六百五拾年／無名の志士を弔うの歌／昭和維新・青年日本の歌

国士舘創立 110 周年記念事業

寄付金募集

■募金の趣意

学校法人国士舘は、来たる 2027 年の創立 110 周年に向け、学園の総合整備、奨学基金の 充実、スポーツ・文化活動の振興及び国士舘大講堂の保存環境整備に取り組んでいます。皆様方のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■事業の概要

期　　別	主な事業項目
通　期（2020/4～2028/3）	学生・生徒への修学支援事業 スポーツ・文化活動の振興 国士舘大講堂（国登録有形文化財）の保存および防災対策 高等学校・中学校の教育環境の充実 3 キャンパスの教室等の重点整備 防災教育の推進強化 世田谷キャンパスの再整備の検討
第 1 期（2020/4～2022/3）	町田キャンパスの整備 国士舘楓の杜キャンパスの運用開始 多摩キャンパスの拡充整備 近隣の救急病院等との連携構築
第 2 期（2022/4～2025/3）	多摩南野キャンパスの整備 国士舘楓の杜キャンパスへのスクールバス運行
第 3 期（2025/4～2028/3）	4 キャンパスの施設環境の充実

※計画の具体化により若干の変更を伴います。また、寄付金は、総事業費の一部に充当させていただきます。

■申込方法

専用の払込用紙のほか、インターネット（オンライン決済）またはコンビニエンスストア、クレジットカードを利用した決済もできます。寄付金は税制上の優遇措置を受けられます。詳細は募金事務室までお問い合わせくださるか、下の QR コードをご参照ください。

募金についてのお問い合わせ

学校法人国士舘　募金事務室

電話 03-5451-8207

〒154-8515　東京都世田谷区世田谷 4-28-1

（世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 1 階）

この QRコードから、国士舘大学 HP 創立110周年記念事業募金 募集要項のページにアクセスできます

第二回学園史講演会　講演録

世田谷地域の変遷と国士舘

―地域と歩む「活き方」・国士舘商業学校を中心に―

国士舘大学名誉教授　佐々　博雄

はじめに

只今ご紹介にあずかりました佐々でございます。本日は、昨年（令和三年一一月十二日）開催の第一回学園史講演会に引き続き、第二回学園史講演会ということで、「世田谷地域の変遷と国士舘　―地域と歩む「活き方」・国士舘商業学校を中心に―」と題して、国士舘が現在の「世田谷」での地域変遷・発展の中で、地域からどのように受け入れられたのか、また国士舘はいかにその連携・貢献に努めたのかなどについて、戦前の国士舘商業学校を中心に世田谷の歴史地理環境などと共にお話をしたいと思います。

第一回は、「『国士舘百年史』から見えるもの　―青年群像・個性・理念―」と題して、国士舘創立期を中心に国士舘の理念の成立と構造などや、『国士舘百年史』編纂の意義についてお話をしました（『国士舘史研究年報楓原』第一三号参照）。

国士舘は、「大正の青年」たちを中心とした社会啓蒙団体「青年大民団」を母体として、柴田徳次郎らが、一九一七（大正六）年一一月、東京府麻布区笄町（現港区南青山）に私塾として創立しましたが、次第に生徒が増え教場も手狭になり移転をすることになります。移転先として当初は、吉祥寺（現成蹊大学校地）を予定していました。ところが、一九一八年一一月、世田谷松陰神社での幕末維新の功労者を顕彰する「国士祭」を開催したことが契機となり、神社横に適当な校地候補地があるこ

とがわかり、教育環境などを考慮して、急遽、世田谷移転が決まりました。その後、現在に至るまで一〇〇年以上、世田谷の同じ場所で教育を続けています。

当時の世田谷、国士舘周辺地域は、田畑が広がる丘陵地帯で松陰神社、豪徳寺など幕末維新の偉人を祀ったゆかりの地でもあり、周りを烏山川が流れる高台に校地があり、教育に適した静かな環境が広がっていました。その高台に忽然と大講堂などが建てられ、大伽藍が出現したような状況であったと思われます。

その後、国士舘は一〇〇余年の間に、経営困難や戦災による校舎焼失、占領下での校名変更等々、決して平坦な道を歩いてきた訳ではありません。また、戦後、国士舘が再興してからも、暴力事件などにより社会から強い批判を受けた時期もありました。当時、著名な教授陣にあこがれ、全額授業料免除給費生としての恩恵を受けて、九州熊本から国士舘に入学した私も東京に来て肩身の狭い思いをしたことを覚えています。しかし、現在、国士舘は、これらの困難を乗り越え、学園全体で地域との関係を重視し、様々な地域協力を行い、共に歩み、それらの貢献により、地域からの信頼も高まってきています。

佐々博雄氏

そこで、本日は、国士舘の地域と歩む「活き方」について、世田谷地域の変遷と戦前に創立された国士舘商業学校を中心に話をしていきたいと思います。

1．国士舘の世田谷移転と地域構想

（1）国士舘周辺の歴史・交通・史跡・文化財

まず、国士舘商業学校の話をする前に、国士舘周辺、世田谷地域の歴史的環境の変遷、世田谷移転後の国士舘の世田谷での教育構想や活動などについて、近代の地図を使いながら話を進めていきたいと思います。

○歴史

世田谷は、地理的にみると東京の西方にあり、もとは北多摩郡と荏原郡の一部でした。歴史的にみると、中世では豪徳寺があるところに吉良氏の城がありましたが、豊臣秀吉が関東に入ってきた時に接収され、その後、彦根藩井伊家の領地になります。井伊家は彦根に領地を持っていますが、その飛び地という形で治めることになりました。そのため世田谷には代官を置きますが、その代官には吉良氏の家臣である大場氏が任命されました。大場氏は、後に世田谷信用金庫を創設するなど、世田谷地域と色々な意味で関わっています。そして、国士舘商業高校の初代校長に就任したのも代官家後裔の大場信続です。

○交通

世田谷の交通について目を向けると、世田谷には矢倉沢往還という大きな道が通っています。矢倉沢往還は別名大山街道といい、相模国大山にある阿夫利神社への参詣道です。江戸時代の人びとは、講を結んで、つまりグループを作りお金を貯めて参拝していました。多くの人が大山詣をするために整備された道は、赤坂御門から沼津までつながっており、現在の国道二四六号線とほぼ重なります。三軒茶屋の交差点の所にはこの道を示す道標があって、「左大山道」と書いてある。左の国道二四六号線は比較的新しくできた道で、旧道は交差点を右、今の世田谷通りになります。

一八八一（明治一四）年に参謀本部が作った地図によると、三軒茶屋の交差点から西にある若林村を通っているのが、世田谷通りです。特徴的なのは、世田谷代官屋敷の手前ところで、鉤の手（クランク状）になっていま

図１　世田谷地域略図

した。今はまっすぐな道になっていますが、昔は世田谷線世田谷駅辺りで鉤の手になって、代官屋敷前、ボロ市通りから用賀に抜け、さらに瀬田の交差点を抜けて、二子玉川にある渡しにつながる道でした。

○史跡・文化財

世田谷通りの北側が、後年、松陰神社と国士舘ができる場所です。近くには豪徳寺があります。一八八一（明治一四）年に作成された地図には、まだ松陰神社ができていません。松陰神社ができるのは、翌一八八二年です。この松陰神社の場所には、毛利家の抱え屋敷がありました。大名は江戸に上屋敷、中屋敷、下屋敷等がありましたが、これらは幕府が与えた屋敷になります。これに対し、抱え屋敷は藩が自分で購入した屋敷のことです。毛利家がこの世田谷の地に抱え屋敷を置いたのは、東海道に並行している矢倉沢往還（大山街道）に近いためです。ところが、幕末に毛利家は長州征伐で朝敵となったため、この抱え屋敷も荒らされてしまいます。世田谷区立郷土資料館に行くと、長州征伐の頃に地域住民が、抱え屋敷の立ち木を損壊した橋の補修に利用させてくれ、と願い出ている史料も残っている。抱え屋敷の研究をしている法政大学松本剣志郎准教授の話によると、抱え屋敷だけでなく、木戸孝允らが作った吉田松陰のお墓も荒らされたそうです。しかし、明治時代になり、松下村塾で学んだ吉田松陰の弟子たちが明治政府の要職に就くと、復興

運動があって、一八八二年に吉田松陰のお墓の場所は神社になります。これが松陰神社です。

一九二五（大正一四）年の地図を見ると、現在の区役所周辺には上町と下町があり、その北に元宿がある。国士舘や松陰神社は元宿の北にあります。この時には、世田谷線ができているのも分かります。世田谷線は、当時は玉川電気鉄道の支線で下高井戸線といい、一九二五年一月に三軒茶屋駅と世田谷駅間が開業して、五月には世田谷駅から下高井戸駅までつながります。

国士舘を取り巻くように流れているのは、烏山川です。烏山用水とも言います。三四号館の下にある緑道は、暗渠となった烏山川です。さらに下っていくと、池尻のところで目黒川に合流します。つまり、国士舘のある場所は高台になっており、高台に沿って烏山川が流れているということです。国士舘維持委員でジャーナリストの徳富猪一郎（蘇峰）は、『吉田松陰』（一八九三年一二月、民友社）という本の冒頭に次のような内容を書いています。「世田谷は丘陵で起伏があり、その間には林が点在して、ニワトリや犬の声が聞こえる。街道を外れて少し行くと、松陰神社がある」。これを読むと当時の世田谷の様子がよく分かります。

一九二九（昭和四）年に国士舘専門学校が創立されます。校舎は現在の正門付近にあり、その後ろには国士舘中学校の校舎がありました。国士舘中学校は、今日話す国士舘商業学校とも関わってきますが、国士舘専門学校に先立ち、一九二五年にできています。

「国士舘環境図」（図2）は、創立者の柴田徳次郎が述べたものをまとめた『国士舘と教育』（一九二六年、財団法人国士舘）という本についているものです。初版は一九二六年に出版されていますが、この地図は一九三一年の第七版のものです。この本は、国士舘が出版していますから、国士舘を中心にして、建物の配置が詳細に描かれています。講堂が現在の国士舘大講堂で、二〇一七（平成二九）年には国登録有形文化財になりました。国士舘専門学校の校舎はなかなか立派な建物で、真ん中に塔が建っている。当時としては非常にモダンな建物でした。現在一号館がある場所には教員館宅があり、六号館がある場所には国士神社がありました。国士神社は、国士舘の功労者を祀るためにつくられた神社ですが、松陰神社の古い社殿をもらって移築したものです。残念なが

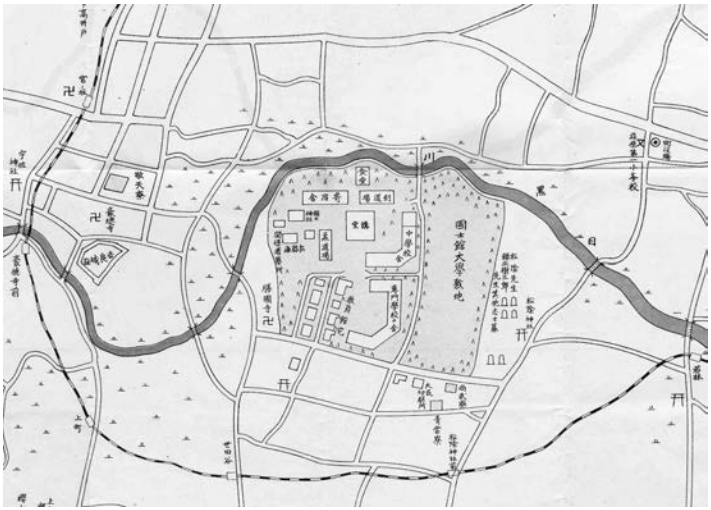


図２「国士舘環境図」1931 年２月 20 日

ら戦災で焼けてしまいました。国士神社の横には、一九三八年に建設した模造松下村塾の「景松塾」がありました。これは、山口県から松陰ゆかりの材料などを用いて、一旦現地で組み立ててから世田谷に運んで組み立て直した、かなり実物にこだわった建物です。現在、松陰神社にある模造松下村塾は国士舘にあった景松塾を寄贈したものです。

また、世田谷地域のあちらこちらに国士舘の寮がありました。豪徳寺の裏にあるのは敬天寮です。豪徳寺の下にある「吉良城趾」とあるのは、現在の世田谷城址公園です。この地図では世田谷線の駅に豪徳寺前駅とありますが、この駅は現在ありません。そしてその近くにある宇佐神社というのは、現在の世田谷八幡です。ついでに言っておくと、勝国寺と国士舘の教員館宅の下の方に鳥居があります。これは乃木神社です。現在は、区役所の駐車場になっており、世田谷八幡の敷地内の世田谷招魂社に合祀されています。

国士舘周辺の文化財としては、世田谷の上町にある代官屋敷の主屋と表門が国の重要文化財です。他に東京都指定旧跡・文化財として、世田谷城址（東京都指定旧跡）や世田谷ボロ市（東京都無形民俗文化財）などがあります。ボロ市は毎年一二月一五・一六日と一月一五・一六日に行われますが、戦後の混乱期を経て、現在は、大場信邦氏らの働きかけで、地元商店会ら市民と区が開催を

管理するようになっています。先ほど話した矢倉沢往還（大山街道）沿いに、周辺の人たちが年末年始に購入する物を持ち寄り、市となりました。もともとは戦国時代の吉良家の時の六斎市が始まりと言われており、市が立つところに町ができていったということです。そういう世田谷の地に国士舘が移転して来たのです。

（2）麻布笄町から世田谷への移転

こうした環境のなかで、国士舘は一〇〇年以上存続しています。しかし、いろんな方々からの寄付があり、維持委員会があっても、中学校と専門学校だけの学費収入だけでは経営としては難しいものがあります。

経営難にも関わらず、国士舘はどのようにして世田谷の地に生き残ってきたのでしょうか。一九一八（大正七）年の国士祭を契機に世田谷への移転が決定しますが、学校施設を整備するお金がありません。当時、柴田徳次郎も関係者もまだ二〇代です。そんなに財があるわけではないので、皆さんから寄付を集めなくてはいけない。そこで発揮されたのが柴田徳次郎の個性です。非常に資金集めが上手なのです。「国士舘がなければ日本の国はおかしくなる。他にそんなところがあれば言ってくれ」と脅迫めいたことや、「国士舘がなければだめなんだ」と言ってお金を集めます。最初に寄付のお願いに行ったのは、柴田の出身地である福岡の北九州地方にある炭鉱山業主の麻生家です。当時、この地域には筑豊御三家と呼ばれた、麻生家・貝島家・安川家という三大鉱山業主がいました。この他にも、伊藤伝右衛門などの鉱山業主がいて、ここにも寄付を集めに行っています。もちろん三井や住友のような大財閥にも集めに行くわけです。それらの寄付金で移転先の世田谷に大講堂や寮などの学校施設を建設したのです。

（3）田園都市構想

移転当初、国士舘は青年大民団が経営していました。先ほど話した通り、国士舘の周囲は田園農村地帯でしたので、教職員も生徒も自給自足を原則とした寮生活を基本としていました。それが国士村というものです。生徒全員が寮に入り、毎朝起きたら剣道や柔道の訓練をする。一方で農作業をして、その収穫物で生活をする。さらに、農作物を近所の人たちに販売する。また、印刷、出版業

も計画していました。教職員用には館宅を建てて、モダンな町を作る。そこを中心とした理想田園都市構想を持っていました。この田園都市構想は、この頃イギリスから入ってきました。その一例として、関東では田園調布などの田園都市計画などがありますが、国士舘でもこうした構想を思い描き、国士舘を中心とした「国士村」という田園都市構想を持っていました。国士村の村長は、教員や学生のなかから選挙によって選ばれます。選ばれた村長は、任期である一カ月間絶対権限を持ちますが、行き届かないと責められる。そういう自治的な性格が強いものでした。

最初に出来た寮は、尚絅寮（しょうけい）と言います。「尚絅」とは中国の『中庸』に引かれた詩経の一節「衣錦尚絅」に基づく言葉で、錦の衣を着ていても外に見せないという意味です。わかりやすく言えば、ボロは着ていても心は錦と言いますか、表向きには粗末なものだが、心の中はすごく美しい、ということです。この言葉通りの寮生活を送りました。のちに回天寮もできます。ここに交通機関を整えようという構想もあり、理想的な田園都市を目指していました。

当時はまだ青年大民団という社会啓蒙教化団体が国士舘を経営していました。国士舘に中学校、専門学校などの諸学校が増えていくにつれ、次第に青年大民団から国士舘が分離独立していきます。そこで校舎などの建物が整備されると、国士舘は経営のため、それらを有効活用するようになります。

（4）労務者講習会

国士舘の母体である青年大民団は、社会啓蒙教化運動を行っていたこともあり、国士舘では施設や講師を活用した活動を積極的に行うようになります。学校の校舎などの建物は、夏休みには使われていません。そこで、使っていない校舎を利用して「労務者講習会」を開催します。

日露戦争以後、日本では資本主義が浸透して国民の階層化が顕著になります。都市においては新たにサラリーマン的な市民が増加するなど、社会が大きく変動した時代でした。そこで起こったのがストライキです。資本家と労務者の対立抗争が出てくる。そこで労資協調のために設立されたのが協調会で、実質的な運営は蓮沼門三を中心とした修養団が担っていました。協調会の会長は徳

川家達、副会長は協調会の設立者でもある渋沢栄一です。渋沢は『論語と算盤』という本を出していますが、論語という理念、算盤という商売・経済、この両方を調和させるという考えのもとに、協調会を支えていきます。協調会の事業の一つとして、この「労務者講習会」を国士舘で開催しました。一九二一（大正一〇）年の第一回開催が非常にうまくいったので、続けて四回開催しましたが、どの回も国士舘の対応が参加者に好評を得ました。そのような評判が届いたのか、渋沢が突然国士舘にやって来ました。そこで国士舘の方でも、ぜひ講演をしてくれとお願いしましてね。急遽、渋沢が大講堂で講演することになりました。渋沢は講演のなかで、教育をやるなら死ぬつもりでやりなさい、という論語の一節について話をしました。そこから、国士舘と渋沢の関係が生まれて、渋沢はその後、国士舘の維持委員になって金銭的にも国士舘の発展に協力するようになっていきます。

（5）日曜遊園

国士舘の施設が整備されると、国士舘関係者や一般地域住民にテニスコート等の運動施設を開放する、「日曜遊園」を行うようになります。先ほど言ったように、国士舘の周りは田園農村地帯ですから空気がいい。そういうことも売りにしていくわけですね。

これらの活動が大きく変化する契機となるのが関東大震災です。たまたま国士舘の建物は被害に遭いませんでしたが、都心の方はかなり焼けたので、国士舘の関係者が大講堂や寮などに避難して来ました。また地域の住民の方の援助活動もしました。その後、復興するにしたがって世田谷の町も変わっていきますが、これはまた次のところでお話します。

（6）国士舘講習会

国士舘は建物を有効活用していくために、夏には夏季講習会を行うようになります。もともと国士舘は寮を持っていますが、夏には学生は実家へ帰るわけですね。その間、寮を使って夏季講習会を開催していました。有名な講演者を呼び、参加者は小学校の先生が多かったみたいです。もちろん費用も取ります。時には埼玉県長瀞などで開催することもありましたが、基本的には世田谷の建物を使って開催していました。

同じ頃、国士舘の各学校で必修となっていた武道を活かして夏季文武講習会や武道大会、武道講習会なども実施して武道の教育普及にも努めました。その後、一九三一（昭和六）年八月から毎年夏には、世田谷地域の少年を対象にした少年武道講習会を行なっています。

2．世田谷地域の変化と国士舘商業学校

（1）関東大震災

国士舘が世田谷に移転後、まず校舎を活用して、そして次は武道を通して地域との関係を作っていきました。こうしたなか、世田谷が大きく変わっていく転機がありました。先ほど少しふれましたが、一九二三（大正一二）年九月に起こった関東大震災です。関東大震災によって東京の下町等は大きな被害を受けます。この震災を機に、世田谷地域の住宅化、商業化が急速に進んでいきます。先の話の中でも触れましたが、関東大震災の時、国士舘は地域住民等の避難協力を行なっています。国士舘専門学校の生徒たちが、避難民のために配給された米と塩鮭を、リヤカーを曳いて芝浦まで受け取りに行っています。

世田谷が大きく変わっていく中で、既に、一九二二年には三軒茶屋・松陰神社間のバス便が運行されます。運賃は二一銭です。三軒茶屋から国士舘まで二一銭ですから、決して安い料金ではありません。一九二五年一月には玉電下高井戸線、現在の世田谷線が三軒茶屋から世田谷まで開通します。元来、渋谷から二子玉川間で多摩川の砂利を運ぶための電車だったので「砂利電」とか、ゆっくり行くから「邪魔電」とか呼ばれていた時期もありました。同年五月には世田谷から下高井戸まで開業します。この誘致運動をしたのが先ほどの大場氏です。世田谷線が出来たことで世田谷は急速に変わっていきます。

（2）大場信続と国士舘商業学校

住宅化が進むと商業施設ができます。そうすると商業教育の必要性が高まります。商業教育誘致の中心となった人物が大場信続です。一八七九（明治一二）年に世田谷代官だった大場家に生まれ、一四代目の当主になります。東京帝国大学農科大学、現在の東京大学農学部の前身ですが、ここを卒業し、大学院まで行って農商務省、その後、宮内省帝室林野局の技師となり、耕地区画整理

事業に尽力された方です。玉電の誘致に際しては、敷設交渉を行います。そして、一九二一（大正一〇）年に世田谷信用販売購買組合、現在の世田谷信用金庫を設立します。初代理事長は息子の大場信邦が務め、その後も大場家が理事長を務めています。信続は国士舘商業学校の校長、松陰神社の氏子総代も務めていました。松陰神社は一八八二年にできますが、新しい神社のため氏子がいない。そこで長州出身の山縣有朋の依頼で、地元の大場氏が氏子総代となったのです。今も大場家が松陰神社の氏子総代をやっています。信続は上町にある桜小学校で、子どもたちの教育、特に農業教育に力をいれていました。桜小学校の近くにある実相院の住職佐々木義宣と二人、桜小学校で夜間の補習学校を開校します。こうした教育活動を通じて地域にも貢献していました。

（3）国士舘中学校の創設と農商補習夜間塾

ちょうどその頃、国士舘が世田谷に移転してきて、一九二二（大正一一）年九月に地域の少年などを対象にした中等夜学部を開設します。世田谷移転時に財団法人化して高等部を開設していましたが、第一期生として卒業したのは六人だけでした。学費だけでの経営ではやっていけるわけがなく、維持基金を設けて何とかやっていました。

当時の初等教育は、尋常小学校六年間と高等小学校二年間で、だいたい一四歳になりますが、ほとんどの人は中学校まで行かずに一二歳位で働き出していました。創立者の柴田徳次郎は、尋常小学校卒業後、高等小学校に進み、勉強のために一五歳で単身東京に出て、勤労学生として自分で学費と生活費を稼ぎながら芝中学、早稲田大学に行っています。

一九二二年に中等夜学部が、一九二三年四月には四年制で昼間の学校である中等部ができました。一九二五年四月には、国士舘において法令に基づく初めての学校である国士舘中学校ができます。現在の五号館の場所に、中学校の校舎がありました。国士舘中学校は、夜学ではなく昼間開校していますので、中学校の校舎は、夜間は空いています。そこで夜学塾を行いました。この夜学塾の初代塾長は大場信続、塾生は二四名、毎年だいたい二〇人位が入学してきました。夜学塾では国士舘教員が普通学を教えていました。普通学とは、一般的な教養です。

農業関係の授業は大場信続が行なっていました。まさに、世田谷地域と国士舘と共同して農業と商業の塾を発展させるという計画が始まりました。

（4）国士舘商業学校の創設

一九二五（大正一四）年夏から、国士舘中学校の校舎活用について、国士舘の柴田徳次郎などと世田谷町長や大場信続らが会談を重ねます。一九二六年一月には、国士舘から大場氏に対して商業学校の新設計画を提案しました。要は、国士舘中学校の夜間に空いている校舎を使い、夜間の商業学校を作る。そしてその経営と費用は、世田谷の六カ町村、世田谷町・駒沢町・松沢村・玉川村・目黒町・碑衾村が負担する、というものです。こうして国士舘商業学校を設立するための検討委員会ができますが、その中心になったのが大場信続です。国士舘設立の趣旨、商業学校の必要性、そして地域の環境が変化してきたこともちろんありますが、大場氏が今まで地域の教育を熱心にやってきたことが大きいと思われます。環境の変化に合わせた教育を大場氏がやろうとしていた時に、国士舘からの話があった。ただ大場信続は当時国士舘についてあまり理解していませんでした。

大場信続が書いた「私が国士舘を理解する迄」（『国士舘々報』二巻三号、一九二六年四月一日）という記事には、「国士舘はどういう学校かよくわからないが、高下駄を履いて汚い恰好をした壮士風の学生が歩いている。国粋とか何とか言っているので、そういう様な主義団体の学校だろう」と大場信続や地域の人たちは思っていたようで、「あまり関係を持たないでおこう」という状況であったようです。しかし、国士舘が、自分と同じように地域のための学校を作ろうとしているのを知り、いろいろ話を聞いて国士舘のことが少しずつ分かるようになってくると「聞くと見るとは全く正反対」の学校だったので「驚き且つ喜んだ」と書いています。こうして、地元の有力者に国士舘の良き理解者ができたわけです。これが国士舘商業学校の創立につながっていきます。大場信続は真の「士魂商才」、武士の魂で商いを行うという考えの持主でした。これは『論語と算盤』の渋沢栄一の考えに繋がるものでもあります。

国士舘商業学校設立の申請前に、大場信続から校長就任の事前了解を得ます。この流れで一九二六年二月二日、

国士舘大講堂に六カ町村の有力者が集まり商業学校の設立と支援について協議を行いました（写真1）。そして各町村長は、一九二六年以降、町村費から年額三〇〇〇円の補助金を支出すること、一〇年以内に商業学校の基本金三万円を寄付することが決まった。こうして、一九二六年三月四日に国士舘商業学校の設立が認可され、一二日には国士舘商業学校維持会が発足します。維持会には理事会も設置され、理事長には国士舘の理事長でもある柴田徳次郎が、校長には大場信続がそれぞれ就任します。国士舘商業学校は一九二六年四月三日に開校式を行いました。

写真１　国士舘商業学校創設相談会 1926 年２月２日
（『国士舘と教育』第７版、1931 年２月 20 日）
後列右から４人目が柴田徳次郎、５人目が大場信続

（5）商業学校の教育課程など

このようにして、国士舘が場所を提供し、六カ町村が経営を行うという、国士舘商業学校ができました。もちろん夜間部です。当時、一四歳までは初等教育、小学校教育がありますが、卒業後は、実業教育、あるいは普通教育の中学校があります。さらに中学校の上に高等学校があります。商業学校は、一四歳以上で初等教育を修了するか同程度の学力を有していれば入学資格がある中等教育機関です。開講は夜間の午後五時から午後九時まで、修業年限は四年、収容定員は四〇〇人、入学定員は一〇〇名です。国士舘中学校の教員も授業を担当しました。例えば、中学校の校長であった長瀬鳳輔は歴史を担当す

る。柴田玉宗は、創立者柴田徳次郎と同じ「柴田」姓ですが創立者一族ではなく、アメリカに留学した経験がある僧侶で、英語を教える。斎村五郎・小川忠太郎、彼らは剣道の達人なので剣道を教える。藤嘉三郎・村岡健八が柔道を教える。校長の大場信続は修身を教える。大場は無給です。ボランティアで校長をやって、教壇にも立っていました。この商業学校は非常にフレキシブルに色んな科目に対応していました。

国士舘商業学校は、地域の生徒を吸収するため、地域社会、少年青年の状況・要望に合わせて学則変更を繰り返します。前期・後期の二部制を導入することで青年の入学機会を増やし、選科生制度を設けて希望する学科目だけを選んで学ぶことができるようにしました。また、タイプライターのように、当時職場に新しく導入されてきたものへの技術習得科目を取り入れていく。そして、商業学校から普通学校に進学する生徒も出てきますので、普通学科も重視していくなど、進学に合わせたものへもフレキシブルに対応しています。それから、給費制といってお金がない優秀な学生に対しては学費などを免除する制度も作っています。また、当時は徴兵制がありますが、商業学校に行っていると、兵役の期間が六カ月間以内ですが短縮するという特典もあります。これは大きいですね。徴兵に行く期間が短くなりますよ、という制度を設けたのです。教練というのは軍事教練と体育を合わせたようなものです。実業学校や中学校に行かない場合は、青年訓練所規程により、青年訓練所で軍事教練を受ける必要がありました。でも実業学校等で教練を受けた者は、青年訓練所修了者と同じ資格が与えられ、兵役が短くなったのです。国士舘中学校では軍人や退役軍人が来て教練を指導していましたから、商業学校でも軍事教練を取り入れました。「本校卒業者は青年訓練所修了者と同一資格を得られ在営年限短縮の特典あり」と、これは国士舘商業学校学則に書いてあります。こういう配慮も必要でした。

このように、地域の要望によって創立された商業学校と国士舘は互いに連携しながら、また、中等教育機関として地域貢献の役割も果たしながら戦後教育へとつながることになります。

（6）国士舘専門学校（高等教育機関）の創設

一九二九（昭和四）年には国士舘専門学校ができました。一九一八（大正七）年に出た大学令により、私立大学の設置が認められるようになりました。国士舘も大学創設を目指していましたが、この時は第一次世界大戦後で、いくつかの恐慌、特に昭和恐慌の時期と重なってしまいます。大学を作るには数百万円のお金がかかるので、創立者の柴田徳次郎も、この時期は経営に苦労していたようです。

3．学校法人国士舘と世田谷（戦後）

（1）至徳学園

その後、太平洋戦争がはじまり、一九四四（昭和一九）年、国士舘商業学校は、政府方針で強制的に工業学校に転換させられます。戦争遂行のためには、商業よりも工業が大事だということです。戦後になると、国士舘自体もGHQの占領下で至徳学園という名称に変更することになります。また、武道や国家主義的なことを行なった団体や学校が潰されて行きます。国士舘も武道を教えていましたが、教員免許を取得できたうえ、武道の専門学校ではなかった。武道の専門学校で武専と呼ばれていた武徳専門学校は潰されてしまいます。

至徳学園と名前を変えた頃が、国士舘にとって戦後で一番苦しい時期でした。国士舘工業学校は、戦後再び商業学校へ転換しますが、国士舘商業学校ではなく至徳商業学校に校名が変り、一九四八年には至徳高等学校の定時制課程商業科へと改組します。一九五三年、再び学園名を国士舘に戻し、国士舘高等学校定時制商業科になります。つまり、現在も続く国士舘高等学校の定時制課程は、国士舘商業学校から続いているということです。その後、定時制商業科は一九九四（平成六）年に募集を停止して定時制課程普通科となり、二〇〇四年には昼間制になります。商業学校はこうしてなくなっていきました。

地域との関連としては、戦前の一時期、一九四〇年の頃でしたが、商業学校が国士舘から自立しようという動きがありました。しかし、当時の状況から、それはなかなか困難であるという判断に至り、国士舘商業学校として残りました。

（2）国士舘再興

一九五三（昭和二八）年に国士舘短期大学国文科と経済科ができます。一九五六年には体育科が増設されて、一九五八年に国士舘大学となって体育学部が設けられる。短大体育学科から大学の体育学部になる過程には色々と困難がありましたが、それについては『国士舘百年史　通史編』を見ていただくとわかると思います。戦後の難しい時期であったので、すんなり短大ができたわけでも、すんなり大学になったわけでもありません。それを支えてくれた方々のおかげでもあります。一九六一年には政経学部が、その後、工学部、法学部と文学部、21世紀アジア学部、経営学部ができて現在まで続いているわけですね。

（3）寄宿舎（寮）生活と地域

国士舘で特徴的なのは、戦前から多くの寮があるということです。校内だけでなく、周辺地域のあちこちに国士舘の寮が点在しています。豪徳寺の裏には敬天寮、現在の法務局辺りには青雲寮、その他にもあちらこちらに借り上げ寮があります。戦後は校舎の一部を寮として利用する時もありましたし、校内にある教職員用の館宅が空いたら、そこを寮にすることもありました。また、一九六一（昭和三六）年から入学するようになった女子学生用に女子寮もあって、楓寮・桜寮・常盤寮がありました。一九六六年に、現在はゲストハウスになっている清節寮ができます。一方、男子学生用には、一九六七年に鶴川、現在の町田キャンパスに望岳寮が、一九六八年一月には世田谷に松陰寮ができます。寮があるということは、そこで学生が生活するわけですから、地域商店街が活性化します。

（4）世田谷地域との関連

国士舘と地域との関係は、昭和四〇年代は高校生等の暴力事件が多発して、地域、特に地元梅丘などの商店街からは非常に敬遠されていました。そうした中、剣道部、レスリング部、柔道部などがオリンピックや全国大会などで優勝した時は、商店街でパレードをやりました。一九七六（昭和五一）年のモントリオールオリンピックにレスリングで出場して金メダルを獲得した伊達治一郎選手の時は車でパレードをしました。他にもいろいろなこ

とをしていますが、こうしたイベントの時は地域の商店からも協力していただいている。このようにイベントを通して徐々に信頼を取り戻していったわけです。最近では、松陰神社と松陰神社通りの商店街が主催する「幕末維新祭」に国士舘中高の生徒が扮装して出ています。私も松陰神社の境内や、国士舘大講堂やメイプルセンチュリホールで講演をするなど、色々協力しています。その他、若林地区と地域の災害支援協力の協定を結んだり、あるいはこの地域にある小中学校の防災訓練の指導をしたりしています。資料室室長の長谷川先生も今度地域の講演をされるということを伺っています。こういう取り組みで地域との色々な関係を築いています。また、近くの中学校からは職場体験学習の場として、国士舘史資料室などが選ばれています。いろんな形で協力していますから、今、皆さんが国士舘に勤めているということで私の学生時代のような肩身の狭い思いをすることはもうないと思いますので、むしろ胸を張って仕事をしていただきたい。

国士舘も、今までに多くの教職員をはじめとする学園関係者の努力によって、ここまで発展し、施設も立派になりました。あとは皆さんが、若い方が新しい伝統を作っていくということです。そして、これまでの国士舘の伝統やそのアイデンティティーを調べたいと思う時には「国士舘アーカブズ」としての国士舘史資料室があります。『国士舘百年史　通史編』を、少しずつ読んでいかれるといいでしょう。戦前編は短いですし、戦後も新たな事実が加わっていますから。「通史編」を読んで、疑問を持ったら「史料編」も見て、さらにもっと調べたいと思ったら資料室に行けば、職員が対応してくれると思います。歴史は残すだけではなく、継承し、未来を創造する手がかりです。今後皆さんも更なる国士舘発展のため、引き続き尽力いただきたいと思います。

まとめ

このように、一口に一〇〇年と言っても、これまで国士舘が創立以来行なってきた存続のための努力は並大抵なものではなかった。これは『国士舘百年史　通史編』の序文に理事長も書いていますが、国士舘が歩んだ道のりは決して平坦な道ではありません。国士舘は、現在、

世田谷キャンパスだけでなく、町田や多摩キャンパスもありますし、楓の杜や多摩南野など新しいキャンパスもできました。各キャンパスでは、それぞれ学部の特徴を持って、防災や体育健康問題を通じて、地域との関わりを持ってやっています。21世紀アジア学部のある町田キャンパスでは海外との文化交流等もしている。そして世田谷キャンパスが情報発信の中心となって全体をまとめています。この三つのキャンパスが協力しながら総合的な働きかけをしていく。戦前の国士舘商業学校に見られる地域との連携・貢献のあり方は、かたちを変えつつ引き継がれてきています。これはやはり続けていってほしい。

創立者の柴田徳次郎は、自分は大きくなったら佐倉惣五郎のようになりたいと言っていました。佐倉惣五郎は、いわゆる義民として伝承されており、農民のために自分が犠牲となったとされる人物です。彼のように、世のため人のためになるんだ、柴田はそういう志を持っていた。時代は変わりましたが、皆さんも何かそのような志を持って、学生のため、地域のため、日本のため、世界のために尽力していただきたいと思っております。

本日は、少し端折って話をしましたので、国士舘創立のことなどは、『国士舘史研究年報　楓原』第一三号に掲載されている前回講演会の記録を読んでいただければ良いかと思います。なにかありましたら質問してください。これで私の話は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

※本稿は、二〇二二（令和四）年九月六日に、世田谷キャンパスのメイプルセンチュリーホール（ＭＣＨ）五階第一会議室で行われた第二回学園史講演会「世田谷地域の変遷と国士舘　―地域と歩む「活き方」・国士舘商業学校を中心に―」をもとに、加筆修正したものである。

令和４年事業報告

国士舘史資料室の活動

新型コロナウィルス（COVID-19）への対応

令和2年から続くCOVID-19の世界的な大流行により、本学及び当室においては例年実施してきた活動が制限されてきたが、令和4年はCOVID-19対策に留意しながらも、昨年と同様の対面授業の実施に加えて、学園の諸行事の再開が顕著となった。例えば、昨年2年ぶりに学内関係者限定で開催された学園祭（楓門祭・秋楓祭）は、本年の実施日2日間のみではあったものの、世田谷キャンパスへの入構制限を設けることなく例年通りの開催となり、盛況をみせた。しかし原則、学外者の入構は引き続き制限という状況下にあった。

そのなかで令和4年の当室の活動は、ほぼ例年通りの状況に復しつつあり、特に公開・活用の活動で好転をみた。令和2年3月3日よりCOVID-19対応のため臨時閉室としていた資料展示室と閲覧室は、令和4年4月1日から学内関係者限定であるものの再開放とした。また、国士舘大講堂を会場に実施した創立記念展示は、特に学園祭期間の入構開放を受けて、一般来場者を含む多くの方々を迎えることができた。さらに、創立記念展会期中においては、東京都主催「東京文化財ウィーク」にも3年ぶりに参加して、事前申込制での対策を講じながら、国士舘大講堂の特別公開を実施した。なかでも新たな取り組みとして、博物館学芸員実習の受け入れや文化財である国士舘大講堂の啓発活動を実施した。但し、学外での調査・収集には、積極的に十分な活動を行う状況には至っていない。

1　調査・収集

(1) 主たる資料調査

令和4年1月から12月までに実施した資料調査並びに収集の主な活動は以下の通りである。

学内調査

(1) 教務課保管資料調査

日　時：令和4年1月12日・6月1日・11月16日

調査者：熊本好宏・小林訓子・村瀬貴彦・清水邦俊

(2) 文学部教育学科（初等教育）音楽室保管資料調査

日　時：令和4年7月7日

調査者：熊本好宏

(3) 経理課保管資料調査

日　時：令和4年11月15日

調査者：熊本好宏・村瀬貴彦・清水邦俊

(4) 楓の杜キャンパス及び多摩南野キャンパス調査

日　時：令和4年12月15日

調査者：熊本好宏・村瀬貴彦

(6) 学内発行物印刷データ収集調査

学内部課室で定期に発行される発行物のうち発行物原本とあわせて印刷製本後の印刷データ（PDF）の収集を本格化した（随時実施・部課室及び印刷製本業者）。

(5) イラク古代文化研究所資料調査

日　時：令和4年6月23日

（以降随時・含電子化調整会）

調査者：熊本好宏

学外調査

(1) 上塚司関連資料調査

日　時：令和4年1月24日、1月25日、1月28日、3月18日、4月15日、4月25日、5月9日、5月13日、6月1日、6月9日、6月15日、6月21日、7月1日、7月19日、7月21日、8月24日、9月8日、9月14日、9月22日、10月8日、10月22日、10月26日、11月9日、11月14日、11月28日、12月2日、12月6日、12月20日

調査者：熊本好宏

(2)元学長朝倉正昭家資料調査

日　時：令和４年４月22日

調査者：熊本好宏

(2) オーラル調査

(1)アンケート調査

本年は関係者へのアンケート調査を実施しなかった。

(2)オーラル・ヒストリー調査

本年は関係者へのオーラル・ヒストリー調査を実施しなかった。

(3) 主な寄贈資料

・学章等

寄贈者：善林義一氏（昭和48年３月文学部卒）

・「国士舘専門学校の全貌と生活」（『みかど』昭和12年、岡山・関西中学丙申会）抜粋写寄贈

寄贈者：高杉英明氏（昭和58年３月政経学部卒）

・『千葉教育』（大正11年６月、「国士舘夏季講習会」掲載）等寄贈

寄贈者：寺島正芳氏（映画史研究家）

・斎藤仁関連記事掲載『近代柔道』創刊号（昭和54年11月）等寄贈

寄贈者：菰田忠利氏（昭和46年３月文学部卒）

2　整理・保存

(1) 資料目録作成状況

本年（令和４年12月31日現在）の国士舘史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は別表（次頁）の通りである。

(2) 資料電子化・保存措置

本年は、主に以下の資料について電子化及び修復・保存処置を専門業者に委託した。

・財務部資料経理元帳（平成初期）電子化

・教務部資料短期大学国文科、文学部（昭和40年代）成績原簿電子化

・新聞『熊本大民』電子化

・上塚司関連資料電子化

収蔵資料及び目録化の進捗状況

名称	内容	令和２年度 目録化済	令和３年度 目録化済	令和４年度 目録化済
法人記録史料	法人（教学を含む）組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	17,469	17,977	19,141
発行物	学内で刊行される出版物	9,136	9,892	10,406
写真・その他の映像・音声資料	国士舘に関わる写真その他の映像・音声資料	12,493	12,614	12,666
物品資料	国士舘に関わる物品資料	1,098	1,109	1,451
調査収集資料	学内外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	5,921	6,302	6,439
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	2,079	2,139	2,217
合計		48,196	50,033	52,320

（令和４年 12 月 31 日現在）

・馬具保存箱作成委託
・卒業アルバム（戦後～昭和末期）電子化及び写真切出

3　利用・公開

(1)　収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

国士舘史資料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成23年４月に閲覧室を整備し、同時に資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムのＷＥＢ公開を開始している。収蔵資料検索システムを利用後に、資料閲覧のために来室する利用者も増加傾向にあったが、令和２年４月以降、ＣＯＶＩＤ-19対策の観点から資料の閲覧サービスを停止していた。しかし令和４年３月から、原則として学内者に限り資料展示室と閲覧室を再開した。

平成28年10月３日に学内教職員向けに公開した「国士舘アーカイブズ」は、令和４年12月現在、収蔵資料検索システムには２５９９２件、基礎年表検索システムには３５０８件、基礎データ集（略年表など）の内容であり、

学内限定で利用できる。一昨年からのＣＯＶＩＤ-19の影響下で、大学の遠隔授業への支援をはじめ、学内教職員からのレファレンスへの対応に有効に活用されている。

(2) ホームページ（令和４年更新）

［お知らせ］

・梅ヶ丘校舎で「国士舘の歴史」展を開催（令和４年２月24日）
・新型コロナウイルス感染防止に関する国士舘史資料室の対応について（４月１日）
・国士舘史研究年報　第13号を刊行しました（４月５日）
・梅ヶ丘校舎で「大正昭和期の国士舘学生」展を開催（６月３日）
・博物館実習を実施しました（８月５日）
・梅ヶ丘校舎で「変わりゆく世田谷の風景と国士舘」展を開催（８月５日）
・学園史講演会（第２回）を開催しました（９月８日）
・「自校の伝統を学ぼう」講話を行いました（９月12日）
・国士舘大講堂の一般公開（東京文化財ウィーク２０２２）の事前申込について（９月26日）
・梅ヶ丘校舎で「学園祭の歴史」展を開催（９月30日）
・創立記念「徹底解剖！国士舘大講堂」展を開催しました（11月９日）
・梅ヶ丘校舎で「国士舘大講堂」展を開催（12月２日）

［主な更新］

・資料室トップページに、資料展示室及び国士舘大講堂の３６０度パノラマビューを追加

［刊行物］

・『国士舘史研究年報　楓原』第13号の全頁（ＰＤＦ）掲載（４月）

アドレス

http://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html

(3) 教育普及活動

（1） 常設展示

国士舘史資料室では、柴田会館４階に展示室を設け、国士舘の歩みを示す関係資料を一般公開している。国士舘の創立者柴田徳次郎にゆかりの資料や、

創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する貴重な資料などを展示している。

なお、COVID-19対策のため、令和2年3月より令和4年3月末まで臨時閉室としていたが、令和4年4月1日から原則として学内者限定で再開した。

開室日時　月曜～金曜10：00～16：00
（日曜土曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）
※観覧無料

令和4年1月～12月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数　463名
　学生・生徒　418名
　教職員　45名
・学外者数　69名
　卒業生　10名
　一般　59名
・総観覧者数　532名

(2)梅ヶ丘校舎展示コーナー企画展（出張展示）

世田谷キャンパス34号館（梅ヶ丘校舎）1階の展示コーナーにおいて、次の企画展を開催した。なお令和4年9月12日～15日の間は、壁面でのキャプション設置など演示方法の改善を図るため、展示コーナー内壁面改修工事を実施した。

・令和4年2月～5月「国士舘の歴史」展
・令和4年6月～7月「大正昭和期の国士舘学生」展
・令和4年8月～9月「変りゆく世田谷の風景と国士舘」展（博物館実習成果展示）
・令和4年10月～11月「学園祭の歴史」展
・令和4年12月～令和5年2月「国士舘大講堂」展

(3)イベント企画展（出張展示）

令和4年は、大学のオープンキャンパスが昨年同様の事前予約制となったものの行事日程が増加となり、他学高等学校教諭対象の大学入試相談会も学内での開催となり、資料室ではそれぞれ大講堂での対応を実施した。また、昨年はCOVID-19対策のため、大講堂での対応が見送られた大学の父母懇談会は、通例通りの開催となった。

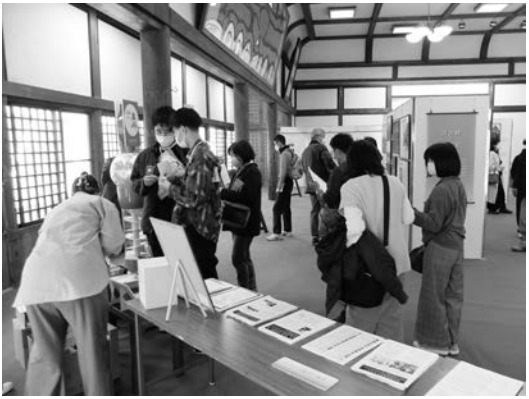
それぞれのイベント開催日には、国士舘大講堂に

おいて写真パネルによる企画展示「国士舘の歴史」を開催した。それぞれの実施日及び入場者数は、次の通りである。

・３月27日（日）　オープンキャンパス　３２０名
・４月13日（水）　入試部個別見学会大講堂他見学対応
・５月13日（金）　大学入試相談会（高校教員対象）30名
・５月22日（日）　父母懇談会　３４５名
・６月12日（日）　オープンキャンパス　４３１名
・７月２日（土）　オープンキャンパス　51名
・７月９日（土）　オープンキャンパス　１００名
・７月17日（日）　オープンキャンパス　２７１名
・７月24日（日）　オープンキャンパス　２３９名
・７月31日（日）　オープンキャンパス　２０３名
・８月６日（土）　オープンキャンパス　１６７名
・８月28日（日）　オープンキャンパス　２３３名
・９月25日（日）　オープンキャンパス　１５５名

（４）創立記念展「大講堂」（出張展示）

創立記念企画展示「徹底解剖！　国士舘大講堂」



創立記念展

創立記念展ポスター

展を、10月26日（水）～11月4日（金）に国士舘大講堂で開催した。これは国士舘創立105周年と国士舘大講堂文化財登録5周年を記念して、文化財としての国士舘大講堂を紹介する企画展とした。なお、展示期間内の11月2日（水）・3日（木）に実施された令和4年の楓門祭（大学学園祭）は、キャンパスの入構制限を解除し、一般入場者の来場を可能として開催された。あわせて11月3日には、ホームカミングディが3年振りに実施され、卒業生をはじめ多くの来場者を得ることとなった。

この状況下で、例年学園祭期間中に実施していた「東京文化財ウィーク」には、COVID-19対策のため10月29日（土）に3年振りに参加し、事前申込制で大講堂の一般公開を実施した。また創立記念企画展の期間中は、文化財登録5周年を機に本年から本格化させた大講堂の啓発活動の一環で企画した大講堂グッズガチャ（カプセルトイ）を設置した。本ブースには順番待ちがでるほどの盛況となり、期間中399件の参加を得た。

入場者は、全期間で2271名、うち東京文化財ウィーク（10月29日）は66名、楓門祭期間（11月2日・3日）は2047名であった。

(5)文化財「国士舘大講堂」愛護啓発（定期開放等）

本年の文化財登録5周年を機として、学内外に国登録文化財「国士舘大講堂」の意義や特徴を更に周知し、あわせて文化財保全への啓発等を図ることを目的として、新たに定期的な大講堂の開放と関連グッズ制作を企画・実施した。

・国士舘大講堂「開放週間」の実施

従来、大講堂は主に学園行事等で使用する現状にあり、学生・生徒が大講堂内に入って建造物に親しむ機会は限定的であった。この現状に鑑みて、大講堂を定期的に開放し、かつその意義や特徴の理解を高めるため、在学生が解説を実施する本企画を創出した。各月の1週間（月曜～金曜日）を大講堂「開放週間」と称して、大講堂を定時に開放し、参加者に対しては解説を担当する学生キャスト（学生ガイド）が15分程度のガイドを行った。ガイド役の有志学生は、必要となる知識をオンデマンド等で修得できるよう工夫を施した。なお大

講堂キャスト（12月末現で6名）は、オープンキャンパス等の出張展示でも、大講堂での解説・対応を実施してもらった。開放週間の実施日及び入場者数は、次の通りである。

大講堂開放週間

5月16日～20日　23名
6月20日～24日　18名
10月17日～21日　13名
11月14日～18日（各日2回実施）　21名

・国士舘大講堂グッズ（含ガチャ）

国登録文化財としての建造物保全への啓発を図る一環として、大講堂グッズ制作を学生キャストの企画のもとで実施した。本年は大講堂を象徴する意匠（マーク）をあしらったメモ帳・一筆箋を作成して、学内外に配付するなどした。また、趣旨に沿った大講堂ガチャ（カプセルトイ）を新設し、創立記念展示期間中から大講堂において展開した。実施にあたっては、創立一〇〇周年記念事業（広報プロジェクト）で使用された機器を転用し、大講堂グッズをはじめ先の記念事業で制作された「コクシバ」グッズも交換品とした。なお全投入金は、創立１１０周年記念事業募金（「大講堂の保存及び防災対策」を含）として取り扱った。

（6）レファレンス（含資料閲覧）

令和４年1～12月のレファレンスは、学内・学外

合わせて123件であった。また、本年4月再開した資料閲覧は延べ8件の対応であった。

(7)講義等支援

平成21年4月の国士舘史資料室発足後、資料室を利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学各学部で開講する初年次教育関連ゼミの支援依頼や、博物館学関連の講義支援については、毎年恒例となっている。

昨年度に引き続き、政経学部開講「フレッシュマン・ゼミナール」、経営学部開講「フレッシュマンゼミナール」、文学部教育学科開講「教育学の基礎A」に設けられた自校史教育のコマについて講義支援を実施した。政経学部開講の講義については、昨年同様に遠隔授業用に作成した映像教材等を提供したほか、一部の講義では追加での支援対応を行った。また講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施している。

主な講義等の支援と担当者は、次の通りである。

・新採用教職員研修支援：4月1日職員11名（於大講堂等）、4月2日教員16名（於大講堂）（熊本好宏）

・政経学部政治行政学科「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援：全24ゼミ（遠隔講義、1年生）、5月26日柴田怜ゼミ25名（於大講堂・資料展示室）（熊本好宏）、6月1日織田健志ゼミ26名（於柴田会館3階・資料展示室）（熊本好宏）6月2日柴田徳光ゼミ27名（於大講堂・資料展示室）（熊本好宏）、7月14日板山真弓ゼミ28名（於大講堂・資料展示室）（熊本好宏）

・体育学部体育学科自校史教育支援：4月5日新入生ガイダンス（於多摩キャンパス、1年生260名）（熊本好宏）

・文学部教育学科初等教育コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子講師「教育学の基礎A」講義支援：4月21日（於大講堂、1限1年生90名）、4月28日（講義、1限1年生90名）（熊本好宏）

・文学部教育学科初等教育コース河野寛教授・青木聡子講師・室町さやか准教授「教育学の基礎A」講義支援：5月12日（資料展示室、1限1年生88名）、6月16日（講義・大講堂、1限1年生50名）

（熊本好宏）

・経営学部「フレッシュマンゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学、１年生）：４月28日顔菊馨ゼミ41名、４月28日粟野直之ゼミ・山下修平ゼミ合同84名（小林訓子・畠山典子）、５月２日島崎杉雄ゼミ41名（熊本好宏・畠山典子）、５月６日三谷華代ゼミ・佐藤香織ゼミ合同86名（熊本好宏・畠山典子）、５月６日冨田新ゼミ43名（熊本好宏・畠山典子）、

・５月27日文学部史学地理学科考古・日本史学コース１年生学外研修「吉田松陰・井伊氏と国士舘ゆかりの地をめぐる散策」講義及び展示室見学ほか対応（１年生１５８名）（熊本好宏・畠山典子）

・６月９日文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」対応（於資料展示室、２限２年生30名）（熊本好宏）、10月13日・12月１日「博物館情報・メディア論」対応（於34号館展示コーナー・大講堂、３限３年生22名）

・７月27日経営学部山下修平ゼミ資料展示室見学対応（４限３年生12名）

（8）発行物

・令和４年１月　国士舘大講堂メモ帳・一筆箋制作

・令和４年３月11日　『国士舘史研究年報　楓原』第13号発行

（9）講演会

学園史講演会は、百年史編纂事業後の成果周知の一環として、学内教職員が沿革史及び理念・伝統等への理解を深めることを目的に企画したものである。昨年11月に引き続いて講師：名誉教授佐々博雄氏に講師を願った本回は、職員研修委員会（ＳＤ・総務部人事課）との調整のもと、入職５～６年目の若手・中堅職員15名を対象とした「学園史研修」にも位置づけての実施とした。なお講演会後は、前回同様に録画映像をオンデマンド配信して全教職員の視聴を可能とした。

・９月６日（火）　第２回学園史講演会

講師：名誉教授佐々博雄（元百年史編纂委員会副委員長）氏「世田谷地域の変遷と国士舘」

（10）博物館実習の受け入れ

本年から博物館学芸員資格課程の資格取得要件で

ある博物館実習（館園実習）を実施し、実習生の受け入れを開始した。博物館実習は、資料室の業務を通じて博物館の一連の諸業務に対する理解を深めるとともに、主に公開業務である企画展示の立案から展示作業までの業務を実践する内容とした。その成果は、梅ヶ丘校舎の展示コーナーにおける企画展示として一般公開を実施した。

博物館実習

・7月29日（金）～8月5日（金）　博物館実習文学部4年生1名

(11)中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から職場体験学習の依頼を受けて、生徒の受け入れを行った。資料室の職場や社会マナーについて学び、このうち「展示」を主な課題として取り組んでもらった。

・10月4日（火）～6日（木）　世田谷区立梅丘中学校2年生2名

4　室の構成

(1)　職員（令和4年度）

室　　長　長谷川　均（理事・副学長・文学部教授）
事　務　長　田中　弘（令和4年3月末日退任）
　　熊本　好宏（令和4年4月1日着任）
担当事務長　村瀬　貴彦（令和4年10月1日着任）
準　職　員　畠山　典子
　　小林　訓子（令和4年9月30日退職）
　　清水　邦俊（令和4年10月1日着任）

アルバイト学生

安西ルナ　梅澤友花　北田晶
新谷優輝　角田優衣　丸山藍花
横尾夏菜　赤羽祐汰　鈴木怜亜
馬場英梨香　出浦曜裕　寺垣卓敏
諸川涼　山口杏里
（限大講堂キャスト）丹澤麻樹
福崎隆成

(2) 施設の概要

所在地　〒154－0023
東京都世田谷区若林４－31－10

名　称　柴田会館

構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造、地下２階、地上４階

資料室施設面積
２階：舘史事務室15・3㎡、舘史研究室38・4㎡、第１史料収蔵庫63・8㎡、第２史料収蔵庫21・5㎡（平成23年３月設置）、第３史料収蔵庫16・2㎡（平成28年８月設置）、第４史料収蔵庫21・1㎡（平成28年８月設置）
４階：室長室13・7㎡、閲覧室13・7㎡、展示室119㎡
34号館（梅ヶ丘校舎Ｂ棟１階）
展示コーナー：13・1㎡

5　活動日誌

（令和４年１月～12月）

【１月】

12日　教務課保管資料（成績原簿等）調査・整理作業（以降複数回実施）

25日　『国士舘大学新聞』第527号「国士舘史資料室だより44　創立者没後50年（畠山典子）」掲載

【２月】

24日～５月31日　企画展「国士舘の歴史」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）

【３月】

10日　全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於帝京大学総合博物館）（熊本好宏）

11日　『国士舘史研究年報　楓原』第13号発行

31日　事務長田中弘退任（異動）

【4月】

1日　事務長熊本好宏着任
新採用職員大講堂見学対応（11名）（熊本好宏）

2日　新採用教員大講堂見学対応（16名）（熊本好宏）

5日　体育学部体育学科新入生オリエンテーション自校史教育支援（於多摩キャンパス、1年生260名）（熊本好宏）

13日　入試部個別見学会大講堂ほか見学対応（熊本好宏・学生アルバイト角田優衣・丸山藍花）

21日　文学部教育学科初等教育コース「教育学の基礎A」講義支援（於大講堂、江川陽介・郡司菜津美・本間貴子、1限1年生90名）（熊本好宏）

22日　元学長朝倉正昭家資料調査（熊本好宏）

25日　『国士舘大学新聞』第528号「国士舘史資料室だより45　約90年前の式辞から（熊本好宏）」掲載

28日　文学部教育学科初等教育コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子講師「教育学の基礎A」講義支援（講義、1限1年90名）（熊本好宏）
経営学部顔菊馨ゼミ「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（1限1年生41名）（畠山典子・小林訓子）
経営学部粟野直之ゼミ・山下修平ゼミ合同「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生84名）（熊本好宏・畠山典子）

【5月】

2日　経営学部島崎杉雄ゼミ「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（1限1年生41名）（熊本好宏・畠山典子）

6日　経営学部三谷華代ゼミ・佐藤香織ゼミ合同「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（1限1年生86名）（熊本好宏・畠山典子）
経営学部冨田新ゼミ「フレッシュマンゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（2限1年生43名）（熊本好宏・畠山典子）

12日　文学部教育学科初等教育コース河野寛教授・青木聡子講師・室町さやか准教授「教育学の基礎A」資料展示室見学対応（1年生88名）

13日　入試説明会にて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者30名）

16日～20日　大講堂「春の開放週間」（学生ガイド、入場者23名）

22日　父母懇談会にて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者３４５名）

26日　政経学部経済学科柴田怜ゼミ「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援・大講堂見学対応（２限１年生25名）（熊本好宏）

27日　文学部史学地理学科考古・日本史学コース１年生学外研修「吉田松陰・井伊氏と国士舘ゆかりの地をめぐる散策」講義及び資料展示室見学ほか対応（１５８名）（熊本好宏）

30日　イラク国バスラ大学・イラク大使館員の学長表敬訪問につき大講堂・展示室見学対応（14名）（熊本好宏）

【6月】

1日　政経学部政治行政学科織田健志ゼミ「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（５限１年生26名）（熊本好宏）

2日　政経学部政治行政学科柴田徳光ゼミ「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援・資料展示室見学対応（２限１年生27名）（熊本好宏）

3日～7月1日　企画展「大正昭和期の学生」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）

9日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」資料展示室見学対応（２限２年生30名）（熊本好宏）

12日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者４３１名）

16日　文学部教育学科初等教育コース河野寛教授・青木聡子講師・室町さやか准教授「教育学の基礎Ａ」講義支援・大講堂見学対応（１限１年生50名）（熊本好宏）

20日～24日　大講堂「初夏の開放週間」（学生ガイド、入場者18名）

【7月】

1日　『防災総研ニュースレター』第10号『国士舘アーカイブズ』にみる『防災』第１回　『防災』を科学する『資料』（熊本好宏）」掲載

2日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開

催（於大講堂、入場者51名）

9日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者１００名）

14日　政経学部経済学科板山真弓ゼミ「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援・大講堂・資料展示室見学対応（２限１年生28名）（熊本好宏）

17日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者２７１名）

24日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者２３９名）

25日　『国士舘大学新聞』第５２９号「国士舘史資料室だより46　文化財としての大講堂１（畠山典子）」掲載

27日　経営学部山下修平ゼミ資料展示室見学対応（３年生12名）

29日～８月５日　博物館実習実施（文学部４年生１名受入）

31日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者２０３名、兼博物館実習）

【８月】

５日～９月９日　企画展「変わりゆく世田谷の風景と国士舘」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー、博物館実習企画）

６日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者１６７名）

28日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者２３３名）

【９月】

６日　第２回学園史講演会（兼職員研修）「世田谷地域の変遷と国士舘」（名誉教授佐々博雄氏）（於ＭＣＨ５階第１会議室、参加者24名）

７日～９日　高大接続行事・国士舘高等学校大学施設見学対応（於大講堂・含学生ガイド対応、１年生３７０名）

７日～９日　内部監査書類調査

９日　「自校の伝統を学ぼう」講話（於柴田会舘研修室・資料展示室、杖道部・居合道部学生８名）（熊本好宏）

12日～15日　34号館Ｂ棟１階展示コーナー内壁面改修工事

14日　内部監査実地監査ヒアリング
21日　内部監査確認通知（ヒアリング）
25日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者１５５名）
30日　準職員小林訓子退職

【10月】

1日　職員（担当事務長）村瀬貴彦着任、準職員清水邦俊着任
1日　『防災総研ニュースレター』第11号「『国士舘アーカイブズ』にみる『防災』第２回　国士舘大講堂と関東大震災（熊本好宏）」掲載
3日～11月30日　企画展「学園祭の歴史」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）
3日　中大接続行事・「国士舘の歴史・伝統を知る」講話・見学対応（於資料展示室・大講堂ほか・含学生ガイド対応、国士舘中学校１年生55名）（熊本好宏）
4日～6日　区立梅丘中学校職場体験（2年生徒2名）
13日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館情報メディア論」34号館展示コーナー見学対応（3限3年生22名）
14日　大講堂（国登録有形文化財）グッズメモ帳等学内配付
17日～21日　大講堂「秋の開放週間」（学生ガイド、入場者13名）
25日　『国士舘大学新聞』第５３０号「国士舘史資料室だより47　文化財としての大講堂２（畠山典子）」掲載
26日～11月４日　創立１０５周年記念・大講堂登録５周年記念「徹底解剖！国士舘大講堂」展開催（於大講堂、入場者２２７１名）
29日　東京都文化財ウィーク大講堂公開（事前申込制・入場者66名）

【11月】

14日～18日　大講堂「紅葉の開放週間」（学生ガイド、入場者21名）
15日　柴田会舘防火講習
19日　淑徳大学アーカイブズ４名来室対応
22日　港区麻布地区地域情報誌編集委員来室対応

【12月】

1日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館情報メディア論」大講堂見学対応（3限3年生22名）
2日～令和5年2月28日　企画展「国士舘大講堂」展開催（於34号館B棟1階展示コーナー）

資料提供のお願い

国士舘史資料室では、国士舘の歴史に関する資料や情報のご提供をお願いしております。学生時代の日記・手帳・写真・講義ノート・実習用具などをお持ちでしたらお寄せください。資料は事前連絡の上、着払いにて下記にお送りください。

（送付先）
学校法人　国士舘　国士舘史資料室
〒154‐0023
東京都世田谷区若林 4-31-10　柴田会館 2 階
TEL　03-3418-2691 / FAX　03-3418-2694
E-mail　archives@kokushikan.ac.jp

国士舘史資料室規程

（趣旨）

第1条　この規程は、国士舘史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

（目的）

第2条　資料室は、国士舘の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

（資料室長）

第3条　資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2　資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

（職員）

第4条　資料室に、必要な職員を置く。

（学術調査員）

第5条　資料室に、学術調査員を置くことができる。

2　学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3　学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

(1)　本学の理念及び本学史に関すること

(2)　資料の収集・整理・保管等に関すること

(3)　年史・資料集等に関すること

(4)　その他資料室に関わる学術的事項

（専門員）

第6条　資料室に、専門員を置くことができる。

2　専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

(1)　資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集

(2)　年史・資料集等の企画及び編纂

(3)　その他資料室に関わる専門的事項

3　専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（収集資料）

第7条　資料室は、次の資料を収集する。

(1)　国士舘の建学の精神に関する資料

(2)　国士舘の発展の経緯に関する資料

(3)　国士舘が設置する諸学校に関する資料

(4)　国士舘の創立者及び先人に関する資料

(5)　その他国士舘に関する資料

（所蔵資料の開放）

第8条　資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2　資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

（資料の貸出し）

第9条　資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

（資料の管理）

第10条　資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附　則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

『国士舘史研究年報　楓原』執筆要項

国士舘史資料室では、『国士舘史研究年報　楓原』に掲載する、国士舘に関わる論文や国士舘在学中の思い出を綴った原稿などを募集します。執筆を希望される方は、必ず事前にお問い合わせください。

◇注意事項

・原稿は書き下ろしとし、他誌との二重投稿はご遠慮下さい。

・編集の都合上、原稿の修正や次号以降への掲載をお願いする場合、または掲載をお断りする場合もあります。

・原稿は、『国士舘史研究年報　楓原』および学校法人国士舘のウェブサイト（ＰＤＦ）で公開されますが、これらの著作権はすべて学校法人国士舘に帰属します。

◇原稿について

・原稿はＡ４判（横長）、四〇字×三〇行、縦書きで提出してください。図表はこの限りではありません。

・原稿は四〇〇字詰原稿用紙に換算して、次の枚数を目安にしてください。（図表・図版・写真・註を含）

論　文	五〇枚程度
研究ノート	二〇～四〇枚程度
国士舘を支えた人々	五～七枚程度
国士舘の思い出	五～一〇枚程度

・写真・図版等で掲載・転載許可が必要な場合は、執筆者が許可を得てください。

・写真や表計算ソフト等で作成した図表は、別ファイルにして提出してください。

・ご提出いただいた原稿は返却いたしません。

・原稿締切　毎年九月末日頃（翌年三月刊行予定）

◇問い合わせ先

学校法人国士舘　国士舘史資料室
〒１５４－８５１５
東京都世田谷区世田谷４－２８－１　柴田会舘２階
ＴＥＬ：０３－３４１８－２６９１
ＦＡＸ：０３－３４１８－２６９４
Email：archives@kokushikan.ac.jp

編集後記

『国士舘史研究年報　楓原』第14号をお届けします。「資料紹介」では、資料室で所蔵している資料から、国士舘関係の「歌」の資料を集めてみました。かなりの数を収録することができましたが、未収録の歌はまだ多く存在しています。ここに収録できた歌は、印刷物に掲載されている場合もありますが、ノートの切れ端やプリントなどに手書きで書かれているものも少なくありません。本来すぐに捨てられてしまうものですが、たまたま「資料」として資料室に収蔵されたために、日の目を見ることができたものです。学生時代のこうした「資料」をお持ちの方は、是非、国士舘史資料室にご提供願います。

（畠山典子）

執筆者紹介

後藤　智輝　野田市郷土博物館学芸員

国士舘史研究年報　楓原　二〇二二　第14号

令和5年3月10日発行

編集　国士舘史資料室

発行　学校法人国士舘

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八―一

TEL〇三―三四一八―二六九一

FAX〇三―三四一八―二六九四

E-mail　archives@kokushikan.ac.jp

印刷　河北印刷株式会社

ISSN 1884-9334